

41332

教科書文庫

| |
|------------|
| 4 |
| 210 |
| 51-1941 |
| 2500026585 |
| 26585 |

516

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

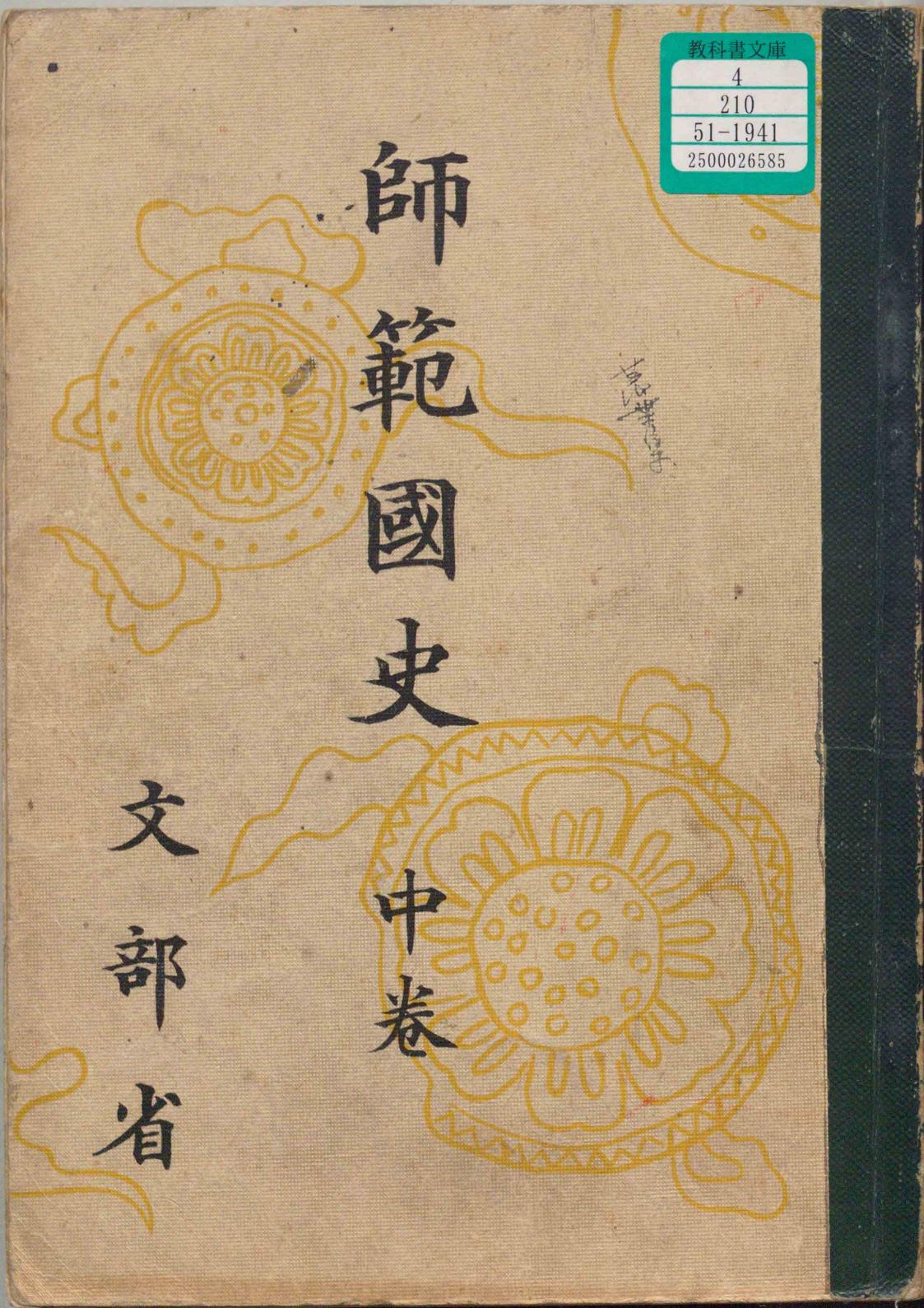
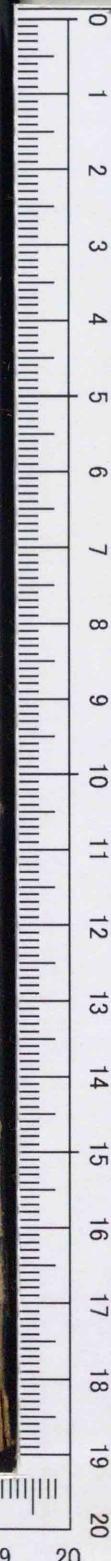
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

教科書文庫

4

210

51-1941

2500026585

師範國史

文部省

中卷

登録番号
26585

| | |
|---|---------|
| 分 | 375.932 |
| 類 | M |

広島大学図書

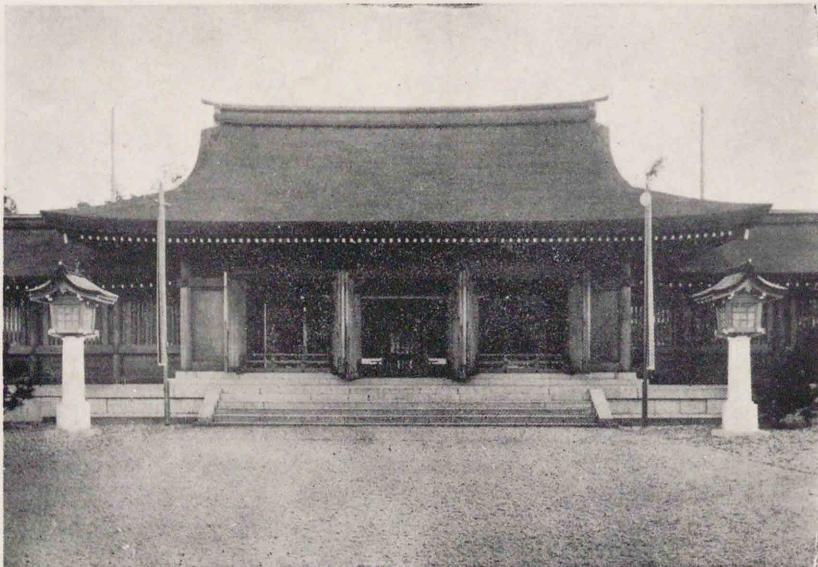
2500026585



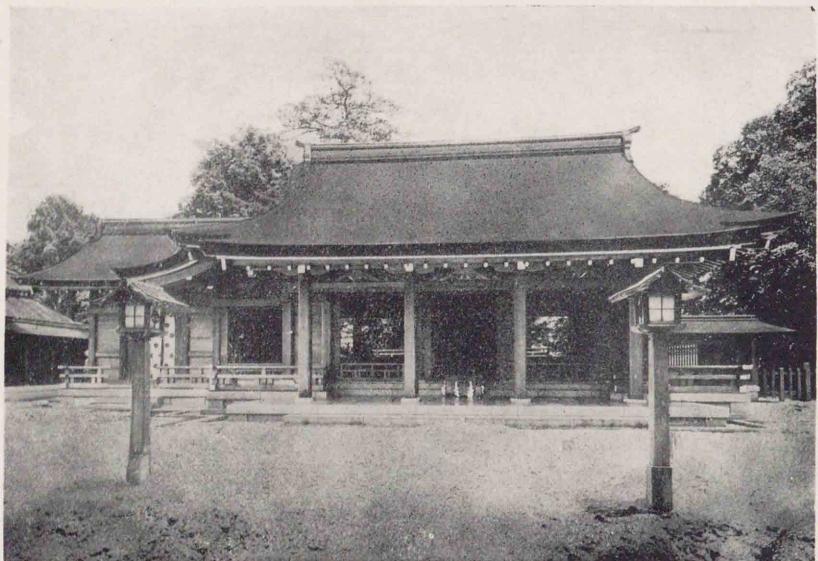
天壤無窮の神勅

豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は、是れ吾が子孫の
王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。
行矣。寶祚の隆えまさむこと、當に天壤と窮りな
かるべし。

御歷代表



宮 神 野 吉



宮 神 瀨 無 水

目 次

| | |
|---------------|-----|
| 第八章 武家政治の成立 | 一頁 |
| 一 鎌倉幕府 | 一頁 |
| 二 幕政の推移 | 九頁 |
| 第九章 武士道と元寇の撃攘 | 一九頁 |
| 一 武士道の發達 | 一九頁 |
| 二 元寇と國民精神 | 二九頁 |
| 第十章 鎌倉時代の文化 | 四四頁 |
| 一 武家と文化 | 四四頁 |
| 二 新文化の様相 | 四八頁 |
| 第十一章 建武中興 | 六七頁 |

目 次

- 一 鎌倉幕府の滅亡 六七頁
二 建武の新政 七八頁
三 吉野時代 八六頁

第十二章 室町時代の政治と文化

- 29 一 室町幕府 一〇一頁

- 二 東山文化 一一一頁

第十三章 戰國時代の國民生活

- 30 一 戰國の治亂 一三〇頁

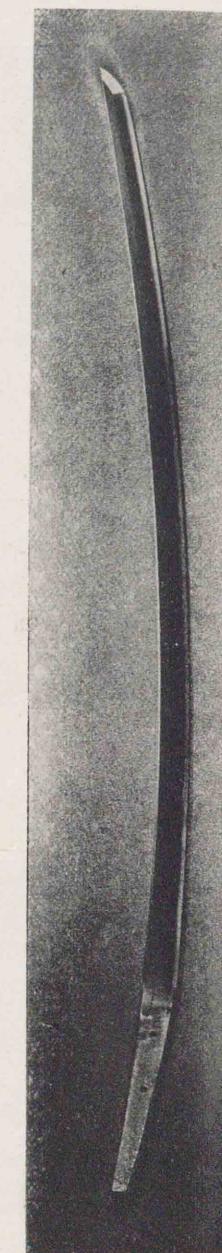
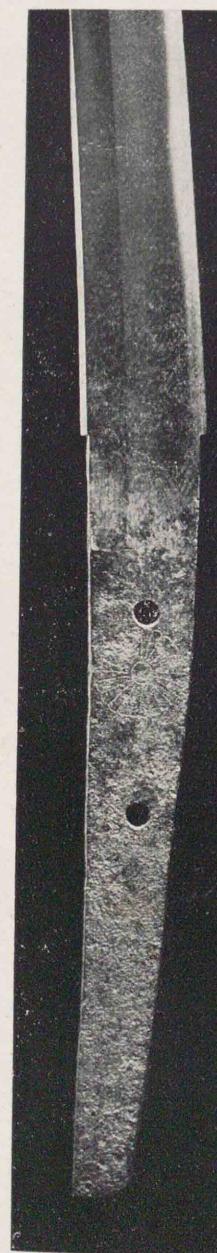
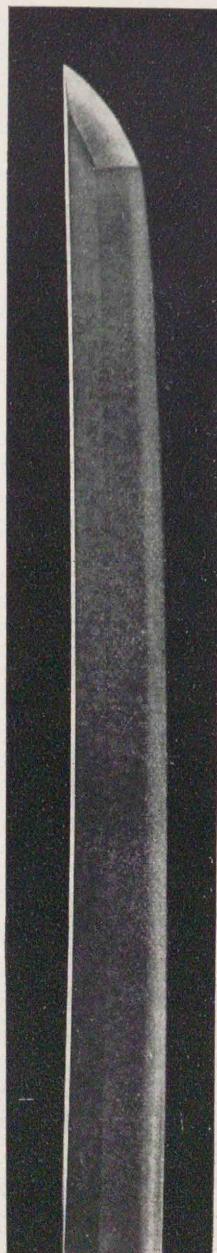
- 二 海外發展と經濟活動 一四四頁

第十四章 安土桃山時代の精神

- 36 一 海内の統一 一六二頁

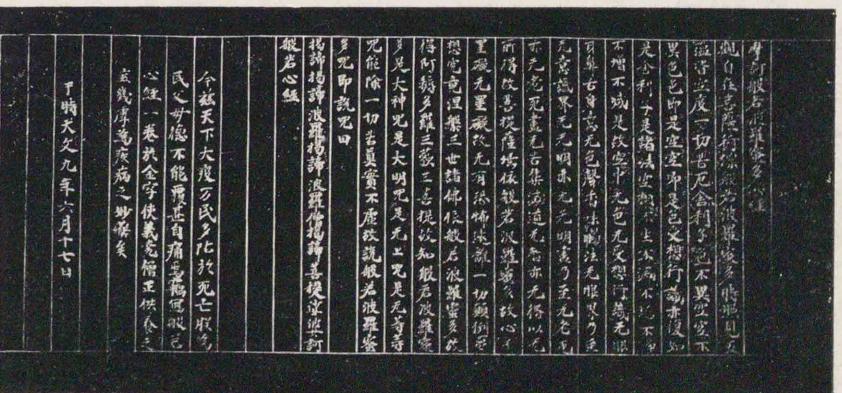
- 二 政治の整備と文化の新生面 一七四頁

- 三 國民の海外發展 一八四頁



敵國降伏

筆宸天山龜



筆宸天良奈後

師範國史 中卷

第八章 武家政治の成立

一 鎌倉幕府

過渡期の混亂

（一）武家政治の由來 平安時代に於ける世態の推移は、律令政治を漸く不振ならしめ、これに伴なつて莊園の増大、武士の勃興を見たが、その間都鄙に幾多の争亂が起り、治安の喪失に脅されて、人心の動搖たらぬものがあつた。武門の葛藤が先づ平氏の制霸に歸して、世に小康が訪れたものの、驕る平家は、攝關政治の夢を追うて翼賛の誠を致さず、國內の靜謐をもたらすべき政治的秩序は、回復さるべきもなかつた。

武家政治の
成立過程

源 賴 朝 像

源氏の再起によつて紅白の旗幟東西に動き、平氏が亡びてやがて國內が平ぐと、源賴朝を中心とする源氏の武威によつて、ともかくも世に治安がもたらされ、こゝに武家政治が開始されることとなつた。

武門の出自に鑑み、武家興隆の沿革をたどれば、武家政治は、武士が、みづから種を蒔いた禍亂の叢をみづから刈り收めて、成立せしめたものといへる。

政治機關の
設立過程

③幕府の開設 伊豆に兵を擧げ、やがて鎌倉を根據とした賴朝は、士風剛健の東國武士が次第にその勢望の下に歸服するに及

び、治承四年、先づ侍所を設けて將士監督の府となし、その長官たる別當に、譜代の武將和田義盛を當てた。その後、源氏の勢威が大いに伸びると、賴朝は、壽永三年新に公文所を設け、大江廣元を別當に、中原親能等を寄人に任じて庶政を統べしめ、ついで問注所を置いて訴訟裁判を掌らしめ、三善康信をその執事とした。

かくて兵馬倥偬の中に、軍事・行政・司法の三機關が漸次設置せられ、治亂に處する簡易な政治組織が形成された。

やがて平氏が亡びて形勢の歸趣も明らかとなつたが、鎌倉の勢威は、未だ全國を制することが出來なかつた。たまく義經の奔放、賴朝の猜疑に端を發して、兄弟の間に不和が釀され、義經謀叛の風評がしきりに起つた。よつて賴朝は、大江廣元が義經の追捕、騒亂の防止を考慮して案出した守護・地頭の制を採用し、朝廷の御裁可を得て、文治元年家人即ち部下の將士を全國に配

守護・地頭の
設置

海内の統一

置し、守護・地頭たらしめた。守護は、國毎に配して管内の治安を保たしめるものであり、地頭は、公領莊園の別なく置いて主に兵糧米の徵收に當らしめるものであつた。かくて守護・地頭の設置により、義經の反抗の不安が除かれたばかりでなく、その武力は自ら國司・莊司を壓して、鎌倉を中心とする地方軍政の組織が樹立され、武家政治の堅固な地盤が形成されるに至つた。

賴朝はまた、朝廷に奏請して議奏十人を定め、九條兼實をその首座として朝務を集議聞奏せしめ、以て公家と武家の疏隔を防いだ。賴朝は更に邊境の鎮撫に意を注ぎ、九州には鎮西奉行を置いてこれを治めしめたが、奥羽の地は、藤原秀衡が平泉三代の富強を誇つて、守護・地頭の制も、なほこゝに及ばなかつた。しかも秀衡は、舊誼を重んじてひたすら義經の擁護に努めたので、賴朝はこれを制壓し、以て海内の統一を完からしめようとした。

やがて秀衡が卒し、その子泰衡の代になると、藤原氏の勢威も漸く傾き始め、これを機に、賴朝は藤原氏壓迫の度を加へた。泰衡は賴朝の勢威を恐れて、義經を衣川の館に襲殺したが、賴朝はなほも義經隠匿の罪を責め、みづから大軍を率ゐて泰衡を伐ち、程なくこれを滅した。こゝに三代の榮耀は、一睡の中に秋風颯々の廢墟と化した。かくて賴朝は、奥羽統轄の要職を置き、平泉の遣制によつてこれを管せしめ、以て海内平定の宿望を達した。

鎌倉の武威が全國に及ぶとともに、さきに設けられた幕府の機能も漸く活潑となつた。建久二年、公文所が政所と改められ職制が整備したことは、その現れである。かくて紀元一千八百五十二年、後鳥羽天皇の建久三年、賴朝が征夷大將軍に任せられるに及び、武家政治はその基礎を固くし、幕府は更にその體を整へるに至つた。

組織の簡易

(三) 幕府の組織 古來征夷大將軍は、征夷即ち蝦夷征討の使命をもつ臨時の官職であつたが、この頃から多く武門の棟梁が任せられ、兵馬の權を握つて治亂を定める當時の官職と見なされるに至つた。また幕府の稱も、從來近衛大將を指すものであつたが、賴朝が右近衛大將に任せられ、更に征夷大將軍に補せられたことによつて、こゝに征夷大將軍が政務を執る館を呼ぶものと變つた。隨つて鎌倉幕府の組織も、事態に應ずる政務機關として、漸を逐うて整備されて行つた。中央の三機關、地方の守護地頭制及びその後の制度の擴充にかかる過程が見られる。また幕府は、賴朝を棟梁と仰ぐ一族郎等の結合いはゆる御家人組織を地盤として設立されたため、その職制も極めて簡易なものであつた。

公家の援助

幕府の組織に対する公家の援助には、見るべきものがあつた。

當時京都に於ては、家格固定して人材登用の道が閉ざされ、有能の士にして卑官に留る者の中には、武家と結んで自家を興さうとする者が少くなかった。即ち、大江・中原・三善の諸氏は、緣故を求めて鎌倉に下り、吏務の練達を以て賴朝に重用され、職制の整備に盡力した。特に、大江廣元の貢獻は絶大であり、草創期の諸制度は、主として彼の立案に基づくものであつた。

(四) 武家政治成立の意義 賴朝は、幕府の組織に於てこそ公家を重用したけれども、平氏の覆轍に鑑み、武士たる深き自覺の下に、制度の活用、士風の振肅に努め、以て幕府政治の新儀たる實を失はしめざるやう心掛けた。建久元年に任せられた權大納言・右近衛大將の兩官を程なく辭したことを始め、神佛の尊崇を勧め、奢侈を禁じ文弱を戒め、進んでは尙武の精神を鼓吹するなど、治に居て亂を忘れる心構は、よく武家生活の指標となつた。こ

武家政治の
缺陷

れに則り、源氏一黨の武士が緊密な結合を保つたればこそ、草創の武家政治が、混亂の世態に安定をもたらし得たのである。

かくて全國武士の統制に成功した頼朝も、武家本位に奔つて國民的自覺に徹することが出来なかつた。武家が國民たる分を越えて、家門の利害に齟齬たるに至り、やがて起る武家政治僭越の因子は、この國民的自覺の缺如に胚胎する。政所の別當、いはゆる執權の職が、大江廣元から北條時政へ移つた過程は、まさにその第一歩であつた。かくて、臨時應急の武家政治は漸く常態視せられ、その固定沈滯によつて病弊を釀すこととなつた。

攝關政治確立以來の政治的變遷に鑑みると、幕府開設の功罪は、頼朝一人の負ふべき所ではないが、後世の武士から右大將家と尊崇され幕府の開祖と仰がれただけに、頼朝のいはゆる天下草創の政治の影響には甚大なものがあつた。即ち、武家政治の

武家政治の
影響

推移をたどれば、功少くして報多きを望み時流に棹さして小成に安んじた武士の慢心が看取される。皇室の尊嚴は絶対であり、幕威の昂揚によつて毫も搖らぐべきものではないが、國內鎮靜のこの機にして、國體の明徴が忽諸に附され、爾後七百年の長きに亘つて、多數國民の歸趣を誤らしめる端緒が開かれたことは、恐懼の極みであつた。海内鎮定の功に對する過褒に陥つて、大義名分を正すことを忘れてはならない。

○二 幕政の推移

源氏の凋落

○源氏の滅亡 平氏の覆轍に鑑み自戒に努めた頼朝は、よく武家勢力を確立し、巧みに海内を制馴したが、猜疑の心に骨肉の不和をよび、義經・範頼を除いてみづから羽翼を殺いだため、家運は年を逐うて凋落し、代つて外戚・北條氏の勢威が漸く増して來た。

源氏の再起から幕府の開設に至る間

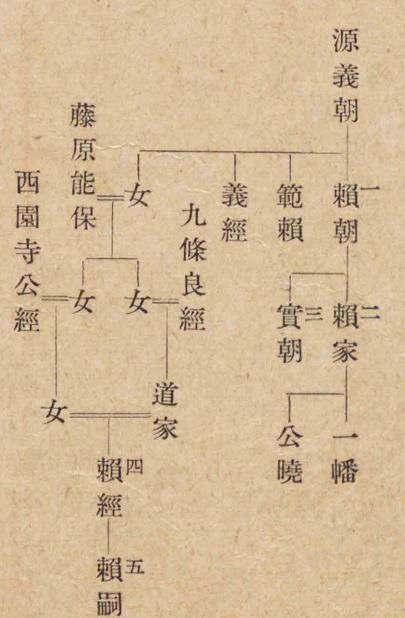
に、北條時政は、賴朝にその女政子をめあはし、また東國平定の方略を企画するなど、少からぬ貢獻をなした。随つて北條氏は、幕府に

隠然たる勢威を有し、賴朝の生前は後見として機務に參與し、その薨後は幕政の表面に立つて、重要な地位を占めるに至つた。

北條氏の壇

將軍たること數年にして賴朝が薨すると、とりあへず長子賴家に遺蹟繼承の勅許があり、三年有半の後賴家は改めて征夷大

鎌倉將軍系圖



將軍に補せられた。賴家が賴朝の遺蹟を繼ぐと、時政はその子義時及び大江・三善・中原等幕府の首脳と合議して庶政を裁決し、以て賴家の聽斷を封じた。かくて、賴家が將軍たることわづかに一年、幕府は賴家の薨去を佯り奏したので、朝廷では、弟千幡を征夷大將軍に補せられ、實朝の名を賜はつた。かかる經緯は、將軍職が世襲の職に非ざることを物語るとともに、幕府首脳の不遜・越權を窺はしめる。しかも、實朝が將軍職に補せられると、時政は、廣元と並んで政所の別當となり、幕政の實權を握つて執權政治の端緒を開くに至つた。

性温雅にして盡忠の志厚く、文學を好んで萬葉の歌の心に生

北條氏系圖(一)



○は執權を示す

源氏の滅亡

吉妻鏡
東壁



源實朝像
義盛等は北條氏の陰謀によつて亡び、兵馬の權も今は北條氏の手中に歸して、大江廣元の庇護を除いては、殆ど孤立無援に陥つた。家運のものはや久しきらざるを察した實朝は、顯官を拜して家名を顯さうと欲し、累進して正二位右大臣に昇つた。かくて實朝は、承久元年、拜賀の禮をゆかりも深き鶴岡八幡宮に行つた際、義時に使嗾せられた賴家の子公暁の兇刃に斃れ、深々たる夜陰の雪を血に染めた。公暁また北條氏の好餌となつて義時に殺され、こゝに源氏の正統は

わづか三代にして絶えた。

幕府の危機

③執權の專横 源氏の正統が絶えたことは、幕府にとつて一つの危機であつた。もとより將軍職は、世職として源氏の嫡流に許されたものではないが、源氏の滅亡は、將軍職の宣下を不可能ならしめる恐れがあつた。こゝに政子は、義時と謀つて源家の遠縁に當るわづか二歳の藤原頼經（ふじわら の よりよし）を京都から迎へることを奏請し、頼經下向の後、政子は簾中にあつて庶政を統べた。政子は、明敏よく頼朝の事業に與つて内助の功多く、寡婦となつて薙髪の後も、果斷以て政局に當り、將士の心を收めて世に尼將軍と呼ばれたが、殊に時政亡き後は、幕府の要として重きをなした。

朝廷に對し奉つて恭順であつた源氏の滅亡を機に、兵馬の權は朝廷に奉還さるべきであつた。しかるに北條氏は、幼主を擁して幕政の確保を圖り、陪臣の不遜は漸く露骨にならうとした。

よつて朝廷では、頼經に將軍職を容易に宣下あらせられなかつた。しかも執權義時の言動、不遜の度を加へるに及び、時に院政を聽し召して英武に瓦らせられた後鳥羽上皇は、夙に懷き給へる政權回復の御志の實現を圖り給うた。かくて承久三年、義時追討の院宣が下つた。事態を憂へた政子は、事變の因由、頼朝の恩澤を説いて家人の去就を促したところ、諸將みな感激して、一死舊恩に報いることを誓つた。こゝに義時は、臣子の大義を説く一



後鳥羽天皇御影像

業室光親

北條氏の無道

子泰時(とき)の言に耳を傾けず、大江廣元の獻策を容れて、泰時・時房等に大軍を授け、東海・東山・北陸の三道から京都に攻上らしめた。これを邀撃する官軍は、寡兵にしてしかもよき統帥を得ず、處々に敗れて、賊軍は京都を犯した。

かくて、戦況の歸趨が明らかになると、義時は倒幕に參與した卿相・武將を斬り、更に武將の頑是なき幼兒までも殺した。殊に、恐れ多くも皇位の御事に容喙し、後鳥羽法皇・土御門上皇・順徳上皇を煙波遙かな島々に遷し奉つた。その殘虐ですら罪輕からざるに、未曾有の大逆無道に至つては、萬死に値するものといふべきである。

變後の推移

◎貞永式目　變後、幕府は益々その基礎を固めた。即ち、勤皇の朝臣・武士の所領三千餘箇所に對し、有功の將士を配して新補地頭たらしめ、從來の本補地頭よりも、これを優遇した。かくて北條

公家
式目
泰時

泰時の政治

氏は大いに聲望を高め、武士に對する統制を強固ならしめた。また幕府は、變後泰時・時房を六波羅に留めて京畿を鎮壓せしめ、こゝに六波羅探題が開設された。爾來幕府は、これを鎌倉の耳目として重視し、常に一族を補して、近畿・西國の施政に當らしめるることとした。かくて幕府の基礎は愈々固く、變後四年の間に、義時・廣元・政子が相ついで世を去つたが、その勢威は微動だにしなかつた。

義時の後を嗣いで執權

となつた泰時は、先づ評定衆を設けて庶政を衆議に諮り、道を明惠(高辨)に聽いて、寬厚寡欲、部下を慈しみ庶民を憐んで政治に勵



明 惠 像

んだ。やがて賴經に將軍職の宣下があつて、京・鎌倉の風塵もをさまつた。

また泰時は、賴朝の遺法を守つて諸政特に裁判の公正を期すべく、三善康連に命じて右大將家の徒を成文化せしめ、貞永元年御成敗式目五十一箇條を制定した。この式目は、時の年號に因んで貞永式目とも稱せられ、簡明直截に行政・司法に關する法規を定め、敬神・崇佛等隨處に武家の道德を含めたもので、後世永く武家法制の基準となつた。

その立法の方針は、律令制定の精神を酌みつゝ、實用を旨として形式の簡易化、

式目制定の得失

第八章 武家政治の成立

式目
の得失

貞永式目の
制定

右大將家の徒
の成敗式目

道理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

理

道

律法 理徳

式目
訴訟判決
了結の仕事

内容の具體化に努め、以て法制を士民の生活に即せしめることに存した。されば、式目は律令と相剋すべきものではなく、泰時が律令を漢字、式目を假名に譬へたやうに、律令の不備を補ひ、法制の醇化を進めたものであつた。しかし、泰時が朝廷の御裁可もなく、かかる重大な武家法制を制定したことは、律令を海内の龜鏡、式目を關東の鴻寶となせる本末關係を以てしても、なほ僭越の沙汰といふべく、執權政治不遜の性格を反映してゐるのである。

貞永式目の成立は、賴朝の血縁たる賴經の將軍職拜任、執權泰時の才腕と相俟つて、幕府安定の鼎足をなし、變態ながら武家政治は、時局收拾の一段落を劃した。承久の變を去ること約十年、幕府の開設から時を経ること四十年である。

幕府の安定

第九章 武士道と元寇の撃攘

一 武士道の發達

武士道の意
義

① 武士の生活と道徳 草深き鄙に生まれて野人禮に習はぬ武門武士も、その勢威を増し地位を高めるにつれて、生活に對する自覺を深め、武士獨特の道徳を育成した。武門の棟梁は、郎從の武功に對して恩賞を與へ、郎從は、これに感佩して報恩の義理を辨へる。代を重ねるにつれ、棟梁は郎從を信頼すること愈厚く、郎從は棟梁を敬慕すること益々深く、主従の情義は緊密の度を加へ、主従一體身命を拋つて、ひたすら家名を揚げようと努める。かかる主従の恩義、家門の譽を重んずる精神が根幹となり尙武・質朴を始めとして、治亂に處する生活の規範・風尚の數々が形成

武
士
道
の
沿
革

された。これがいはゆる武士道である。

武士道には、武家勢力の發展に伴なふ生活環境の變化によつてもたらされた變遷推移の沿革がある。先づ地方散在の武士群が、やがて源平兩氏を中心として統轄され、その棟梁に教養・識見のすぐれた人物が現れるに及び、一族・郎等またその感化を受けて、武士道は自ら練磨された。更に、幕府の開設とともに武士の地位が頓に向上升し、賴朝の土風作興によつて、武士の生活に規範が成立するに及び、武士道も、家人の組織を地盤として擴充洗煉されるに至つた。かくて武士道は、右大將家の擬の基礎となり貞永式目の根本となつて、時代の安定勢力たる武士の結合を愈々固からしめた。しかも、鎌倉初期に確立された武士道は、後世の武家社會に繼承されて、永く武家道德の基準となつたのである。

上古の國民
生活と武士
道の源流

③ 武士道の淵源 武士がその生活規範としてはぐくんだ武士道も、深く探れば、上古の國民生活にその淵源がある。恩義につらなる主従の情義も、出自を尊び家門の譽を重んずる精神も、すべてこれ上古に於ける皇室と國民、氏上と氏人間の情義、敬神崇祖を根幹とする氏族一體の精神の再生に外ならず、尙武・質朴の生活態度もまた、上古の國民生活に淵源するものであつた。

武士道の原型をなすかかる上古の醇風美俗は、氏族制度の崩壊後も、國民傳統として繼承され、國民道德の要権をなした。大陸文物の受容によつて都人の生活に激變を見た世にも、萬葉の歌にしのぶ丈夫振が國民生活の底流をなしてゐた。忠誠の心は、大君の醜の御楯と出で立つ決意、山ゆくも海ゆくも大君の邊にこそ死なん覺悟を生み、敬神崇祖の念は、遠つ神祖のおくつきに著く標たてん心となり、尙武の精神は、衛士の焚く火と燃え防

萬葉の丈夫
振

東人の氣風
と武士道

人の研ぐ劍と光り、千萬の寇をもひしぐ勇猛心をはぐくんだのである。

かかる武士の精神は、平安時代に入つて兵制が弛緩した後も、都の風に染まぬ東國に残つて、額には矢を立つとも背には立てじとする東人の氣風を存續せしめた。思ふに、東國の人士は、征夷によつて練武の機に恵まれ、昔かはらぬ素朴な生活の中に、上古の醇風を豊かに保存してゐた。しかも武士は、多く東國を地盤として勃興し、武士道は自ら東人の氣風に胚胎したのである。

③ 武士道の形成 武士の勢威が中央に伸びて、その地位が高まるにつれ、武門の棟梁は垂範以て郎従の師表となり、主従一體、生活向上の實を擧げた。かくて、從來とかく武斷に奔り粗野に流れれた武士の生活態度も矯正され、なす所自ら道をはぐくむに至つた。中でも源氏は、その祖經基以來、代々人物を輩出したが、特

鎌倉の士風

に義家は、文武に秀でてゐたのみならず、謙虛よく兵法を學び、寛仁よく仇敵を容れ、私財を割いて部下の功をねぎらふなど、その行動は時人に景仰され、武士道振興に寄與する所大なるものがあつた。かくて、恩義に死し家名に生きる武士道の根柢は益々固められ、また拔駆・一騎打その他戦場の作法も洗煉されるに至つた。源平の盛衰を綴る軍物語は、かかる習はしの數々をしのばしめる。

賴朝が平氏の没落に鑑みて、父祖以來のゆかりも深き鎌倉に幕府を開き、身を修め範を垂れて士風の振作に努めるに及び、武士道は、確乎不拔のものとなつた。賴朝は、敬神・崇佛・忠孝・尚武・信義・廉直・節儉等の實踐を以て武士道の眼目となすとともに、常に故老を招いて武事を語らしめ、屢々狩獵を催し、また家臣の剛勇を賞するなど、特に武の修練を重んじた。麾下の武士も、賴朝を武

仰 武士道と信

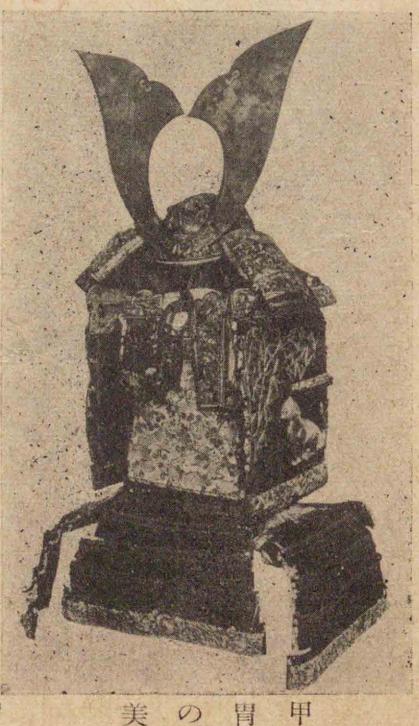


(圖) 武士の風俗射騎

士の龜鑑と崇めて、その言行を右大將家の徒となし、みづから全國武士の模範たるべく、これが實踐に努めた。こゝに、笠懸・流鏑馬・犬追物等尙武の遊戯、甲冑・刀劍の鑑賞等堅實な趣味が生まれ、治に居て亂を忘れざる「いざ鎌倉」の精神が養はれた。かくて武士道は、源氏滅亡の後も、貞永式目の骨子となつて武士の道義を強固ならしめ、更に衆庶の生活に影響して、その志操を堅實ならしめた。かの元の來寇は、あたかも鎌倉の士風が最高潮に達した時のことであつた。

四 武士道の洗煉 名のためには命をも惜しまぬ武士にとつても、生死の問題は痛切であつた。かくて、後生の大事を一期に決しようとする武

士が神に現世の武運を祈り佛に來世の安心を託することは、深い感情の流露であつた。もとより武士は、平氏の



甲冑の美

嚴島神社、源氏の鶴

岡八幡宮に於けるやうに、氏にゆかりの神々を尊崇したが、平安末から鎌倉初にかけて新佛教が勃興すると、道を求める武士の心は、またこれと結びつくに至つた。殊に、賴朝が鶴岡八幡宮・奈良大佛を再興して神佛崇敬の範を示し、泰時が貞永式目の冒頭に敬神・崇佛のことを掲げ、みづから道を明惠に聽くに及び、武士の信仰は頓に旺となつた。或は念佛の要道を聽いて非常決死

の覺悟を定め、或は坐禪工夫の道を修めて心身を練磨するなど、治亂に處する武士の生活は、次第に洗煉された。

禪宗と武士

建長七年正月二十一日

本寺太僧正指揮院掌印

井頼謹初千人同成之書

建長寺住持宋圓覺禪師

助進監

琳長



建長寺圓覺鐘銘

中でも、新に宋から傳はつた禪

宗は、その教義に武士の精神と相

通するものがあり、禪僧の氣魄ま

た武士の氣風に適ふ所があつて、多數武士の歸依を集めた。しか

も時頼時宗は、それく宋僧道隆

祖元を招いて建長寺・圓覺寺の開

山となし、専ら禪風の作興に努め

たので、武士と禪宗の關係は、頓に緊密の度を加へた。かくて武

士は、神佛の崇敬特に禪宗への歸依によつて生活を高め、武士道

は愈々洗煉されるに至つた。

雅
武士道と風

烈な意欲のまゝに動くたくましき武士も、生死の大事に人生の無常を觀じて、道義と信仰の尊ぶべきを悟るかたはら、情趣を重んじ、風雅の道に心を留めた。或は、激闘死生の間に處して風懷を敍べ、政務の繁劇に小閑を得て吟咏をものし、或は、甲冑・刀劍その他服飾・調度の類に簡素の美を點じて、情操の涵養に資した。特に保元・平治の亂に始る流轉の世相は、武士をして深くものあはれを體認せしめ、文雅風流は精神生活の糧となり、武士道を更に精彩あるものとした。萬葉の調を汲んで秀歌の數々を留めた實朝は、かかる武士道の體現者であり、質實を以て鳴る泰時にも、繁忙の餘暇に行く春を惜しむ一面があつた。鎌倉武士にして文事に關心をもつ者もまた少くなく、武士道は自ら鎌倉文化の生成に寄與する所があつたのである。

武士道と國民道德

五 武士道の特質 武士道は、興隆期の武門武士が、自己本來の生活道の美質を保ちながら、更に環境の變化に應じ、これを高めようとして心身の鍛錬に努めた所産であつた。隨つて、武士道は行住坐臥の實踐道德であつた。しかも、武士の生活には、國民的傳統が豊かに保存されてゐたため、自ら武士道は、國民道德たる要素を具へ、後世の國民生活に甚大な影響を及した。

しかし武士道は、一面に武家本位の道德たる性格をもち、直ちに國民道德の最高規範たり得ぬ缺陷を藏してゐた。武士道の根柢をなす主従觀念が、單なる武家の情義に止つたことは、缺陷の最大なものであり、その弊は、武家政治の推移とともに深められた。承久の變に於ける武士の去就、北條氏の滅亡に際しての多數郎従の殉死等の事實は、かかる缺陷の生んだ悲劇とも見られる。

武士道の展開

鎌倉初期を中心にして鍛成された武士道は、後世特に江戸時代に於ける武士道思想の原據となり、更に明治時代に入つて、國民精神の昂揚とともに擴充され、日本武士道の唱道となつた。武士失せてなほ武士道が鼓吹されるのは、武士道に顯現せる國民精神の傳統を重視するからであり、武士が心身の鍛錬に示した眞摯な態度に學ぶべきものが多いからである。

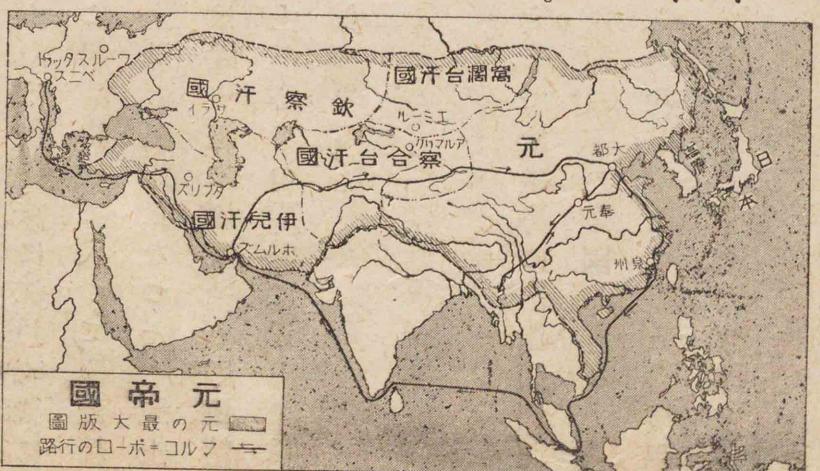
二 元寇と國民精神

鎌倉初頭の大際

○大陸の情勢 鎌倉幕府開設の頃、大陸では、半島に高麗・滿洲・北支に金・中・南支に南宋・支那の西北隅に西夏等の諸國が存在したが、國勢は概ね萎微不振であつた。當時我が國と大陸との關係は、往時の如き通交こそなかつたが、宋・高麗との間に、彼我の商人・僧侶の往來が頻繁であつた。

蒙古の勃興

しかるに、金の治下にあつた蒙古民族から、突如として鐵木眞が現れ、内外蒙古を統一して蒙古國を建て、成吉思汗と號した。これ、土御門天皇の御代、將軍實朝の時の事である。その後蒙古は、五十餘年の間に優秀な武力と巧みな戦法を以て、支那の南半、印度等を除くアジヤ大陸の大部を平定し、更に西征して十字軍末期のヨーロッパを脅した。かくて蒙古は、五代忽必烈(世祖)に至つて全盛期を迎へ、都を北支の燕京に遷し、國號を元と定めた。龜山天皇の御代、



蒙古と高麗

使節の來朝

時宗執權の時の事である。

さきに、半島の高麗も一たび蒙古に制壓されたが、その後叛服常なく、天險によつて蒙古の來襲を防ぎ、容易にこれに屈服しなかつた。やがて世祖の代になると、世祖は、文治を以て廣大な領土を固める方針を取り、高麗に對しても、懷柔策を以て臨むに至つた。かくて世祖は、遂にこれを臣服せしめ、更にその女を高麗王にめあはすに及び、蒙古と高麗とは親善の關係に進んだ。

②文永の役 高麗の經略に成功した蒙古は、勢に乗じて我が國をも窺ひ文永五年、高麗王を介して招諭の使節を送り來つた。翌年再び蒙古の使節が來朝するに及んで、朝廷では、我が國が人智・武力を以て克つべからざる神國である旨を含めた返牒案を作つて、これを幕府に議せしめ給うた。時の執權時宗は、少

シカニ
舊原長成
以皇主之命
請之
非
以知
既
非
ニ
シカニ

壯氣銳しかも豪放果敢、返牒の無用を奏して使節を逐ひ、西海の將士に邊境の戒嚴を命じた。この頃國號を元と改めた蒙古は、最後の使節として趙良弼（さち りょうぱく）を送り來るとともに、出兵の準備とし

壯氣銳しかも豪放果敢、返牒の無用を奏して使節を逐ひ、西海の將士に邊境の戒嚴を命じた。この頃國號を元と改めた蒙古は、最後の使節として趙良弼（さち りやう ぱつ）を送り來るとともに、出兵の準備をして蒙古兵の高麗屯田を計畫した。しかも趙良弼が幕府の強硬な態度に空しき努力をつゞけること歳餘の後、歸國して我が國情・民俗を世祖に復命するに及んで、世祖は憤然來寇の意を決し、高麗に



豫宗時條北

來寇

元の再征計
畫と我が防
備

接した鎮西奉行は、九州の家人を召集して少貳經資をその將帥たらしめ、以て元軍の來襲に備へた。しかるに、勇猛果敢な我が軍の防戦も、敵の火器に悩まされて苦戦に陥つたが、夜半の嵐に敵船多く覆滅し、狼狽した敵は、殘餘の船艦を收めて退去した。これを文永の役と名づける。

三 弘安の役

世祖はこの擧の失敗

面目に



點を覺つた。かくて元は南宋を攻めてその水軍の一部を收め、降將范文虎等を顧問として、水軍の補強に著手した。弘安二年、世祖の命を受けた范文虎は、部下を我が國に派遣して、元との修好を勧告せしめたが、時宗の決意はいさゝかも搖がず、使者は再び博多に斬られた。こゝに於て世祖は、蒙古・高麗・南宋諸將の會議を開いて戦略を練り、參謀府の設置、東征軍の組織、將兵の配置等を定めて必勝を期した。

かかる緻密な計畫も、江南にあつた我が商人に漏れて、元軍來襲切迫の情報が我が國に傳へられた。この諜報を得て、我が國は、朝野の緊張その極に達し、朝廷では、敵國の降伏を全國の社寺に

祈願あらせられ、幕府また九州の警備を更に嚴重ならしめ、争訟私怨による家人の内紛を戒めて、國家の大事に處すべき武士の團結、士風の振作を圖つた。

果して弘安四年五月、先づ忻都・洪茶丘を將帥とする凡そ四萬九百隻の東路軍、若狭相模・丹波・播磨・淡路・近江・山陽・海道の有馬・園部・守矢・伊豆・駿河・遠江・三河・伊勢・紀伊・和泉・紀伊・伊予・但馬・肥前・筑後・肥後・大隅・日向・大分・熊本の諸侯の合浦を發して博多に迫つた。河野通が、合浦を發して博多に迫つた。河野通有菊池・武房・竹崎・季長等の我が勇將は、石壘・土壕に據つて敵兵の上陸を阻むとともに、暗夜に輕舟を飛ばして敵艦を奇襲し、これを混亂に陥れた。戰況の推移につれ、畏くも龜山上皇は、皇大神宮に御身を以て國難に代らせ給ふ御祈願をこめさせられ、國民また憂國の至情に燃えて、敵國降伏の祈願は津々



浦々に及んだ。やがて范文虎等の率ゐる凡そ十萬、三千五百隻の江南軍が、期に遅れて七月に到着、待機の東路軍と合して九州に迫り、敵艦雲霞の如く博多の海を覆うた。しかるに、突如として起つた一夜の颶風に神國の海は荒れて怒濤山をなし、數千の敵艦は風に舞ふ木の葉にも似て、覆没する艦影は算へるに遑がなかつた。

溺れ浮く將兵また海面を覆ひ、わづかに脱れて鷹島に據つた敗殘兵も、すべて我が軍に捕らへられた。敵艦全滅の快報が全國に傳はると、皇室の御事は申すも畏し、七旬に亘る國民の憂色は忽ちにして歡喜の聲と變り、士民こそつてひたすら御稜威の宏大、炳乎たる

戦勝の因由

神佛の靈驗に感激したのであつた。

我が國が、文永弘安の兩役に大勝して、史上未曾有の國難を克服することの出來たのは、ひとへに皇室の御稜威によるものであつた。皇室におさせられては、率先して敵國降伏の御祈願をこめさせ給ふとともに、終始幕府の處置を信頼あらせられ、時宗をして自由にその手腕を揮はしめ給うた。時宗また年少よく重責に堪へ、大事に騒がず終始强硬な對外方針を堅持し、英斷以て事を運び、充實せる幕府の機能を十分に發揮した。これに隨つて、武士はよく武士道の精華を發揚し、庶民もまた分に應じてその務をはたした。皇室御祈願の驗は申すまでもなく、かゝる奉公の至誠を以て、一貫せる國民活動また神明に通じて、天佑となつたものと思はれる。

元の報復計 畫

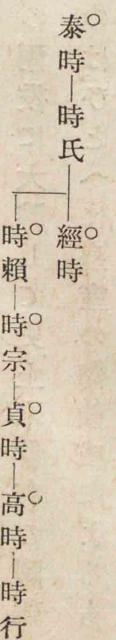
元寇と國民精神

を蓄へて、第三回の出師を計畫した。しかるに元は、その治下に幾多の異民族を含んで統制に悩み、國內事情は錯綜を極めてゐた。かかる缺陷は、既に弘安の役に於ける東路・江南兩軍の連絡不調、作戦の齟齬にも現れてゐた。特に海都の亂の推移は、この頃に至つて元帝國分裂の危機をはらみ、かくて元は、我が國に對する捲土重來の計畫を放棄するに至つたのである。

開設以來八十年を経た鎌倉幕府は、元寇に直面し、始めてよくその面目を施した。これによつて幕府の威信は高まり、威令も更に廣範圍に及ぶこととなつた。即ち朝廷は、難局突破の御見地から、幕府が公

領・莊園の全部に
瓦り軍兵・軍資を
徵用することを

北條氏系圖(二)



容認あらせられ、また西邊の武士に對する幕府の統制も、九州・長門・兩探題を通じて更に強化されたのである。しかし、幕威の伸張は槿花一朝の精彩に終り、家人の疲弊、その救濟策の失敗によつて、やがて衰運をたどるに至つた。即ち、戦後直ちに西邊の警備を撤し得ない状態に於て、論功行賞は勿論のこと、家人の負擔輕減を圖る諸政策さへ、すべて失敗に歸した。しかも論功行賞の通念になづんで、幕府に多大の期待をかけた武士や社寺は、幕府に對して漸く不満を抱くに至つた。かくて幕府は苦境に立ち、しかも時宗の後は執權に人物なく、秕政は益々募るばかりであつた。

五 國民精神の昂揚 元寇の擊攘によつて國威は海外に輝き、國民精神は大いに昂揚した。既に華を去り實に就いた鎌倉初期から、國民精神の傳統は、武士道の鍊成、神道・和學の講究を貫ぬい

元寇と國民精神

て脈うつてゐた。かかる傳統が、未曾有の國難に際して神州防護の雄叫びとなり、その國民的自覺は、再度に及ぶ神國の證によつて更に深められ、かくて國民精神は空前の昂揚を見たのである。

しかも戦後、幕府の秕政が募るに及び、元寇によつて培はれた國體觀念は、更に勤皇精神をはぐくみ、建武中興の成立を導くに至つた。また、かかる國民精神の躍動は、文化の形成にも反映して神道思想の發達をもたらし、更に尊圓法親王の書道觀、師鍊の歴史觀に見る國家的自覺をはぐくんだのである。

元寇の擊攘による國民精神の昂揚は、また元寇に對する反撥心となつて現れ、海外發展の精神を旺盛ならしめた。戦後、西海の士民は、海事思想を深めて大陸への進出を企て、その營む私貿易は、頓に活氣を呈するに至つた。

國民精神の
展開
國民の海外
發展

龜山天皇御製

四方の海浪をさまりてのどかなる

我が日の本に春は來にけり

後宇多天皇御製

天つ神國つやしろをいはひてぞ

わが葦原の國はをさまる

宏覺禪師の蒙古降伏祈願文の紙背の歌

すゑのよの末の末までわが國は

よろづのくににすぐれたる國

第十章 鎌倉時代の文化

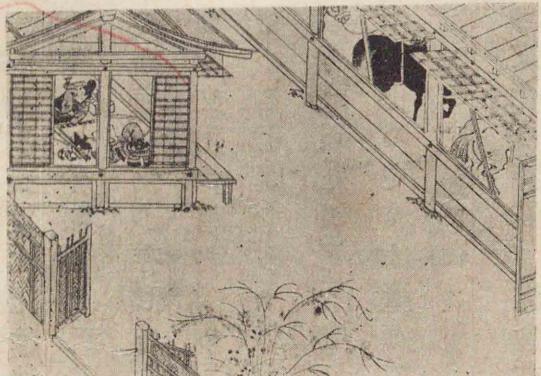
一 武家と文化

大勢の推移

○文化の推移 上代の文化を大成して日本の醇化を遂げた平安時代の文化も、漸く募る都鄙の擾亂により、公家・僧侶の生活が不安に包まれるに至つて、沈滯の風を現した。しかるに源平盛衰の推移につれて秩序回復の曙光が兆し、幕府の開設が國內の安定をもたらすに及び、文化また譏刺たる武士の精神を反映して、新生面を開くに至つた。かくて鎌倉時代の文化は、武士を中心として形成され、武家文化の稱にふさはしい様相を展開した。

もとより武士は、地方に發生して、その教養も最初は甚だ低かつた。その地位の向上とともに、都の文化に接する機會に恵ま

武家文化の
真義



れ、教養を高めたといふものの、公家・僧侶に代つて新文化を創造する能力を得たわけではなかつた。武士の政治的勢力が確立された後も、この點に變りはなかつた。隨つて、鎌倉文化に對する武士の貢獻は、時代の安定勢力たる武士が、事上磨練の精神を以て、文化の創造を精神的に指導した點に存する。

即ち、武士道の發達過程にも窺はれるやうに、武士の精神生活が、時代の風向、文化の動向を規定し、武士は自ら文化創造の要となつたのである。鎌倉文化を武家文化と稱する所以は、武士が文化創造の指揮者、その需要者であり、かくて生まれた新文化が、鎌倉文化の主流をなしたことに基づ

公家文化の
様相

くのである。

かゝる武家文化は、地域的に鎌倉中心のものであつた。これに對して、京都には、武家文化の母胎をなし、しかもなほ命脈を保つ公家文化が存した。しかし公家文化は、宗教・學問・文學すべて前代文化の踏襲であり、わづかに繪畫と和歌に技巧洗煉の跡を留める程度であつた。武家本來の面目を重んじて公家への接近を戒めた賴朝の掟が時代の推移とともに弛み始めると、公武兩文化の交流は漸く繁く、兩者相倚つて鎌倉時代の文化を進めたのである。

③文化の特質 鎌倉文化の特質は、武家文化に於て最もよく發揮され、隨つてその特質は、武士生活の精神的特性によつて形成された。武士は、生活の質實を尊び、事物の具體性を好んだ。かかる風尚には、上古人のそれと相通ずるものがあり、自ら武家文

復古と創造

化は、藤原文化の優雅と纖細とを缺いたが、上古文化の簡素と清明とを甦らせて、前代の遺産たるものがあはれの精神に堅實味を與へた。實朝の和歌に萬葉の風格があり、貞永式目の構成に十七條憲法の面影が存するのは、鎌倉文化と上古文化との脈絡貫通を示すものと見られる。鎌倉時代の文化が復古的であるといはれるのは、まさにかゝる事情に基づくのであり、またその特質が實際的・男性的・意志的等の語を以て形容される所以である。すべてかゝる特質は、武家文化が國民精神の傳統に基づいて創造されたことによるのであり、文化の庶民に普及する端緒がこの時代に開かれたのも、また鎌倉文化が近易にして健全な國民生活に根ざしたがためである。

かくて鎌倉文化は、日本文化の傳統に生きて清新の氣を回復するとともに、更に庶民への文化普及の端緒を開いて、國民文化

の形成に培つた。また大陸文化に轉機を劃した宋代の文化が、彼我の僧侶・商人の往來によつて、我が國にもたらされたものの、その影響は鎌倉文化の様相に一異彩を點じたに止り、やがて日本文化に熔融するに至つた。

二 新文化の様相

新佛教の勃興

○神道と佛教 平安末期
以來、世相の混亂は日毎に甚だしく、人々は、戰火に怯え人生の無常をはかんで、末法澆季到來の感を深うし、ひたすら信仰の道を求めた。かかる人心の動

頌淨土真實信義三愚癡親鸞集
謹按社祖回向有大信大信心者則是長生不死之神方忻淨厭穢之妙術陞釋迦向之真心利地深廣之信樂金剛不壞之真心易往無入之淨信矣

親鸞の筆蹟

新宗派の開創

向は、自ら淨土思想を發達せしめ、平安末葉に至つて淨土宗が成立し、やがて起るべき幾多新宗派の先驅となつた。

鎌倉時代に入ると、淨土宗を母胎として新に二宗派が生まれた。即ち、法然の弟子親鸞によつて一向宗(真宗)が創められ、一遍によつて淨土宗の一派たる時宗が開かれた。各教理に多少の差はあるが、ともに阿彌陀佛の信仰を基とし、稱名念佛の他力易行を說いたので、これを念佛宗と總稱する。また天台宗から出た日蓮は、新に法華宗(日蓮宗)を開き、法華經の妙義を七字の題目に約め、その唱道により成佛すべきことを說いた。これら新興の諸宗派は、何れも簡

禪宗の傳來

易適切な宗旨を以て人心の機微に觸れ、特に開祖が法難に屈せず廻國以て布教に努めたので、忽ち各地に流布し、主として庶民の間に普及した。

かかる佛教界を更に活氣づけたのは、

禪宗の傳來であつた。平安末から鎌倉初にかけて、入宋再度に及んだ榮西は、當時宋の佛教界を風靡せる禪宗を研鑽して、その一派たる臨濟宗をもたらし、承久の變後まもなく入宋した道元は、更に禪の別派、曹洞宗を傳へ歸つた。その後宋が元に滅されるに及んで、宋の禪僧で我が國に亡命した者も少くなかつた。坐禪による見性成佛を説き自力鍛錬を重んずる禪宗は、その教義が宗規の峻厳とともに武士の好尚に適ひ、主と

摺願寺孟頫正品經錄起
北外海孤絕之日李國鋐西
太宰府統出島嶼縣今津
生俗廿九年出家志有秘密
是年苦行而安成子家
故諸宗朝之能往心尤切是依
丙申歲自仲秋歲成歲至歲秋主
佛徒寂切之寺院代帝本朝異
慧安國異
谷を深しとして中央に出でず、曹洞宗の淵叢となつた。たゞ道元は、永平の

して武士の傾倒する所となつた。かけて幕府の保護の下に禪寺の建立相つぎ、彼我の僧こゝに集り、鎌倉は禪宗の淵叢となつた。たゞ道元は、永平の谷を深しとして中央に出でず、曹洞宗は自ら越前を地盤に、地方士民の歸依を集めた。

新佛教の
特質

鎌倉時代に派生した幾多の新佛教は、すべて國民生活に根ざして創始された純粹な日本佛教であつた。また傳來の禪宗も、武士がこれを自主的に精神生活に攝取し發展せしめたのである。隨つて、當代の佛教には國家的

黑國禪寺折持注錄
一文永五年七月爲方是賊爲難
大將軍中務卿宋尊禮爲難
而花落發而宣政對與其軍執事
騎也同月同宣政對與不者也
周八月首爲黑財降伏折持西冬勒
使の在之宣首傳天王寺教興寺
ある者因時達之大師盛焉
佛徒寂切之寺院代帝本朝異
摺畢是爲則高階伏之雲首者謙
參之未復聞聲未嘗者至有
肩行者被行仁空念即黑職教興
金住舊例龜山院更天王寺教興
行者在八月首於天王寺金堂而
被授百座任空念道師者西大寺
思國上人教興傳金空也因大師教興
寺有行者次於講堂千手寶

色彩が濃く、特に法華宗に於て、それが著しかつた。日蓮が立正安國論を著して幕府の施政に警告を與へたのは、有名な事例であり、また、元寇に際して慧安(宏覺禪師)の示した國民的熱情には、注目に値するものがある。

舊佛教の覺醒

烈々たる新佛教の擡頭は、長らく沈滯のかたちであつた舊佛教に大なる衝撃を與へ、舊佛教覺醒の機縁となつた。天台・真言の兩宗は、なほ教界の權威を誇つて俗權爭奪の迷夢から醒めなかつたが、革新の氣は奈良佛教の諸宗に動き、時運に目覺めた僧侶は、教學にいそしみ戒律を重んじ衆生濟度に心して、舊佛教の復興に努めた。華嚴宗の明惠の行實は、その適例の一である。更に元寇の國難に際して、舊佛教の自肅はその度を深め、敵國降伏を祈る讀經の聲は、また教界覺醒の叫びでもあつた。律宗の叡尊の行藏に、その典型が見られる。その後、舊佛教の覺醒は、貧

民の救濟、病者の施療、橋梁の架設等に本來の面目を回復して、庶民教化の實を擧げた。叡尊の弟子良觀は、遠く聖德太子の御志を慕うて、かかる公益事業の數々を遺した。

既に前代に成立した神佛習合の本地垂迹説は、鎌倉時代に入つて、依然天台・真言兩宗の僧侶に支持されたが、これに對して神本佛述説が擡頭するに至つた。即ち神を主とし佛を從として説く神道思想が、伊勢の神宮殊に外宮の神官の間に起つた。これを世に伊勢神道と稱する。

伊勢神道の發達

中心としてこれを統合したもので、その經典ともいふべき神道五部書によれば明淨正直等國民固有の道德觀念が強調されてゐる。やがて鎌倉末葉になると、外宮の神官度會家行が出て、類聚神祇本源を著し、伊勢神道を大成した。度會神道の稱は、これに基づく。

北畠親房

の思想、特にその神祇觀念は、伊勢神道に負ふ所が多い。また神道思想の發達は、自ら日本書紀の研究を促し、ト部兼方の釋日本紀は、その最も具れるものとして名高い。

武士と學藝

風雅の道は武士道の一要素であり、尙武を念とする武士とともに、學藝に無縁の輩ではなかつた。しかし、武士本

注目すべきは、幾多國文學の名作逸品を生んだ平安時代を承けて、これら諸作品を研究する學問が起つたことであり、當代の學問は、この和學の擡頭によつて面目を發揮した。

藤原定家の漢學系の學問に於ては、前代の遺風を承けて、清原菅原等の諸氏が家學の傳統を守るのみで、僧侶によつてもたらされた宋學も、鎌倉末葉に玄惠が出て流布に努めるまでは、大なる影響を及さなかつた。

文集卷之七

金澤文庫

來の面目は、まさにその武庫文獻は、實朝を除いては、北條

金白澤氏

断にあり、文事に對する貢

藏集

實時顯時父子が金澤文庫

實泰(金澤)
實時
顯時
實政

北條氏系圖(三)

を興し、幕府の首脳が僧侶を招いて治要の道を聽く程度で、學藝の保護獎勵の域を多く出なかつた。かくて學問・文學は、傳統文化の粹として、依然公家僧侶の保持する所であつた。

漢學系の學問に於ては、前代の遺風を承けて、清原菅原等の諸氏が家學の傳統を守るのみで、僧侶によつてもたらされた宋學も、鎌倉末葉に玄惠が出て流布に努めるまでは、大なる影響を及さなかつた。

注目すべきは、幾多國文學の名作逸品を生んだ平安時代を承けて、これら諸作品を研究する學問が起つたことであり、當代の學問は、この和學の擡頭によつて面目を發揮した。藤原定家の古今後撰拾遺三歌集の註釋、仙覺の萬葉集の校訂、源光行とその子孫による源氏物語の研究等は、その代表的なものであり、ト部

學問の様相
漢學の沈滯

和學の擡頭

兼方の釋日本紀また和學考究の所産と見られる。かくて和學の擡頭は、和歌、歴史文學等の創作と關聯し、國文學發達の背景をなした。

史書の述作

かかる動向に副うて、數數の史書が著された。即ち、榮華物語・大鏡の後を承けて、平安・鎌倉の過渡期に、今鏡・水鏡が作られ、こゝに一聯の和文國史の完成を見たが、更に承久の頃、慈圓

愚管抄

| 新刊吾妻鏡目録 | |
|-----------|------------------------------------|
| 一卷 | 治承四年庚子 |
| ○安徳天皇 | 高倉天皇第一基御近衛朝正二位大納言右大臣 |
| ○治承五年 | 時政比叡門内大夫時家一男義光、四郎治承五年五月十四日爲義和元年壽求元 |
| 二卷 | 治承五年五月十四日爲義和元年壽求元 |
| 三卷 | 壽永三年庚辰四月十六日爲元暦元年 |
| 四卷 | 私云壽永二年癸未之年寅 |
| ○後鳥羽院高倉第四 | 元暦一年自正月至八月廿四日爲文治 |
| 五卷 | 文治元年自九月至十二月 |

新古今和詩

山隠集

あももべかうそひうみけい
ほんじよしきまへりす
やすけい木

和歌

新古今和詩
山隠集
あももべかうそひうみけい
ほんじよしきまへりす
やすけい木

慈鎮によつて愚管抄が著された。愚管抄は、佛教の影響を受けて國史を觀る眼に曇があるが、世態の推移、人心の動向を深く捉へて、古今の史書中出色のものといはれる。また和様の漢文で錄された吾妻鏡も、幕府の施政、家人の生活を窺はしめる史書として、世に有名である。

和歌は、鎌倉時代に入つても、上流の間に頗る隆盛を極め、技巧は愈々洗煉されて、新風が生まれた。後鳥羽天皇は、和歌をよくし給うて、これを勸奨あらせられ、藤原俊成・定家父子、同家隆・西行・慈圓・實朝等の歌人が輩出し、

勅定古今和詩集卷第一

春上

孝政天皇

みづ野びすらとて白雲乃
ひよしのくわくとてしらうんのう
そよごいぬのち

太上天皇

みづ野びすらとて白雲乃
ひよしのくわくとてしらうんのう
そよごいぬのち

ぶ古

詠下止生和歌

新古今和歌集が勅撰された。
中でも定家は、歌想の巧緻、歌調
の流麗を以て集中に重きをな
し、その作風は一世を風靡し、更
に後世に大なる影響を與へた。
その他、異色の歌人實朝の歌に
しの

定家の筆蹟

雅雄渾な萬葉の格調、漂泊の歌僧西行
の歌に見る閑寂幽玄の風體、色とりど
りに歌壇の盛況を現じた。しかし、こ
の盛時を過ぎては、歌學の家が分立し
て勢を争ひ、歌風また舊套を墨守する

のみで、歌道は漸く衰運をたどるに至つた。

軍記物



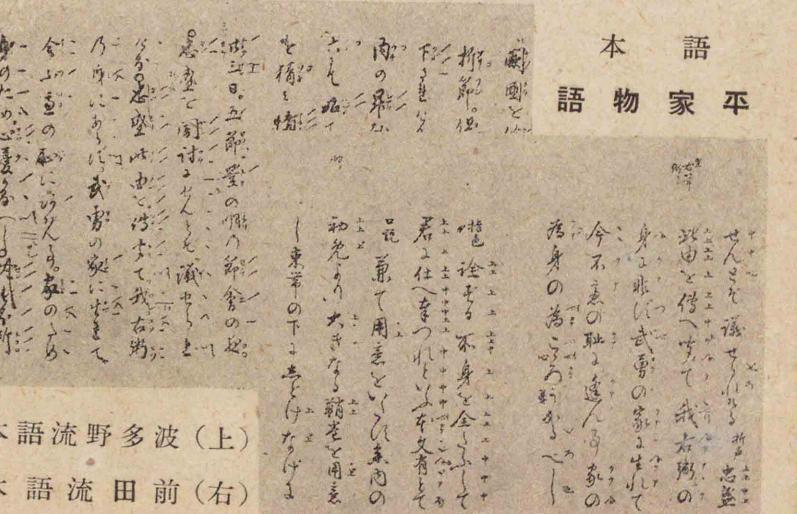
像明鴨

隨筆文學は、鴨長明の方丈記に見
るべきものがあるのみであるが、物
語文學は、時代の嗜好に應じて新様
相を開き、保元物語・平治物語・平家
物語・源平盛衰記等の軍記物が著された。これら諸作品は、保元・

平治の兩亂、平家の都落等の諸事象に取材して、或は壯烈悲慘の戦況をゑがき、或は生別離苦の哀傷を敍べたもので、表現また時代の好尚に應すべく、單調冗漫の弊を避け、漢語佛語を混

へる清新な假名混り文が用ひられた。中でも平家物語は、情感濃やかな筆致を以て、はかなくも美しき平家一門の衰亡をゑがき、諸行無常盛者必衰の理を敍べたもの、まさに軍記物の白眉である。

これらの軍記物は、取材構想表現ともに世人の嗜好に適うて、やがて士民の愛誦する所となり、平家物語の如きは、琵琶に合はせて語られる程であつた。



(上) 波前田多野語
(右) 本語

説話物と
紀行文學

また、行住坐臥の間に道を求める見聞を廣めようとした士民にとって、教訓・説話の物語は、心の糧の一つであつた。かくて、教訓的色彩の濃き十訓抄・沙石集や話柄豊かな宇治拾遺物語・古今著聞集が著され、寓意の興趣、表現の平明を以て人心に投じた。更に、幕府が鎌倉に開かれ、京鎌倉の往來は漸く繁く、これが契機となつて、十六夜日記・海道記・東關紀行等の紀行文學が生まれたことも、注目に値する所である。

また新文體として、和漢混淆文が案出されたことは、時代の要求に應ずる一つの創造であり、後世に對する影響また甚大であつた。

③ 美術工藝 前代の美術工藝は、日本の醇化を遂げた幾多の優秀な作品を遺したが、なほそれは上流生活の表現として、時代の規定を受けたものであつた。隨つて、鎌倉時代に入ると、前代の

新文體

新様式の形
成

建築
寺院建築

觀心寺本堂

遺風を承けながらも、時代に即してこれを更新しようとする創造の氣運が、藝術の諸分野に醸成されるに至つた。即ち、前代の様式の繼ぐべきを繼ぎ、遡つて天平様式の生かすべきを生かし、更に廣く大陸様式の採るべきを採つて、新時代の好尚に應ずる新様式を形成した。まさに、日本文化の特質たる傳統性・包容性を發揮したものといへる。

賴朝の再興せる東大寺の伽藍に、早くも建築の新様式が兆した。即ちその伽藍は、再建なるがために、天竺様と稱せられる大陸様式を採つたが、しかも

武家造

これに時代の嗜好を加味して、雄大豪壯の構をなした。東大寺の遺構南大門等に、その趣をしのぶことが出来る。やがて禪寺の建立が相つぐに及んで、唐様の禪院様式を容れ、圓覺寺の舍利殿に見られるやうに、屋根・窓等その結構に曲線の美を點じた。その後、天竺様・唐様ともに和様と結んで醇化され、鎌倉末葉には、三様式の綜合を見るに至つた。建武年間に建立された觀心寺本堂は、かかる綜合を示すものといはれる。

時代の好尚は、住宅建築に於て更に的確に現れ、質朴な生活の中にも風雅を求めた武士の嗜好に副うて、武家造なる住宅建築が生まれた。武家造は、寢殿造・禪院建築が折衷簡易化されたものであり、武士の生活文化のよき表象である。

彫刻では、運慶・湛慶父子、快慶・定慶・康勝等の名手が現れて、時代の好尚に適つた幾多の名作を遺し、その作風は、前代の遺風を脱

して天平復古の傾向を現し、自由闊達な寫實的表現を生んだ。運慶・快慶の作たる東大寺南大門阿・吽二形の金剛力士は、その代表的作品であり、豪放な寫實的彫法は、二丈六尺の巨軀に躍動感を横溢せしめてゐる。その他、運慶一門の彫像は數多く、中でも康勝の作、空也上人像は、作者未詳の上杉重房像とともに、肖像彫刻の新生面を開いた。更に、佛相の圓満を以て有名な鎌倉高徳院の阿彌陀像（鎌倉大佛は、上總の人の鑄造にかかり、鎌倉時代の東國文化をしのぶよきよすがである。

繪畫は、前代を承けて繪卷物の全盛期を迎へた。しかもその題材は、概ね戰亂の情況、社寺の縁起、高僧の傳記から採擇され、また文學との關聯を保つて、時代人心の嗜好に投じた。既に平安・鎌倉の過渡期に、信貴山縁起繪卷・鳥獸戲畫の二名作が生まれたが、やがて、北野天神縁起繪卷・平治物語繪卷・三十六歌仙繪・蒙古襲

繪畫と書蹟
繪卷物

建

築

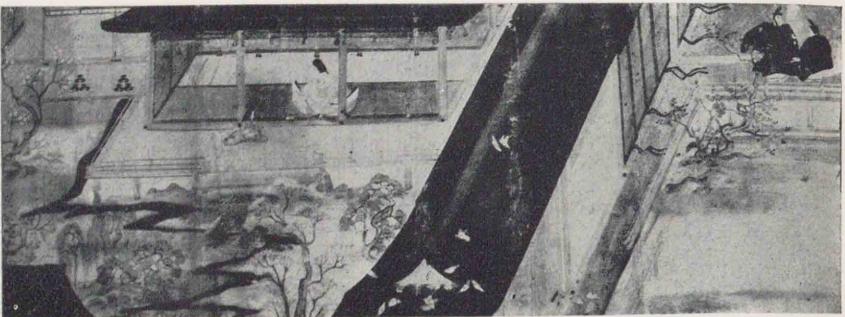


東大寺 南大門



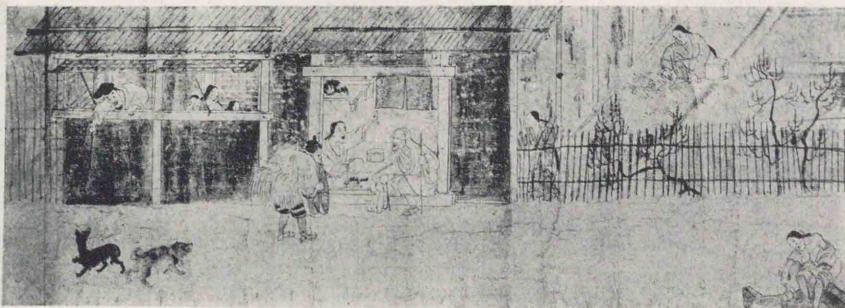
圓覺寺 舍利殿

畫 繪

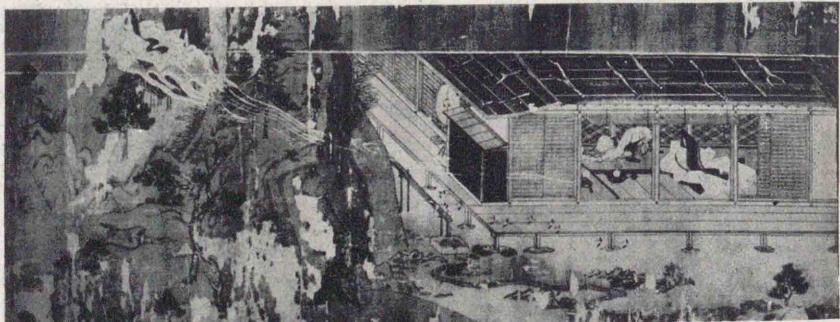


卷繪起緣神天野北

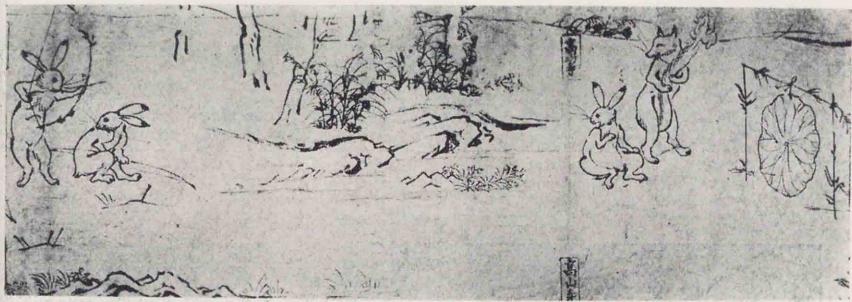
畫 繪



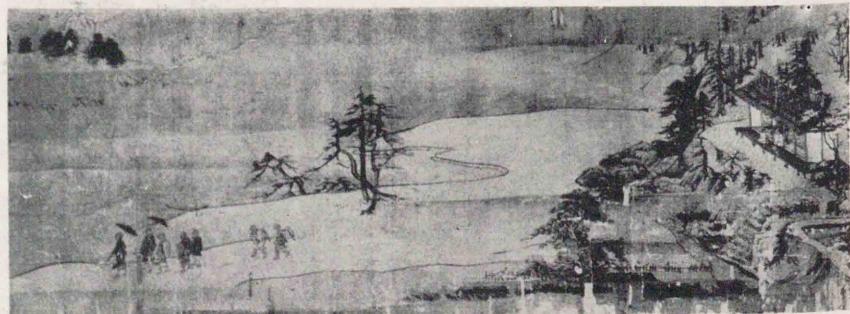
卷 繪 起 緣 山 貴 信



卷 繪 記 驗 現 權 日 春



畫 戲 獸 鳥



傳 繪 人 上 遍 一



繪仙歌六十三

來繪詞・春日權現驗記繪卷・法然上人繪傳・一遍上人繪傳等の繪卷物が續々と現れた。當時に於ける繪卷物の作者には、藤原隆信・信實父子、住吉慶忍・姉小路長隆・高階隆兼・土佐吉光圓伊等が數へられる。

また肖像彫刻と揆を一にする肖像畫が、隆信・信實等によつてゑがかれ、世に似繪と稱せられた。隆信の作と傳へられる源賴朝像及び信實の謹作たる後鳥羽上皇宸影は、秀逸の譽が高い。

書道は、初め世尊寺流が行はれたが、尊圓法親王が、これに宋元の書風を加味して新に青蓮院流(御家流)を興されるに及び、これが一世を風靡するに至つた。

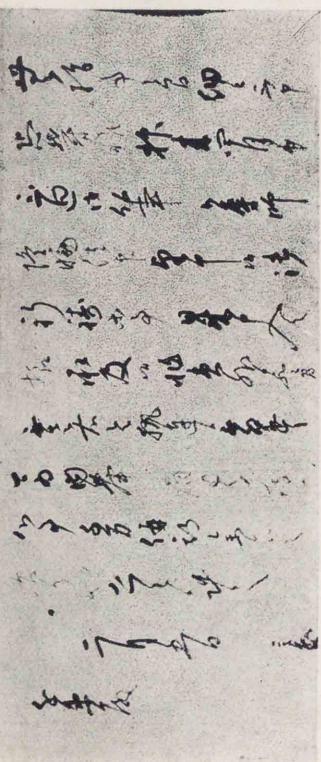
時代を貫ぬく尚武の風尚に應じて、甲冑・刀劍等武具の製作技術は大いに進み、甲冑には、明珍が代

明珍系圖(鎌倉時代)

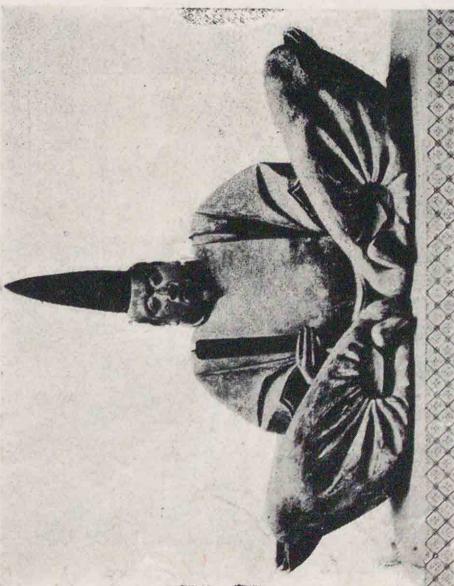
(明珍祖)
宗介・宗清・宗行・宗益

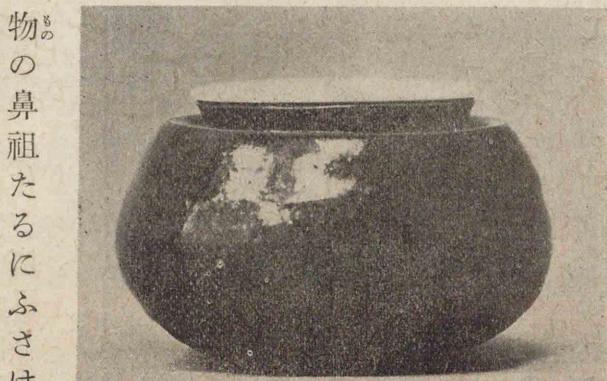
宗重・宗忠・宗繩・宗光

書道と彫刻



〔右〕東大寺南大門金剛力士像
〔上〕尊圓法親王御筆蹟
〔左〕明月院藏上杉重房像





代名作を出だし、刀劍には、後鳥羽上皇御みづから菊御作を始め奉り、院の番鍛冶によつて多くの名作が遺され、更に鎌倉末期に至つて、京都に栗田口吉光、鎌倉に岡崎正瀬宗、越中に郷義弘等の刀匠が現れた。また稚拙の域を出なかつた製陶法も、加藤景正の入宋多年の研鑽によつて、飛躍的な進歩を遂げた。景正は、歸朝後尾張の瀬戸に窯を築き、始めて工藝美豊かな逸品を製し、瀬戸物の鼻祖たるにふさはしい功績を遺したのである。

④ 第十一章 建武中興

一 鎌倉幕府の滅亡

國民精神の
昂揚

① 幕府の失政 幕政の推移とともに、武家中心の國民生活は安定し、清新な文化の勃興をさへ見たが、國體に悖り我が國政治の本然に反する武家政治が、雲霧のやうに御稜威の光を遮つて、武士道の精華も畫龍點睛を缺き、自ら國民の國體觀念も明徴を缺く憾があつた。後鳥羽上皇承久の御企が空しく終らせ給うたのも、また變後、幕府の無道に對して國民が憤起しなかつたのも、すべて時世の混濁のためであつた。しかるに、元寇の國難を契機に、國民の自覺は油然として湧き、武士は敵愾の激情に燃えて報國の至誠に甦り、よく武士道の本領を發揮した。しかも國民

幕府の秕政

は、我が國の勝利が皇室の御稟威と神明の加護によりもたらされたことを知つて、神國意識に目覺め、今更の如く我が國體の尊嚴に感激したのである。

幕府は、かゝる事態に對して的確な認識を缺き、論功行賞、軍備の繼續、家人の救濟、この三巴の渦中に投ぜられて、その対策にまどひ、遂に德政令の發布の如き非常手段を講じて、却つて事態を混亂に導いた。かくて家人の幕府に對する不満は漸く高まり、民心また次第に悪化して、士民の生活には功利の傾向が芽生え、幕府の基礎は搖ぎ始めた。貞永式目の精神は蹂躪されて裁判の公正が失はれ、武士道は廢れて奢侈の風さへ生じ、治安が亂れて無賴の徒の横行を見るに至つても、幕府はこれを放任する有様となつた。しかも保身に汲々たる幕府は、公家勢力の分散に腐心するのみか、累を朝廷にまで及し奉り、秕政はまさにその極

に達した。

弘安の役を過ぎて三十餘年、高時たかときが執權となつた頃には、府内の規律も大いに亂れ、その遊惰と驕奢とは、更に綱紀の紊亂を助長せしめた。こゝに佞臣の跋扈が巢くひ、その不正な裁きに奥羽の争亂が起るなど、暗澹たる雲霧は今や世を覆ふに至つた。かくて、幕府の地方統制は著しく弛んだが、武家相互の葛藤によつて、幕威が直ちに衰へはてたわけではなかつた。元寇に際して頓に昂揚した國民精神も、歲月を重ねてはまた昔日の面影なく、武士は多く功利に奔り大勢に順應するのみで、尊皇倒幕の志を抱く少數の武士も、なほ起つに至らなかつた。かゝる時、後醍醐天皇が現れ給うたのである。

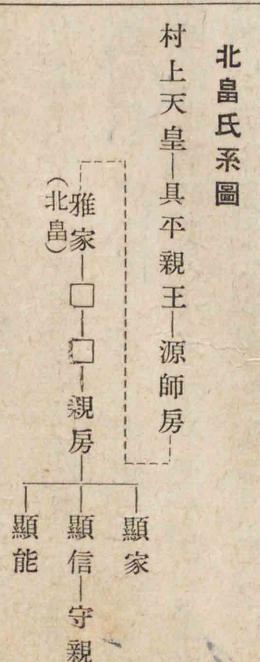
〔後醍醐天皇の御創業〕 後醍醐天皇は、文保二年、皇位に即かせ給ひ、元亨おんこう元年、後宇多法皇が二百三十年間の慣例を廢し院政を

醍醐天皇
持明院統
大嘗手稿
大嘗手稿
大嘗手稿
大嘗手稿

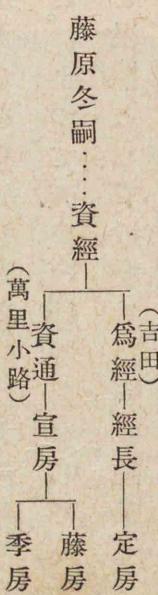
停止されるに及んで、朝政を親裁あらせられることとなつた。

天資英邁、和漢の學に精通あらせられた天皇は、特に醍醐天皇・後三條天皇・後鳥羽天皇の御鴻業を追慕し給ひ、政治の復古・延喜・天暦の聖代の再現を志し給うた。天皇は、先づ記録所を復して御みづから訴訟を聽斷あらせられ、稅を徵して民の煩をなし來つた關所を廢止し給ひ、また飢饉による米價の暴騰を抑へて價格を公定し供御を節して窮民を賑恤あらせられるなど、數々の御仁慈を垂れさせ給うた。時に北畠親房・萬里小路宣房・吉田定房のいはゆる三房が天皇を輔翼し奉つたが、更に天皇は、日野資朝・同俊基の如き身分の低い俊才を拔擢あら

北畠氏系圖



吉田・萬里小路家系圖



せられ、人材登用の道を開いて、朝政の振興に努め給うた。

かくて朝政は頓に振肅したのに反して、幕府の施政は愈々紊亂するばかりであつた。

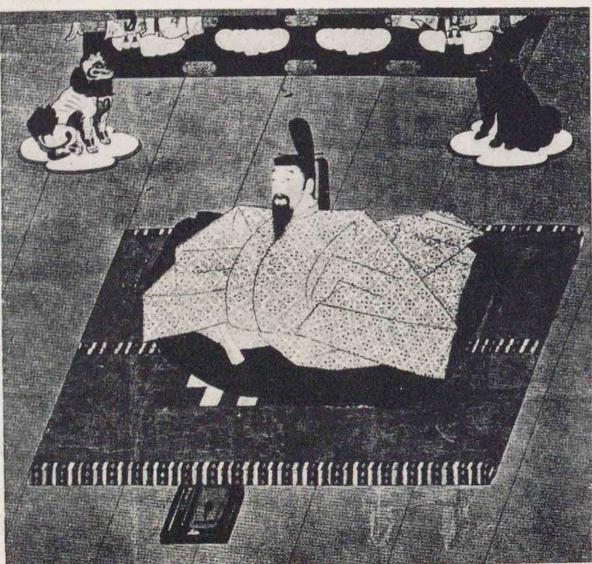
これをみそなはした天皇は、断乎たる御決心を以て、後鳥羽上皇の御遺志を完うし給ふべく、皇政の復古を企圖あらせられた。

こゝに資朝・俊基は、命を拜してそれぞれ東國・紀伊に赴き、勤皇の兵を募つた。しかるに、極秘の計畫も六波羅探題に漏れ、幕府は兵を發して機密に與

元弘の變

つた武士を殺し、資朝・俊基を捕らへた。よつて萬里小路宣房は、命を拜して鎌倉に下向し、多方辯疏に努めてわづかに事なきを得、俊基は赦され資朝は佐渡に流されて、一應事件の落着を見た。時に正中元年、世にこれを正中の變と稱する。

天皇は、一旦の蹉跎に屈し給はず、皇子護良親王・俊基・法勝寺圓觀・醍醐寺文觀等の參畫、南都・北嶺の兵力によつて、再舉を企て給うた。しかるに、その御計畫も、機未だ熟さぬ中に、再び幕府の探知する所となり、かくて俊基・圓觀・文觀等は幕府に囚はれの身となり、雄圖の御貫徹は前途多難を思はしめた。時に元弘元年であつた。事の叡慮に出でたるを察知した幕府は、大波羅の兵を發して皇居に迫らしめた。よつて天皇は、神器を奉じて笠置山に潛幸あらせられ、こゝを根據として、近畿の諸國に勤皇の兵を募らせ給うた。しかも、續々と増強される賊軍の間斷なき攻撃



後醍醐天皇御影像



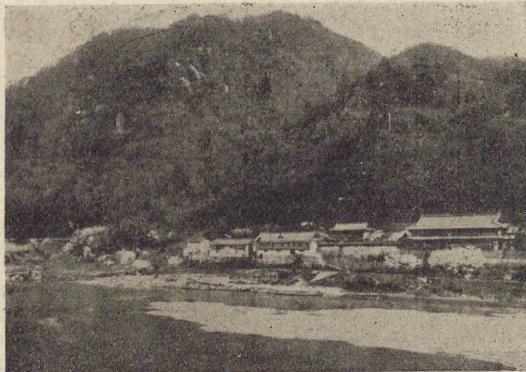
太 平 記 の 一 節

勤皇將士の
蹶起

第十一章 建武中興

再擧の御企の顛末を世に元弘の變と稱する。
③北條氏の滅亡 大道廢れて民の心の治め難き世にも、大義の

山笠
幕府の無道により、天皇は、盛りの花も置散りがての都を發輦あらせられ、滄海沈々として夕陽浪に沒する隱岐の孤島に遷らせ給うた。幕府は、更に參畫の朝臣・僧侶の處分を行ひ、資朝・俊基を斬り、文觀・圓觀を遠流に處した。倒幕



に、防備手薄き笠置の砦を保つことは困難であつた。かくて、暗夜ひそかに笠置を落ちさせ給うた天皇は、御行路に申すも恐れ

多き御艱苦をしのばせられ、やがて、幕

兵警固の中に京都に還幸あらせられ

た。その年も明けて元弘二年春三月、

幕府の無道により、天皇は、盛りの花も

置散りがての都を發輦あらせられ、滄海

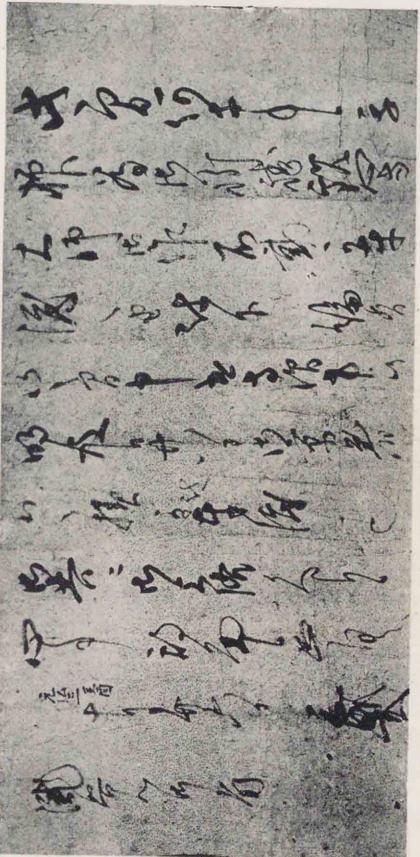
沈々として夕陽浪に沒する隱岐の孤

島に遷らせ給うた。幕府は、更に參畫

の朝臣・僧侶の處分を行ひ、資朝・俊基を

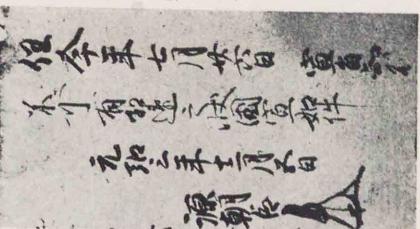
斬り、文觀・圓觀を遠流に處した。倒幕

楠木正成

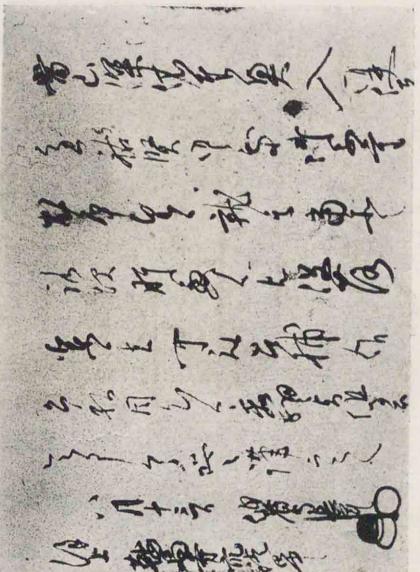


楠木正行

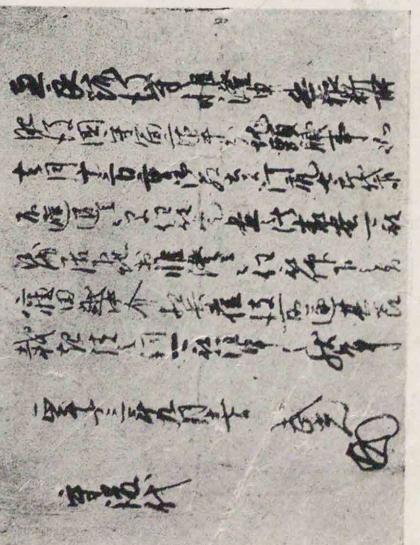
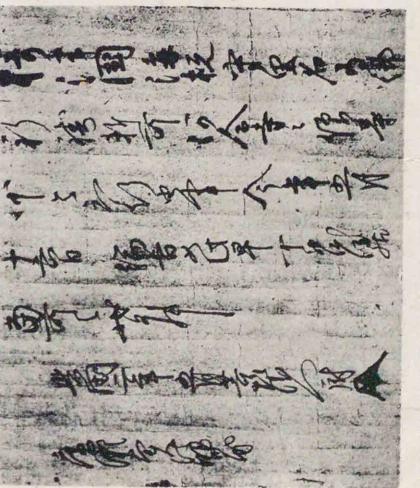
新田義貞



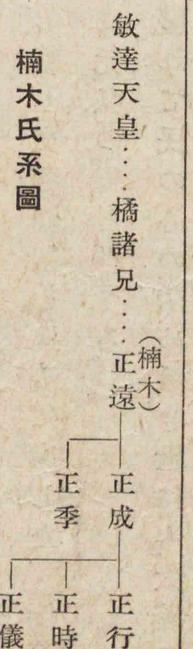
年長和名



光武池菊



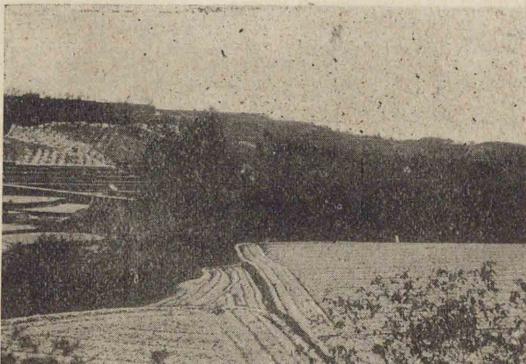
燈は消えはてたわけではなく、荆棘の中に勤皇の旗幟が閃き始めた。宵空に輝く金



楠木氏系圖

星にも似て、先づ蹶起したのは河内の楠木正成であつた。

さきに、後醍醐天皇が笠置にました時、正成は率先して勤皇の兵を赤坂城に上げ、笠置の危急に備へたのであつた。笠置陥落の後、護良親王をここに迎へ奉つた正成は、餘勢を驅つて攻寄せる賊軍を悩ましたが、空しく赤坂も陥ると、親王とともに巧みに晦走

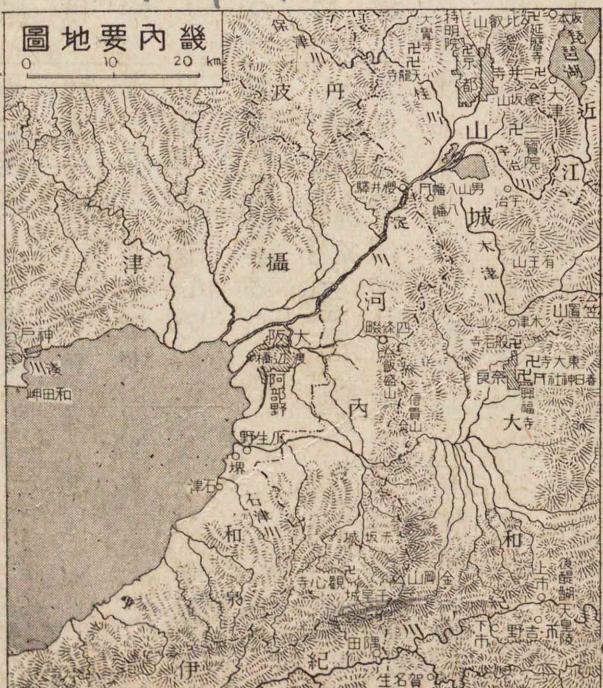


楠木正成の舉兵

して再舉の兵を募つた。その後正成は、神出鬼没、或は赤坂を回復し、或は攝津渡邊の戦に六波羅の兵を破つた。やがて金剛山の中腹に千早城を築き、こゝを根據とした。正成は、雲霞の如き賊の軍勢に對し、智謀の限を盡くしてこれを悩まし、寡兵よく孤城を支へて、諸國の勤皇將士に舉兵の機會を與へた。

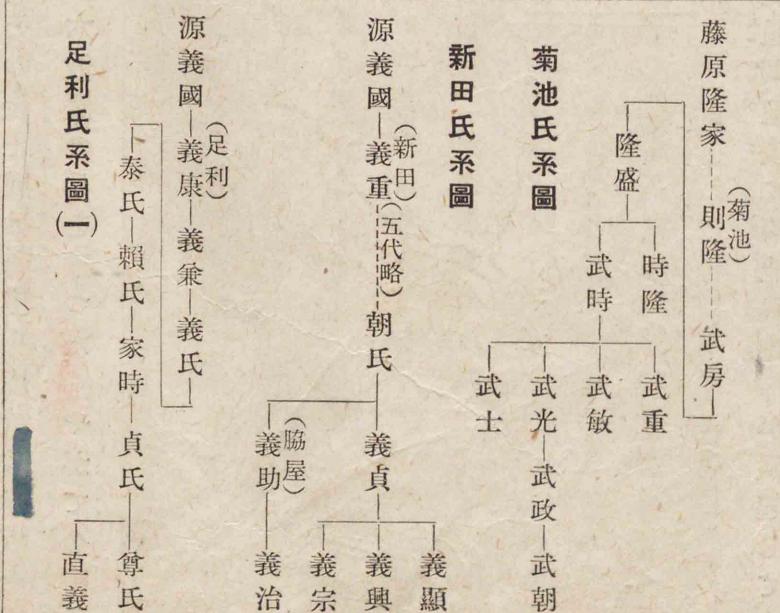
かくて、播磨に赤松則村、伊豫に土居通増、得能通綱、肥後に菊池武時等が蹶起して、官

兵 諸將の舉



軍の意氣は大いに揚つた。特に、累代勤皇の家に生まれた菊池武時は、北條氏の守も固き九州に於て、虎穴に入る危険を冒して舉兵の魁をつとめ、九州探題を博多に攻めて壯烈な戦死を遂げた。

隱岐にまします天皇は、承久の昔しのぶ荒き波風を聞かせられ、ひそかに時期の到るを待ち



給うたが、官軍振起の報を得させられると、機を見て仲耆に渡りになり、名和長年の奉迎を受けさせて、船上山に移り給うた。かくて官軍の勢は愈々振るひ、幕府が派遣した名越家は敗死し、足利尊氏は歸順して、六波羅の牙城も遂に陥り、征途の賊軍また多く形勢を察して歸伏した。しかも、西上に主力を注いで手薄となつた鎌倉は、護良親王の令旨を奉じて起つた上野の新田義貞と鎌倉にゐてこれに呼應せる結城宗廣とに攻略され、高時は自害し、一族多くこれに殉じて、北條氏はこゝに亡びた。時に紀元一千九百九十三年、元弘三年の五月であつた。かくて鎌倉幕府は、賴朝の開設以來凡そ百五十年にして倒れた。

船上山から京都への還幸の途すがら、續々と捷報を得させ給うた天皇は、鳳輦を兵庫に迎へ奉つた正成を先驅に、龍顏いとも麗しく、六月内裏に還御あらせられたのである。

公卿・武士の中より適材を選任あらせられたが、武者所は職掌の性質上、専ら武士を勤務せしめ、新田義貞をその頭人となし給うた。しかし、兵馬統帥の權はもとより皇室に存すべきもの、よつて護良親王を征夷大將軍に任じて、武士の總督たらしめ給うたのである。

地方制度

紫雲ノ經理
公家政治監督在任

かくて天皇は、公武の人材を任用して中央官制の運用を圖り給ひ、地方制度また概ねこの方針に基づいて調整あらせられた。即ち、鎌倉時代の舊態を殘して地頭の權能を容認せられるとともに、その上に國司・守護を併置し、公武の適材を補任あらせられた。中でも奥羽と關東は、遠隔にしてしかも幕威浸潤の地であつたため、特にその統治に留意あらせられた。即ち、北畠親房の子顯家を陸奥守に任じ、皇子義良親王を奉じて多賀國府に駐劄せしめられ、また足利尊氏の弟直義を相模守に任じ、皇子成良親

王を奉じて鎌倉に駐在せしめられ、兩者相俟つて東國の制馭に當らしめ給うた。

こゝに新政の施設が整備したので、天皇は、翌元弘四年正月、年號を建武と改められ、皇子恒良親王を皇太子と定め給うた。よつて、この萬機親裁による諸政一新の御改革を、世に建武中興と申し上げるのである。

③ 中興の精神 天皇は諸制度を樹立せられるに當つて、今の例は昔の新例なり、朕の新儀は未來の先例たるべし。との旨仰せられ、中興政治の御精神を昭示あらせられた。即ち、皇祖肇國の精神は、日々維新なる政治に基づき、未來に向かつて展開さるべきものとなし給ふ聖旨が拜察される。更にまた、建武中興の中興たる所以も、この聖旨によつて窺ひ知ることが出来るのである。

復古維新の精神

建武改元

かかる御精神は、既に天皇の御創業に顯現せる所であるが、天下一統の中興政治が創められるに及んで、更に擴充具現された。即ち天皇は、院政・攝關政治・武家政治等の殘滓を拂拭して親政を復し給ひ、更に、萬機親裁の下に、諸皇子を政治に參與せしめられ、また文武の別なく人材を適所に任用あらせられた。これ、一君萬民の國體に基づく政治の維新であり、新政にしてなほ武家を任用し給うたのは、かかる遠大な御抱負に基づくものである。

武家人材の擢用と武家政治の容認とが、その本質に於て全く異なることは自明である。北畠顯家が、陸奥守拜命に際して、文の家に生まれ武を辨へぬ身の不適任を理由に、これを拜辭した時、天皇が、公家一統の御代に文武の道二つあるべからず今よりは武道を兼ねて藩屏たるべき旨を諭し給うたことは、建武新政の御精神を如實に示し給うたものである。

肇國の精神の顯現

民心の動向

かくて中興の精神は、大化革新の場合と同じく、國體の本義に照らして政治の歪曲を矯め世態の昏迷を正し、以て皇基の振起、國運の伸張を期する宏遠な精神であり、後の明治維新の精神とも相通じて、一貫する肇國の精神の顯現であつた。

③新政の挫折 萬民安堵の思召による復古維新の政治の精神を體すれば、國民たるもの我を去り欲を捨て、特に武士は、武士道の眞義に徹して自肅自戒、ひたすら聖業の恢弘を翼賛申し上げるべきであつた。しかるに、時流に染まり功利に奔つて治め難き民の心に、深遠な中興の精神の體得は困難であつた。かくて、後醍醐天皇の遠大な御抱負を奉體し得ぬ武家の輩は、聖恩に狎れ舊習を守つて、徒らに新政の進捗を阻害し奉るが如き行動に奔つた。

政務の滯滞

寺またこの風に捉はれ、事の先後を無視してしきりに行賞を求めた。かくて、論功行賞の範囲は廣汎に亘り、その實施は困難を極めた。殊に、倒幕の功を論ずれば、動機の正邪、成果の大小の判定に悩まされ、行賞の方途を講ずれば、複雑多岐な當時の土地制度に累はされ、恩賞方の處置は甚だしく圓滑を缺いた。雜訴決斷所には、土民の訴訟申請が山積して審理の難澁甚だしく、自らその裁決は拙速に陥つた。かくて、有司の困憊は公武の軋轢を生み、人心の不安は騒擾をはらんで、新政の前途は暗澹たるものとなつた。

かゝる政務の澁滯を救ふためには、官民各個が焦慮を抑へ我執を捨てて、和衷協同以て奉公の精神に生きることが肝要であつた。しかるに、行賞の結果によつて公・武・僧・侶相互の紛糾は深められ、羨望・不平の聲が巷に満ちて、軋轢抗争の渦は漸く大なる

公武の軋轢

ものとなつた。殊に、東國武士の多くは、勤皇の動機を無視して倒幕の軍功を誇り、公卿・僧侶二三の驕慢に刺戟されて徒らにその威福を誇り、また純忠の正成長年等を田舎侍と目してその榮達を妬んだ。かくて、恩賞の失當を叫び、求めて飽くなき武士の私欲は、幕政追慕の念を芽生えしめて、尊氏の野心をはぐくみ、早くも新政を破綻せしめるに至つた。

隨つて新政の挫折は、宏謨を翼賛し奉るべき國民に、中興の精神の體得が不徹底であつたことに起因する。久しう大政に與らなかつた朝臣の施政の未熟が、政務澁滯の原因となり、行賞に對する不平が公武の軋轢を激化し、更に、新政に對する士民の失望が人心の動搖を生んだでもあらう。しかし、政務の澁滯、公武の軋轢、人心の動搖等新政の進展を阻んだ諸事象は、すべて臣民たる分の自覺の缺如特に、傳統的勢力を恃む武士の無自覺によ

新政挫折の
眞因

つて惹起された。かくて、後醍醐天皇の遠大な御抱負も空しく、世は再び禍亂に投ぜられて、中興政治は早くも挫折するに至つたのである。

三 吉野時代

尊氏の野望

○尊氏の謀叛 新政の推移とともに、かねて幕府再興の非望を抱いてゐた足利尊氏は、その地位・人望を利して巧みに事を構へ、大義に暗き武士を靡かしめて反旗を翻し、海内鼎沸の禍亂を惹起した。尊氏は、建武中興に機を借りて、父祖以來の宿志たる北條氏の覆滅を圖りしかも、過分の恩賞に預つてなほ聖恩の辱さを思はず新政翼賛の重職にあつてその責に任せず、遂に去就を誤り、叡慮に背き奉るに至つた。大義に悖るも甚だしきもの、その罪まさに萬死に値する。

謀叛の兆候

尊氏の野心を早くも看破されたのは、護良親王であつた。よつて親王は、尊氏の勢威が頓に旺となるや、新政の前途を憂慮せられ、義貞・在成・長年等純忠の士と力を協せて、これを除かうと圖り給うた。それと氣づいた尊氏は、機先を制して謀をめぐらし、かくて親王は空しく鎌倉に遷り給うた。不遜極る尊氏の詐謀に、謀叛の兆候歴然たるものがあつた。

北條氏の滅亡後、殘黨は各地に騒亂を起して新政の進展を妨げたが、建武二年、高時の遺子時行を擁して起した中先代の亂は、その最も大なるものであつた。即ち、信濃に揚つた時行の反旗が、やがて鎌倉に迫ると、直義はこれを防ぎきれず、成良親王を奉じて西走した。この亂が尊氏に謀叛の機會を與へた。

時に京都にゐた尊氏は、心中好機の到來を喜び、時行の征討、征夷大將軍の拜命を奏請したが、朝廷では既に尊氏の野望を知り

尊氏の舉兵

叛亂の端緒

賊軍の西走

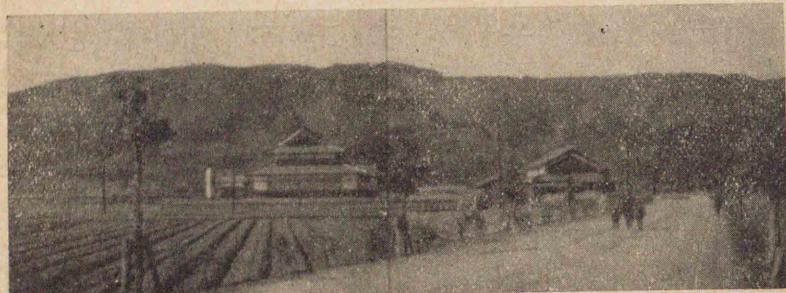
給うて、これを裁可あらせられなかつた。よつて尊氏は、勅許を待たずして京都を發し、途に直義と合して、ゆくく時行の軍勢を破り、やがて鎌倉を回復した。しかも尊氏は、幕府の舊址に居館を營んで東國の經略に努め、更に義貞討伐の檄を諸國に傳へ、これを上奏するに及んで、遂にその野望を露はにした。

③正成の戦死

尊氏慰撫の效も空しく、事こゝに至つては、朝廷も敢然膺懲の意を決して、義貞に東征を命じ給うた。

しかるに、賊軍西上の鋒先銳く、京都は一時敵の犯す所となつたが、義良親王・北畠顯家の西上によつて、官軍の士氣大いに揚り、顯家・義貞・正成長年等の奮戦は、破竹の賊軍をよく敗走せしめた。尊氏兄弟は、西走して九州に至るや、巧みに少貳・大友・島津王氏を糾合し、兵力の増強を圖つた。やがて、賊軍の勢威は九州を風靡するに至り、肥後の菊池武敏・阿蘇惟直等官軍必死の反撥も、空しく多多良

官軍の奮戦



濱の敗戦となり終つた。

朝廷では、賊軍西走の間に、義良親王・顯家等をして急遽東國の經略を圖らしめられ、また義貞をして銳意山陽の賊勢撃破に努めしめ給うた。兵威を回復した賊軍は、やがて九州を進發、途に軍勢を分ち、海陸二道から相呼應して東上した。朝廷では、義貞に命じてこれを邀撃せしめられ、更に正成に援軍を命じ給うた。宮闕の松の緑を見をさめて京都を立つた正成は、青葉茂れる櫻井の里のほとりに駒をとめて、一子正行に後事を諭し、一路兵庫に軍を進めた。やがて雲霞怒濤の大軍を邀へて、義貞・正成は

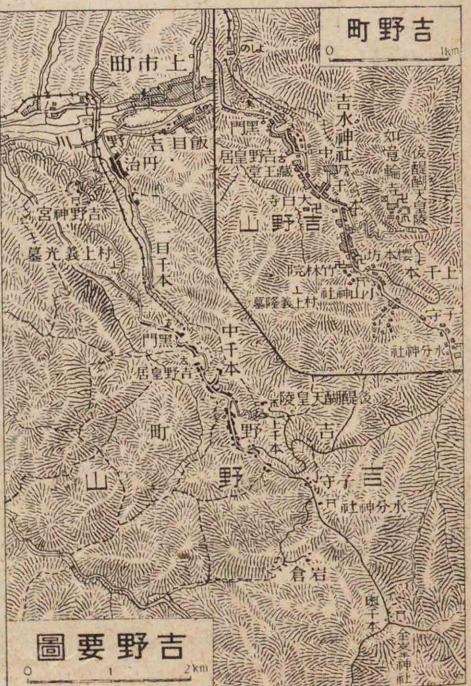
寡勢よくこれを防いだが、遂に敗れて義貞は退き、正成は弟正季と七生報國の誓を遺し、一族・郎等六十餘人とともに、惜しくも湊川がはの露と散つた。天皇は、難を避けて叡山に行幸あらせられ、義貞・長年等は、京都闖入の賊軍と戈を交へて京都の回復に努めたが、やがて長年も戦死した。かくて官軍は續々と柱石を失ひ、尊氏は、賊名を避けようとして、豊仁親王とよひと しんわを立てて天皇と申し上げるなど、その擅恣は愈々募つた。

吉野遷幸

聽し召すこととなつた。以後五十七年に亘り、朝廷は概ね吉野にましましたので、この間を世に吉野時代（じだい）と稱する。

天皇は、吉野に行宮を定められると、東國

西國・北國に於ける官軍の振起を待つて京都の回復を期し給うた。しかるに北國では、親王方の御辛酸も義貞等の努力もかひなく、遂に金崎かながさきの落城となり、兩親王はいたましくも空しくならせられ、義貞また藤島とうとうに壯烈な戦死を遂げた。賊勢旺な陸奥の經營に當つた顯家も、義良親王を奉じて荆棘を切開き、やうやく



官軍不振

西歸したものの、相つぐ激戦に力盡き、遂に石津に戦死した。思へば元弘の舉兵以來、終始かはらず大君の御楯となつて奮闘せる忠誠の諸將も、武運拙く概ね戦死して、官軍不振の時運となつてしまつた。

後醍醐天皇
の崩御

顯家・義貞が戦死して、吉野に落莫の秋が訪れたが、天皇はいささかも搖ぎ給はず、義良親王・北畠親房・同顯信・結城宗廣等に命じて、再び東國の經營を圖らしめ給うた。しかるに、その年も暮れて翌延元四年の八月、天皇はふと秋霧におかされ給ひ、後村上天皇(義良親王)に御讓位あらせられ、朝敵討滅・四海太平の御遺詔に不撓不屈の御精神を述べさせ給うて、遂に崩御あらせられた。寶算まさに五十有二、御在位二十年に亘らせ給うた。その間、波瀾重疊の世運に處して、皇基の振起に努め給うた聖業の數々、高邁な御理想毅然たる御態度をしのび奉れば、國民たるもの、誰か

感奮興起せざるべからぬよう。

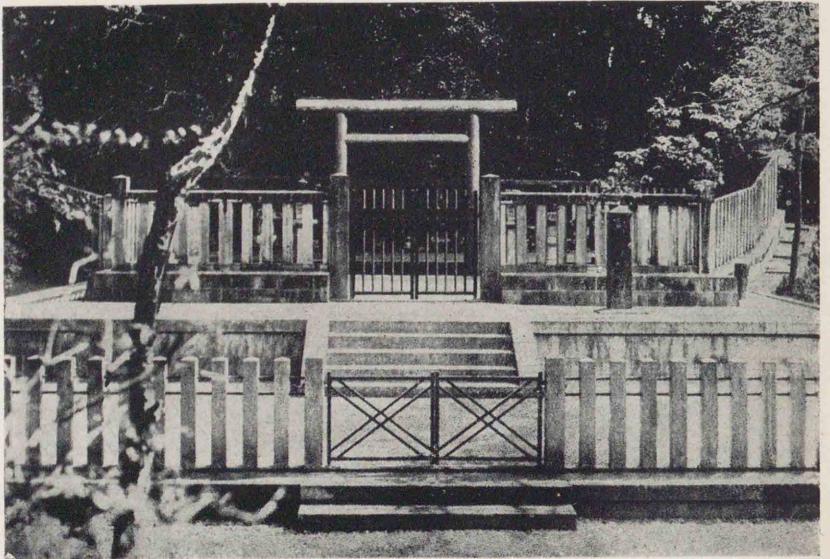
四 芳山の遺烈 かくて、近侍警護の朝臣・武士は、雨の夜の灯もなき行歩に堪へて、ひたすら後村上天皇を輔翼し奉つた。時に常陸の小田城にあつた親房も、後醍醐天皇崩御の悲報を受けて、大いに驚き、直ちに吉野に歸つて今上を輔け奉らうとしたが、東國の形勢がこれを許さなかつた。よつて親房は、御統治の参考に資し奉らうとして、據るべき資料も乏しく記憶の糸も亂れがちな兵馬倥偬の間に、至誠と叡智を傾け盡くして、神皇

北畠親房と
神皇正統記

子は云々又は後醍醐天皇の御統治の参考に資し奉らうとして、據るべき資料も乏しく記憶の糸も乱れがちな兵馬倥偬の間に、至誠と叡智を傾け盡くして、神皇

天皇の御統治の参考に資し奉らうとして、據るべき資料も乏しく記憶の糸も乱れがちな兵馬倥偬の間に、至誠と叡智を傾け盡くして、神皇

烈 遺 の 山 芳



陵尾塔皇天酬醧後



觀 大 山 野 吉

正統記を草した。即ちこの書は、神代以來の國史の大要を述べて、我が國體の無比な所以を説き、皇位繼承の正統を論じて大義名分を明らかにせるもの、まさに親房が宏謨翼贊の眞情を吐露せる血涙の結晶であつた。

體 御遺詔の奉

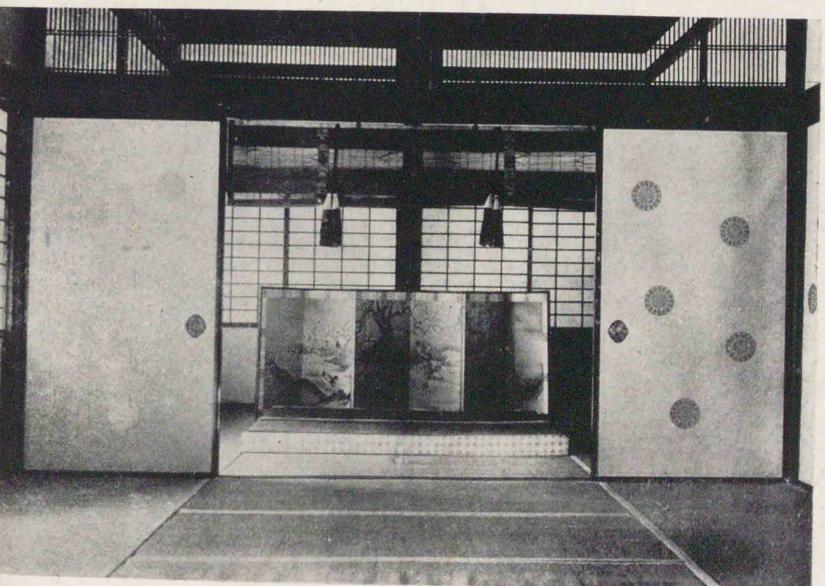
忠臣の武勳

その後、後村上天皇・長慶天皇・後龜山天皇御三代を通じ、終始一貫、後醍醐天皇の御遺詔に基づき、皇政の興復に努めさせられ、諸皇子また金枝玉葉の御身をおいとひもなく、僻遠の諸地方に辛酸を嘗め給ひ、凜然たる意氣を以て、官軍の振起に盡瘁あらせられた。また北畠親房は吉野に歸つて朝廷の柱石となり、楠木・新田・菊池の諸氏も勤皇の旗幟明らかに足利勢の進出を阻み、その行實よく父祖の譽を辱しめなかつた。

所 在 行



生 賀



金剛寺尼院

形勢の推移

池武光は、懷良親王を奉じて九州の招順は成功し、筑後川の決戦に赫々たる武勳を立てた。また新田義興は、宗良親王の指揮を仰いで銳意東國の經營に當り、遂に武運拙く矢口(武藏)に斃れた。正平の御代を點綴するこれら忠臣の武勳によつて、一時官軍の士氣は大いに揚つた。

しかし、大勢は依然官軍に不利であつた。殊に、正行の戦死によつて、近畿の守は思ふに任せらず、更に正平九年親房の薨去によつて、帷帳の計もまゝならず、行宮も時に賀名生(大和・天野河内等)に遷される有様であつた。ひとり九州に於て、官軍の勢威は大いに振るつたが、吉野との連絡が十分でなく、大勢を挽回するに至らなかつた。

かくて御代の移りゆくにつれ、官軍不振の形勢は愈々顯著となつたが、大義に徹する吉野方の固き決意は、いさゝかも搖がなか

國子の御

京都還幸

勤皇精神の
發現

つた。却つて、利欲を以てつながる足利勢に、紛々たる内訌跡を絶たず、ために、强大を誇る兵勢も自ら統制を缺いて、脆弱を暴露した。かかる間に、足利氏も尊氏の後義詮を経て、義満の代となつた。義満は細川頼之の輔佐を得て、武家勢力の統制に成功する。後龜山天皇に京都還幸を奏請した。

天皇は、多年の兵亂による國民の憂苦を思し召され、紀元二千五十二年、元中九年、京都に還幸し給ひ、後小松天皇に御讓位あらせられた。後醍醐天皇の吉野遷幸以来、大義と利欲との葛藤ここに五十有七年、芳山の遺烈は、どこしへに燐として國史に輝くのである。

⑤勤皇精神とその影響 建武中興を中心とする前後六十餘年の推移に於て、國民の多數はなほ大義に暗かつたが、聖旨を奉體して、中興の大業を翼賛し奉り、新政敗れて後は、吉野の朝廷に奉の勤皇精神は千代萬代に不朽不滅である。

國子の御
行實と勤皇
精神の鼓舞

諸皇子の御

行實と勤皇

精神の鼓舞

國子の御
行實と勤皇
精神の鼓舞

諸皇子の御

行實と勤皇

精神の鼓舞

國子の御
行實と勤皇
精神の鼓舞

諸皇子の御

行實と勤皇

精神の鼓舞

國子の御
行實と勤皇
精神の鼓舞

諸皇子の御

行實と勤皇

精神の鼓舞

國子の御
行實と勤皇
精神の鼓舞

諸皇子の御

行實と勤皇

精神の鼓舞

國子の御
行實と勤皇
精神の鼓舞

諸皇子の御

行實と勤皇

精神の鼓舞

國子の御
行實と勤皇
精神の鼓舞

諸皇子の御

行實と勤皇

精神の鼓舞

國子の御
行實と勤皇
精神の鼓舞

諸皇子の御

行實と勤皇

精神の鼓舞

國子の御
行實と勤皇
精神の鼓舞

諸皇子の御

行實と勤皇

精神の鼓舞

國子の御
行實と勤皇
精神の鼓舞

諸皇子の御

行實と勤皇

精神の鼓舞

國子の御
行實と勤皇
精神の鼓舞

諸皇子の御

行實と勤皇

精神の鼓舞

精神の鼓舞

精神の鼓舞

精神の鼓舞

精神の鼓舞

精神の鼓舞</

勤皇精神と
文化

し給うた懷良親王の毅然たる御態度等、勤皇精神の振起、官軍士氣の鼓舞に與つて大いに力があつた。

勤皇精神はまた文化に反映し、凝つては清純の史書を生み、咲いては馥郁の文學をはぐくんだ。殊に新葉和歌集は、宗良親王が、後村上天皇の御遺志を承け給ひ、元弘・弘和の間、御三代五十年に亘る御製・御歌を始め奉り、諸忠臣の和歌を撰集あらせられ、勤皇精神の御蹟筆である。新葉和歌集の御蹟筆は、宗良親王の芳山の餘薰これに如くものはない。精神の高潔、格調の悲壯並びすぐれ、切々たる忠誠の情は、卷中幾多の秀歌を生み、一首をとつて高唱するもの、忠勇義烈の歌に富み、たるもの、忠勇義烈の歌に富み、たるもの、忠勇義烈の歌に富み、

も、皇事に奔走の蹄の音が聞える。兵亂の世にも、大義の光たゞ射す時は、文化の花は清らかに咲く。勤皇精神こそ、吉野時代の文化創造の糧であつたのである。

國民の血にひそむ勤皇精神は、江戸幕末に至り、かかる史珠文藻によつてよびさまされた。太平記・神皇正統記・新葉和歌集等にしのぶ忠勇義烈の事歴が、尊皇精神を鼓舞し、志士を感奮興起せしめたのである。高山彦九郎は太平記を

勤皇精神の
永續

読んで勤皇の志を立て、吉田松陰はこれを座右の書とした。大日本史・日本外史等の史書は、神皇正統記の精神を酌んで編述され、藤田東湖はこの書を禮讃してやまなかつた。新葉集の歌は幕末刊行の幾多の編著に引用されて志士の肺腑を剔り、梅田雲濱は新葉和歌集を愛誦して、これを疊に下すことさへ戒めたといはれる。かくて一度は廢れた書も、時の推移に遡つて芳山勤皇の遺烈を傳へ、建武中興の精神は明治維新の大業に生きるのである。

宗良親王御歌

君のため世のためなにか惜しからむ

捨ててかひある命なりせば

第十一章 室町時代の政治と文化

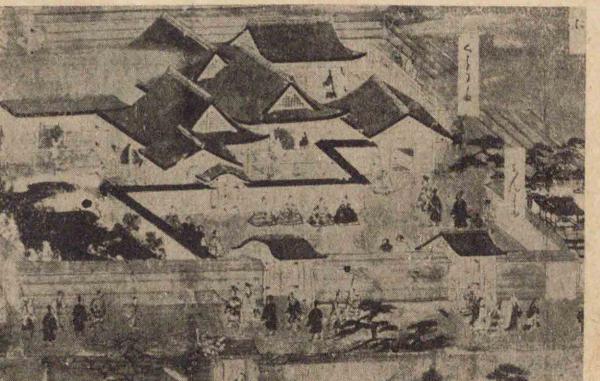
一 室町幕府

幕府再開の
端緒

（一）幕府の再興 建武新政の蹉跌に乘じて反旗を翻した尊氏は、人心の動向を察知して武家政治の再興を企て、延元元年、九州から東上して京都に入ると、早くも政治の大綱を定めて幕府再興の端緒を開いた。即ち、貞永式目・建武式目十七箇條等を以て施政の基準となし、鎌倉幕府の職制を模して諸職を設けた。しかも尊氏は、幕府の本據を鎌倉に定めようとしたが、軍略上、京都を離れることができず、よつてその子基氏に關東管領の重任を託して鎌倉に派遣し、以て東國の鎮撫に當らしめた。かくて尊氏は、大義に暗き武士の總帥として擅に幕府を開いたが、功利に敏

き武將に擁せられたこととて、威令は更に行はれず、同族・主従の間に内訌を起して、軍務の遂行さへとかく圓滑を缺いた。下剋上げじやうの弊も甚だしく、治亂常なき世態の昏迷は、早くもこゝに胚胎した。

幕府の成立



幕府の成立 室町

義詮を経て義満の代になると、義満の才腕、細川頼之の輔佐相俟つて、内に紀綱を振肅し外に諸将を抑壓して、足利氏の勢威は漸く盛となり、幕府もこゝにその成立を見るに至つた。室町幕府の稱は、義満の新邸の所在地たる室町の名に因んだものである。

制度の特質

③幕府の制度　幕府の諸制度が整備したのは義満の時であり、

その政綱・職制は、ともに鎌倉幕府と大同小異であつた。兩者の類似は、室町幕府成立の事情に鑑みて當然の歸趣であり、その小異は、概ね幕府所在地の變更に起因するものであつた。たゞ制度の運用に至つては、鎌倉幕府の場合と大いに異なつてゐた。即ち、鎌倉幕府の制度は、事態に即して樹立され、適材がこれに配當されたため、その機能はよく發揮されたが、室町幕府の制度は、前者の模倣踏襲の域を出ず、これが權臣によつて左右されるに及び、自らその權威も失はれた。室町幕府は、ひつきやう鎌倉幕府の亞流に外ならなかつたのである。

かくて、職權は利權視されて官職世襲の傾向が漸く著しく、また家臣の職務代行が慣例となつて、公私混同・綱紀紊亂の弊を醸した。

將軍を輔佐して政務の統轄を掌る管領の要職は、足利氏の一

綱紀の紊亂

府内の情

族斯波・畠山・細川三氏
から補せられて三管

領と稱せられこれに

つぐ要職たる侍所の
所司は、山名赤松・一色・京極四氏から補せられて四職と名づけられ、更に、所司は家臣に職務を代行せしめたため、所司代の稱が生まれた。

地方の情勢

かかる傾向は、地方制度に於て更に著しく、關東管領は、東國の鎮として幕府に准ずる規模を有し、その職は基氏以來子孫の世襲する所であつた。官職世襲・綱紀紊亂の弊は、守護制に於て最も甚だしかつた。しかも足利氏は、守護の補任を行賞の具に供したので、守護もまた所管の土地を私領と見なすに至り、數箇國の守護を兼ねる者も漸く多く家臣を選んで守護代となし、これ

足利氏と三管領

足利義康 義清(細川氏)
義兼 義純(畠山氏)
家氏(斯波氏)

足利義康 義兼 義氏 泰氏 賴氏

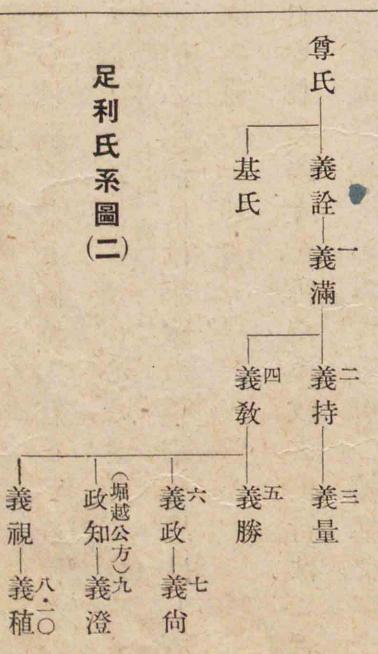
地方の情勢

に職務を代行せしめる習はしをさへ生じた。かの三管領・四職の諸氏も、實は强大な守護に外ならなかつた。かくて室町時代の守護は、前代のそれに比して權力極めて大で、やがて地方に割據して將軍の命を奉ぜず、下剋上の世相を激化せしめて、幕府の解體を促すに至つた。室町中葉の碩學一條兼良が、守護を支那の戦国七雄に准へた所以である。

幕府の弱體

③幕政の推移 利に奔り力を恃む武家に、前代の如き緊密な團結はなく、擅恣欺瞞を以て出發した室町幕府また、これを統制することが出来なかつた。しかも、幕府

足利氏系圖(二)



守護の跋扈

が京都に開かれて公武の接觸が緊密になると、持ちもならぬ笏を持つ武士の氣風は自ら軟弱となり、高位顯官を望む代々の將軍はとかく分を忘れて僭上^{せんじょう}の沙汰に及び、心なき朝臣は上下となく將軍に阿附して、幕府の生活には、平家の榮華を思はしめるものがあつた。

かくては政綱の張る由もなく、時宜を得た施政また行はれず、徒らに士風の弛緩、財政の紊亂を招くのみで、幕府の機構に尾大不掉の形勢が現れるのは當然であつた。諸將の跋扈を抑へて幕威の伸張を圖つた義満^{よしのぶ}へ、守護の強き勢威に對し、遂に拔本塞源の功を收めることが出来なかつた。義満の代に起つた明徳・應永^{めいとく・おうえい}の兩亂は、まさに守護の統制の困難を物語るものであり、しかもこれが契機となつて、幕府と關東管領との疏隔が深められたのである。

關東管領の滅亡

兩者の反目は年を逐うて

關東管領

足利基氏—氏満—満兼—持氏—成氏(古河公方)

激化し、遂に將軍義教と關東管領持氏との間に、永享^{えいきょう}の亂^{らん}を惹起した。持氏の敗北によつて關東管領は亡び、關東の實權は家臣上杉氏の手に移つた。こゝに幕府は、一臂を斷つてその體を弱めた。抑、尊氏が近親を分つて幕府の藩屏たらしめた關東管領の離反の顛末は、まさに室町幕府の脆弱を物語るものであつた。

しかも義教は、持氏討滅の勢に乘じ、赤松滿祐^{あかまつみづけ}の驕慢を制しようとして、却つて滿祐に謀殺された。嘉吉^{かきち}の亂^{らん}と稱せられるこの凶變に、最もよく下剋上の動向が現れてゐる。この際山名持豊^{よしとよ}(宗全)は、幕府の命を受けて滿祐を誅伐し、さきに義満に制壓された山名氏^{ともち}も、その功によつて往時の勢望を回復した。赤松氏

下剋上の趨勢

大亂の前兆

亂前の形勢
義政の失政

また管領細川勝元に支持され、やがて更生するに至つた。かくの如く、叛亂弑逆の罪によつて一時は沈淪に喘いだ諸氏も、ひそかに實力を蓄へて昔日の勢威を逞しうする。諸將跋扈の状、幕府脆弱の態、これによつて明らかである。しかもこれが、幕府の盛世を謳はれる義満・義教時代の様相である。

④ 應仁の亂 公事は足利氏の私事と化して政道の本立たず、幕府の地方統制は當を失して徒らに下剋上の風潮を馴致し、亂は亂を生んで波瀾は漸く大となり、遂に應仁の大亂が起つた。義政が將軍に任せられた頃、幕府の生活には奢侈安逸の傾向が著しかつた。幕府は、冗費の出途を増税に託し、更にその財政的危機を徳政の非常手段を以て打開しようとし、義政一代に、徳政令の發布は十三回に及んだ。これに飢饉・疫疾の災厄が加つて、庶民の憂苦は日毎に募つた。しかも義政は、風雅の遊に興じて、

て人民塗炭の苦を顧みず、濫りに新邸を營まうとしたので、後花園天皇は御製の詩を賜うてこれを戒めになつたことさへあつた。かくて世人は、澆季の到來を觀じて動搖甚だしく、物情自ら騒然たる中になほ斷ち難き我執の葛藤は、武家上層の抗争を激化せしめた。

この頃、管領家畠山・斯波兩氏は既に昔日の勢威なく、ひとり細川勝元のみが顯榮を擅にし、これに對抗する者は、四職の重鎮山名宗全であつた。海内の武將また權勢を求めて、それゝ兩氏に依存し、自ら天下二分の形勢が現れた。あたかも相ついで起つた畠山氏及び斯波氏の家督争、將軍家の後嗣問題は遂に細川山名兩氏の抗争を表面化せしめ、應仁元年、畠山氏一族の間に戦端が開かれるに及んで、兩氏はそれゝ軍を東西に構へ、地方の軍勢また陸續京都に集結して、戰火は忽ち京洛に擴がつた。

戰鬪の斷續まさに十一年、東は信濃遠江から西は長門に至る凡そ四十箇國の將兵がこれに参加し兩軍互に敵の後方攬亂を企てるに及んで、戰禍は自ら地方に波及した。その間、東軍の謀略、西軍の勇戦相匹敵して勝敗は容易に決せず、やがて兩軍の首腦部は戰に倦んで、戰の中心は下に移り、文明五年、勝元宗全は相ついで歿したが、依然として對峙交戦の情態がつゞいた。その後、東軍の方攬亂策が功を奏し、西軍の諸將が軍を領國に撤するに及んで、文明九年やうやく京洛の戰火は鎮まつた。



應仁の亂 戰

破壊と建設

この戰亂によつて、京都は忽ち修羅の巷と化し、巨刹・第邸の多くは焼失して、累代の重寶の鳥有に歸するもの數知れず、街衢の大部分は蕭條の荒野となり、たゞ聞くは夕雲雀の聲のみであつた。しかし、劫火舊態を拂つて、建設の一歩が踏出された。欺瞞に發し職責を忘れた幕府は、こゝに衰運の一途をたどり、これに依存して權勢を競うた武士は、上層から崩れ始めるとともに、兵火を逃れて地方に下つた公家は、文化を地方に傳播して、武將の勤皇を生む素地を造つた。前代未聞の禍亂にも、かかる建設的一面がひそんでゐる。

二 東山文化

室町文化の
前途

④ 東山時代 室町幕府が開かれて公武の關係が緊密になると、鎌倉文化に現れた公武二元の色彩は薄れ、こゝに京都を中心と

室町文化

文化の動向



する單一文化が形成されることとなつた。即ち、義満を始め幕府の首脳が公家へ接近したことによつて、その生活は貴族化され、鎌倉文化の遺産たる公武の異相は、早くも融合の一歩を踏んだ。義満の營んだ北山の金閣は、かかる文化の趨勢を具現するもので、金閣寺の裏殿造と禪院建築との折衷と目されるその構造に、室町文化の前途の姿が窺はれる。

波瀾漸く高き下剋上の世運に處して、施政なすなき代々の將軍も、文化に對する嗜みは深く、或は禪宗を保護し或は對明交通を

開き、その文化育成の功には見るべきものがあつた。かくて、生活化の度を深めた禪宗は、文化の諸分野に禪味の浸潤をもたらし、以て室町文化に精彩あらしめた。また、室町初頭から開始された明との通交は、幕府の卑屈な態度が禍して國威を損じたが、一面大陸文化攝取の路を擴げて、文化の洗煉に資する所が少くなかつた。かかる諸事情によつて、室町文化は、先づ國民の上層部に於て、傳承文化の洗煉を中心に形成された。しかるに、下剋上の時運が文化生成の領域にも及んで、文化の上下交流が行はれるやうになると、庶民文化勃興の兆も漸く濃厚となつた。將軍義政の時代は、かかる文化の轉換期に當り、應仁の亂による文化の地方傳播は、この氣運を促進するものであつた。

義政の時代は、義政が晩年東山に山莊を營んで銀閣を構へ、數年に亘つて藝文の生活に沈潛したことに因んで、文化史上東山

出音深寂ゆび
現代生活文化の淵源



慈照寺銀閣

時代と稱せられるが、この時代こそ、室町文化結實の時期であつた。金閣の華麗から銀閣の清楚への推移は、まさに室町文化の洗煉を示すものであり、しかも、金閣の様式を踏襲せる銀閣の構造に、やがて國民の住宅様式たるべき書院造が加味されることは、東山時代が室町文化の結實期にして、しかも轉換期であることを物語つてゐるのである。

東山文化と
現代文化

當つてゐる。現代文化特に生活文化の諸相の中に、その淵源を東山文化に求め得るものが少くないのは、まさにこれがためである。

舊佛教の勢威

三佛教の普及 元弘・建武以來の争亂に際し、公家・武家が競うて南都・北嶺の兵備に頼つたため、舊佛教の世俗的勢力は再興の勢を示し、延暦寺は依然教界至高の地位を保ち、興福寺また武將を凌ぐ勢威を誇つた。更に眞言宗の醍醐三寶院も、院主賢俊が尊氏に通じ、やがて満濟が幕政の機務に與るに及んで、その勢力を確立した。かくて舊佛教は、苟もその勢威・面目を傷つける者に對し、露骨な干渉を試み横暴を極めた。

禪宗の消長
五山の勢威

鎌倉幕府の保護を受けて興隆の一途をたどつた臨濟宗は、一時北條氏の滅亡と運命をともにするかに見えたが、やがて足利氏の歸依を受けるや、京都を中心に、往時にまさる勢威を示した。

先づ尊氏は、疎石（せき）夢窓國師に歸依し、天龍寺を建ててその開山たらしめ、ついで義満は、疎石門下の妙葩（めうぱ）春屋（しゅんや）・周信（しゅうじん）（義堂）等を尊信し、相國寺を建てて妙葩を開山に推したが、義満が京都・鎌倉それくに禪刹の寺格を定めて五山制度を確立するに及び、臨濟宗の勢力は牢固たるものとなつた。加ふるに、當時の禪僧は、内政の顧問、外交の使節となつて幕政に貢獻し、その聲望を高めた。これに反して曹洞宗は、開祖の精神を遵奉して權勢に依存せず、自力よく北國の地盤を固め、徐に近隣に進出した。



禪刹藍の圖

五山の淵落
大德禪寺者宣
あ奉朝ニ雙之
禪苑安棲千衆
令祝萬年門寺
ね承不行化つばふ
是海技之精巧之
ま流傳深辰釋
號言お詫華ア
元祐三年、洞嘗

しかるに、隆盛を誇つた京・鎌倉の五山も、應仁の亂を轉機とする幕威の急激な衰微によつて、凋落の非運に遭ひ、代つて大德・妙心兩寺が、臨濟宗の聲望を擔ふこととなつた。兩寺とともに幕府との關係薄く、あたかもこの頃、それく一休・雪江の名僧を出し、獨特の宗風を樹立して、その基礎を固めた。

一向宗・法華宗等もまた、臨濟宗のやうに、公武に接近して宗勢の振興を圖つたが、その效著しからず、やがて人心の不安が漸く募るに及んで、

一向宗の
發展

庶民の間にもその勢力を伸張した。

一向宗は、親鸞の歿後、東國の専修寺派と京畿の本願寺派とに分れ、それより宗勢を蓄へて室町時代に入つた。東山時代に至つて、本願寺派に蓮如、専修寺派に眞慧が現れるに及び、兩僧は競うて自派の興隆に努め、ために兩派の衝突さへ起つたが遂に本願寺派の勝利に終り、一向宗の勢威は頓に高まつた。

東國に興つた法華宗も、既に鎌倉末葉には日像^{にちぞう}が出て京畿地方に流布するに至り、その後公武の歸依を得て、次第に隆盛に赴いた。やがて、東山時代に日親^{にちしん}が出るに及んで、他宗を排撃してはその迫害を蒙り、義教を諫めてはその忌諱に觸れるなど、四面楚歌の中にあつて度重なる法難にも屈せず、ひたすら宗勢の伸張に努めた。かくて、法華宗は一時隆盛を極めたが、やがて延暦寺の強烈な迫害に遭つて、衰運をたどるに至つた。

法華宗の
盛衰佛教の大勢
と東山時代

かくの如く、室町時代の佛教は、新舊各宗各教派錯綜して盛衰興廢の跡を現じながら、國民生活に浸潤して行つた。その間、臨濟・一向・法華諸宗に對する延暦寺の迫害、一向宗・法華宗の衝突、一向宗兩派の角逐、一向一揆・法華一揆等の騒擾が現れたが、これまさに相剋の世相を反映するものであつた。しかも、一休・雪江・蓮如・日親等の高僧が陸續と現れ、室町佛教が頓に活氣を呈したのは、あたかも東山時代のことであつた。

③ 學問・文學の動向 治亂定めなき室町の世の學問は、依然公家・僧侶が家學・宗學として、これを保持するに止り、武家の學問に對する貢獻としては、上杉憲^{のりね}による足利學校の再興、大内氏・島津氏等有力武士の學問獎勵の外、見るべきものが殆どなかつた。

その學和漢に涉れる一條兼良は、歌道・神道ともに一家相承の學を傳へ、古今和歌集・源氏物語を講じ、日本書紀纂疏・花鳥餘情等

公家の學問

本草書紀述卷第一

藤義良述

神代上之一

叙曰混沌元氣沖漠無朕廟神明之本體圓法界之真機寂介赴感詳鑑含像動而滋萌如穀異薰清濁謂之器界中和發識名以情分純粹全氣合天子無生滅地為同根雜糅應性見善惡于異塗推前後而三世可了通幽明而六趣歷然如非歸正授先覺之模範

吉田神道

五山の學問

日本書紀述卷第一
神代上
此書人皇四百代至帝堯養老年中ニ御舍入親王本朝唐安九月二八奉勅撰益年五月廿一日奏覽スル舍入親王人皇四百代朱武未皇トハ三月御子也後テ崇道奉教宣事也本安九月太政大臣也御舍入親王人皇有二年壬午御事本紀曰古事記云三焉元也天皇御子也安九月也舊事本紀下卷也人皇三十一代用明天皇御子也舊事本紀下卷也此三十代諸神土也次三神本末也御事本紀下卷也此三十代諸神土也次此三十代諸神不加私詮以故爲最上ノ極ノ一切古事記也題字也集也序今也

數多の註釋書を著したが、常に神・儒・佛の一一致を主張し、國體の神聖を説き、我が國の政治が神祇崇拜を先とすべきことを論じたのは、注目に値する。

これに稍後れて吉田兼^{よしだ}は神道を根本、儒教を枝葉、佛教を華實に譬へて三教の統合を圖り、神本佛迹説を持して、吉田神道(唯一神道)を創唱した。

僧侶の學として擧ぐべ

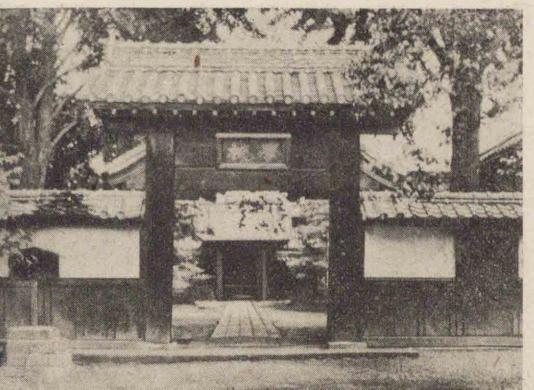
きは、五山僧侶の經學であるが、その學風は儒佛混淆の見解を脱し得ず、その著作また經書註釋の域を多く出なかつた。桂菴^{けいあん}が入明して宋學の新味を掬し、これを薩南に移植して近世儒學の礎をなせる如きは、寧ろ異例に屬する。

かくて、沈滯の色漸く濃き公家・僧侶の學問も、これが地方に傳へられるに及んで、敎學の新生面を開拓するに至つた。應仁の兵火を避けて地方に移つた公家・僧侶は、好學の諸武將に迎

本同施敷於世光輝
藝苑潤色詞林則所
謂征才之珠不失寶
於其形之小者也矣

印刷術の發達
(右) 五山版
三月 日本書紀述卷第一

學問の普及

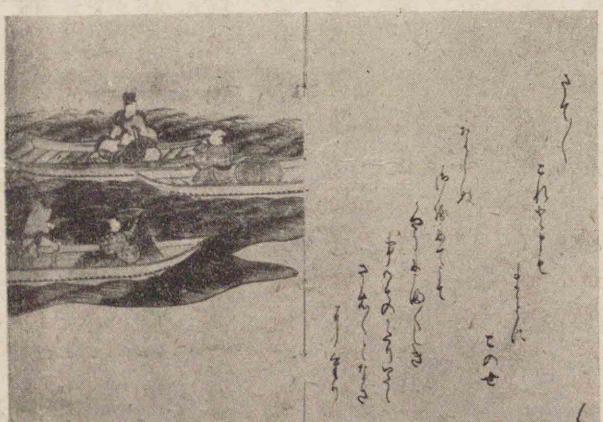


足利學校

へられて、地方の講學は漸く盛となり、更に五山版・堺版等開板事業の發達を見て、學問の地方普及は頗る活氣を呈した。永享の頃に再興された足利學校も、その後充實して、戰塵を外に學府の偉容を保ち、戰國時代に入つて北條氏康の保護を受け、負笈の徒一時は三千を數へたといふ。かくて、寺院を中心とする庶民教育の機關も漸く郷村に生まれ、寺子屋の起源をなすに至つた。

常ならぬ世の動きに、人心はとかく安定を缺き、公家に生氣なく武家に寧日なく、和歌物語等傳統の國文學は、自ら衰運をたどることとなつた。公家文學の粹を謳はれた和歌は、古今傳授の糟粕を嘗めるのみで、軍記物たる義經記會我物語も、卑俗に墮して文學的香氣に乏しく、室町末葉童蒙の讀物として作られた種々の御伽草子に、稚拙ながらも、物語文學の新生面が開かれたのみであつた。

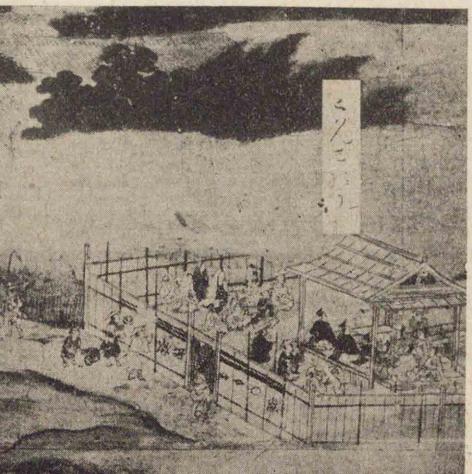
五山文學の名に高き禪僧の漢文學も、室町初頭に絶海・義堂等多數の詩僧を出し、一時隆盛を誇りはしたが、やがて五山の凋落と



(郎太島浦) 子草伽御

新文學の勃興
謡曲・狂言

ともに衰へた。



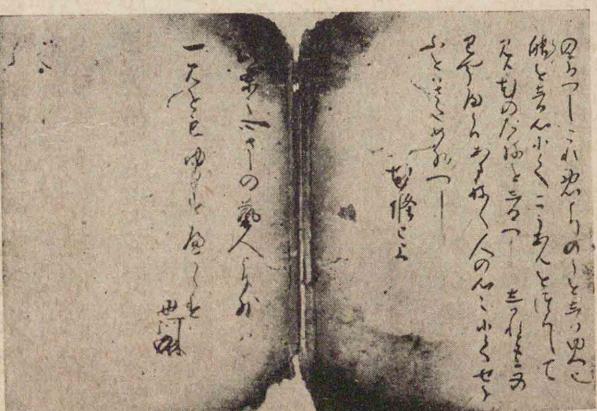
室町文學の面目は、謡曲・狂言・連歌等新文學の勃興に於て發揮された。歌舞を中心とする從來の卑俗な猿樂・田樂の類は、當代に入つて、觀阿彌・世阿彌等により能樂として大成され、以て近世演劇の源流をなしたが、謡曲・狂言は、ともに能樂に伴なつて發達せる劇文學であつた。

謡曲は、能樂の詞章として作られ、題材を和漢の傳説に取り、美辭麗句を點綴して絢爛の文を成し、しかも内容に幽寂玄妙の趣を藏せるもの、その多くは觀阿彌・世阿彌の作と傳へられる。また狂言は、能樂の間に演ずる所作

の脚本ともいふべく、士民の日常生活に取材し、輕易・滑稽の口語劇として構成された。

連歌は、即興・連作の詠法による和歌の新體であつて、その起源は古いが、吉野時代に二條良基が出て連歌の方式を定め、その撰べる歌集菟玖波集が勅撰に准ぜられるに及んで、和歌と對等の地位を占め、更に室町時代に入るや、和歌の沈滯に代つて新鮮味を謳はれ、隆盛を極めるに至つた。宗祇はその代表的作者であり、その撰べる新撰菟玖波集もまた勅撰に准ぜられた。しかるに、室町末葉に至つて、この連歌が沈滯の色を現すと、山崎

連歌



世阿彌の花傳書

東山時代と
藝術の風尚

宗鑑によつて革新が試みられ、こ
こに俳諧への路が分たれること
となつた。

の生活はその極に達した。しかもその數奇風流は、禪味を漲らせて、異彩ある東山時代の藝術を生んだ。即ち、その藝術は、閑寂瀟洒の風韻を藏して洗煉の極致を示し、東山文化の精粹をなしたのである。

茶の湯とその影響

鷗筆 謹記
浪花の休日でありて
よしゆくのうれい
珠光の命じて、茶の湯の方式を定めしめたことに始る。その後、茶の湯は、珠光の門流に武野紹鷗(せうろう)その他多くの茶人が現れるに及んで、次第に盛となり、これに伴なつて生花・聞香の技も洗練され、更に建築・繪畫・陶磁等も、その影響を受けるに至つた。かくて茶の湯は、時代の風尚を反映して生活文化の粹をなし、諸藝術發達の源泉となつたのである。

政が珠光に命じて、茶の湯の方式を定めしめたことに始る。その後、茶の湯は、珠光の門流に武野紹鷗その他多くの茶人が現れるに及んで、次第に盛となり、これに伴なつて生花聞香の技も洗練され、更に建築・繪畫・陶磁等も、その影響を受けるに至つた。かくて茶の湯は、時代の風尚を反映して生活文化の粹をなし、諸藝術發達の源泉となつたのである。

建築に於て、寺院建築は、前代の天竺・唐二様が融合して新和様を生じ、住宅建築は、寢殿造・武家造の混融に禪院建築が加味され、玄關書院・床間・違棚等を設けた書院造なる新様式が大成され、これに伴なつて、造庭の術また大いに進み、時代人

繪畫

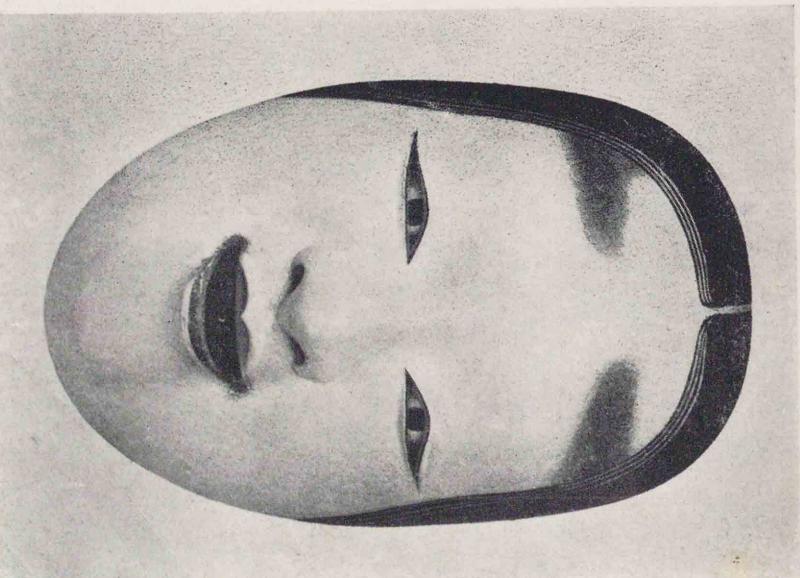
の庭園に對する趣味は極めて深く、禪刹邸第に附して、大小の庭園が盛に營まれた。銀閣の庭園、大徳寺・大仙院・龍安寺の石庭は、その代表的なものであり、閑寂瀟洒を好む時代の風尚を最もよく現している。また建築・造庭は茶の湯と結び、茶室・茶庭が營まれて、生活文化の典型を示した。



繪畫は鎌倉末葉以來、禪僧の愛好せる宋元の畫風、水墨の描法が行はれた。即ち明兆・如拙・周文を経て、東山時代に至り、雪舟が出るに及んで、山水・人物・花鳥等に取材して水墨の妙技を揮ひ、殊に山水畫に古今獨歩の畫才を示して、山水長卷を始め幾多不朽



(徳賢)面言并



(面手)面能

畫

繪



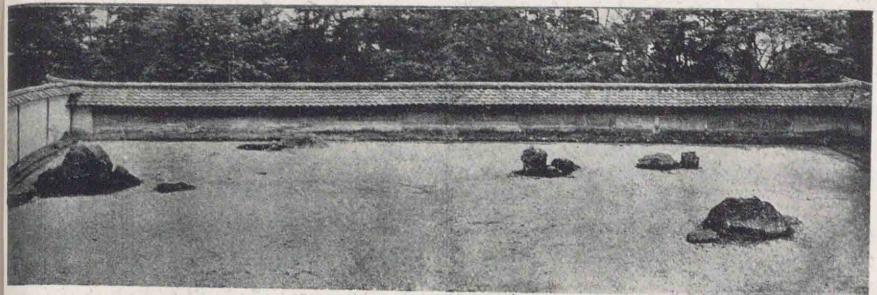
圖 (鯨) 鮎 瓢 筆 拙 如



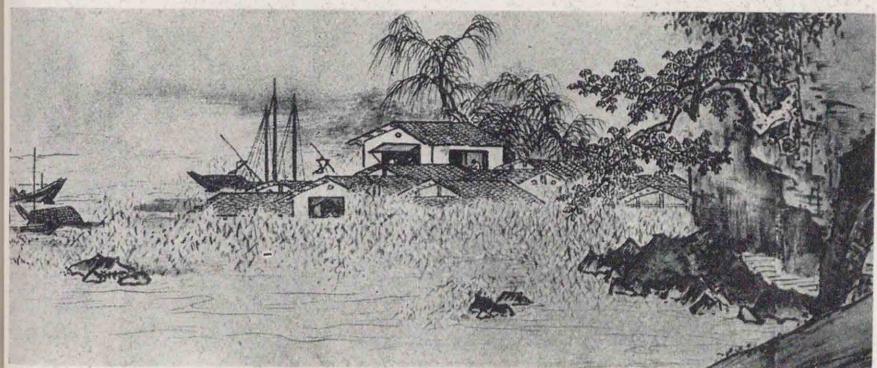
圖 鳥 花 筆 信 元 野 狩 傳



畫 繪 と 園 庭



庭 石 の 寺 安 龍



卷 長 水 山 筆 舟 雪

能衣裳

住吉 詩繪文臺

九三



〔唐織青海波帆船飛鳥文様〕



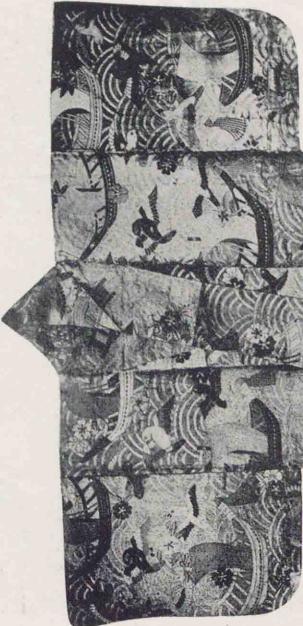
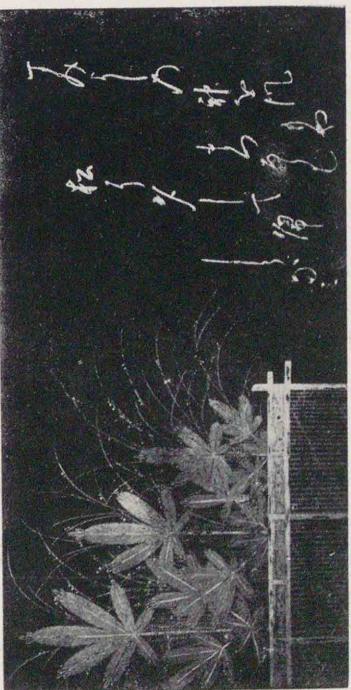
柄小作乘祐藤後



柄小作乘宗同



柄小作眞乘同



工藝

彫刻と工藝

の逸品を遺した。枯淡の墨色、閑寂の畫趣、ともに時代の風尚に投じて、その畫風は一世を風靡した。ついで土佐光信が出て倭繪を再興し、やがて狩野元信は、水墨畫と倭繪とを折衷して新風を開いた。かかる過程は、宋元の畫風の日本化を示すものとして注目に値する。

時代人心の支持を失つて、佛像彫刻に見るべきものなく、これに代つたものは、能樂の發達に伴なふ能面の製作であつた。當代に於ける能面の製作は、創意に富んで幾多の逸品を遺したが、その單調靜平の面相は、複雜躍動の表情を一瞬に凝固せしめたもの、典雅幽玄の美を湛へて、工藝的彫刻の極致をしのばしめる。また、東山時代を中心に、漆工・金工・陶工が輩出して、精妙な蒔繪・彫金、清楚な茶道具の數々が製作された。義政に近侍せる後藤祐乗の彫金、祥瑞五郎太夫の製陶は、その尤なるものである。

第十三章 戰國時代の國民生活

一 戰國の治亂

應仁亂後の
世相

下剋上一揆
の本質

（一）革新の氣運 應仁の亂後、兵火は飛んで地方の騒擾を導き、戦國百年、武力と權謀の支配する波瀾重疊の世相を開いた。當時地方では守護たり守護代たる武將が、任國を領有世襲して豪族と化し、近隣との攻防に狂奔して豺狼の争を反復した。傳統尊重の風は地を拂つて世の秩序また亂れ、武士は主従の恩義を缺き士民のけぢめも自ら薄れて、主家の押領足輕の跋扈、一揆の頻發等の諸事象錯綜し、世はまさに鼎沸のかたちとなつた。

（二）下剋上一揆の語は、かゝる世相を最もよく現してゐる。當時士民を通じて我執功利に毒せられ、その弊特に上層に甚だしく、

治安亂れて、庶民は生命信仰財産の不安に曝された。かくて國民下位の實力が發揮され、位相混亂の姿を呈して下剋上と呼ばれ、特に庶民は衆を恃んで自衛手段に出で、これが一揆と稱せられたのである。かかる新陳代謝の運動は、永年の積弊が生んだ相剋の現象であり、革新の氣運は自らその間に釀成されたとはいふものの、とかく輕佻詭激に奔つて、世相の混亂を激化するものが多かつた。即ち、武門の相剋は、新鋭の武士を生んで、やがてその手に海内の靜謐がもたらされ、庶民の團結性は、爭亂の鎮靜とともに自治組織の母胎となつたが、舊態破壊の姿あらはな群盲無益の騒擾年久しくために宸襟を惱まし奉つたことは、かへすがへすも恐懼の極みであつた。

畏くも皇室におかせられては、かかる轉變の世にも確乎不動の尊嚴を保たせられ、昏迷を正す昭々の光明を恵み給うた。か

幕威の失墜

くて戦國といふも、亂離は世態の波瀾に止り、皇國の基礎は微動
だにしなかつた。古來國民の習は
しである伊勢參宮か、この頃特に盛
となつたのも、その證である。

（三）幕府と關東 應仁の劫火に照らし出されて、幕府は愈々その無力を暴露したが、亂中義政について將軍に任せられた義尚は、文武の道を修め、治世の要道を一條兼良に諮り、守護の暴戾を制して賞罰の嚴正を保たうとするなど、大いに幕威の回復に努めた。しかし、幕府の頽勢はその因由遠く、義尚の一舉よくこれを挽

その後、代々の將軍は職を空しうして、實權は管領細川氏へついでその執事三好氏へ更にその家臣松永氏へと漸次下に移り、綱紀地に墜ちて、遂に將軍義輝が松永久秀に弑せられるなど、下剋上の典型を示した。しかも亂後、幕威の及ぶ範圍は概ね山城一國に止り、幕府はその實に於て、一守護も同然となつてゐた。

京都との絆の絶たれた關東は、さながら獨立の地帶をなし、武力・權謀を以て自己の興隆を圖る戰國の世相は、先づ關東に展開された。さきに關東の實權を握つた上杉氏は、或は持氏の遺子を立て、或は將軍義政の近親を迎へるなど、名望に借り術數を用ひて、自己の權力を伸ばさうとした。かかる過程に、古河・堀越・兩公方の對立、山内・扇谷・兩上杉氏の抗争が生まれ、八州の守護また動搖して、關東は早くも四分五裂の形勢となつた。しかも、對立抗争の諸氏がやがて實力を消耗した時、これに乗じて漁夫の利

七
年
九
月
廿
九
日

中部地方

を占めたのは、北條早雲（ほづるとうさううん）であつた。早雲は伊勢を發して東に進み、堀越公方の内訌に乘じて伊豆を侵し、更に要衝小田原城（おだはらじょう）を奪うて相模（さがみ）を從へ、その威武關東を震駭せしめた。その子氏綱（うきつな）孫氏康また父祖の遺業を繼いで隣國の攻略に努め、古河公方・兩上杉氏の和解團結の抵抗を排して江戸・河越兩城を略し、更に房總を從へ、やがて關東一圓を平定して、八州の制霸を遂げた。時に後奈良天皇の天文十五年、永享の亂（てんぶんじゅうごねん）を去る約百年のことであつた。

③諸地方の波瀾 氏康に逐はれた山内上杉氏が、主従の誼を頼みに越後の長尾景虎（ながお けいとら）に投するや、こゝに關東の紛糾は中部に波及して、諸雄の活動を旺盛ならしめるに至つた。即ち、上杉氏の讓を受けて上杉の姓を稱し、やがて謙信と號した景虎は、屢々兵を關東に出して北條氏を畏懼せしめた。その間、甲斐の武田晴信

（信玄）は、沈勇・智謀よく近隣を壓し、兵を信濃に進めて諸將を降した。しかも、信州の諸豪多く越後に走つて救を謙信に求めたので、こゝに謙信・信玄對峙の形勢が生まれ、雌雄を爭ふ川中島の合戦を展開したが、會戦再三に及んでなほ勝敗は決しなかつた。兩勢力の葛藤に恵まれて、南部に勢威を張つたの

| 紀元 | 御代 | 後土御門天皇 | 後柏原天皇 | 後奈良天皇 | 正親町天皇 | 天皇 |
|------|---------|--------|-------|-------|-------|----|
| 2130 | 義政 | | | | | |
| 2140 | 義尚 | | | | | |
| 2150 | 義隆 | | | | | |
| 2160 | （堀越公方家） | | | | | |
| 2170 | 氏康 | | | | | |
| 2180 | 氏政 | | | | | |
| 2190 | （伊達政宗） | | | | | |
| 2200 | （古河公方家） | | | | | |
| 2210 | （山内上杉家） | | | | | |
| 2220 | （房總） | | | | | |
| 2230 | （三好長慶） | | | | | |
| 2240 | （大内義興） | | | | | |
| 2250 | （武田信玄） | | | | | |
| 2260 | （尼子氏） | | | | | |

は、駿河の今川義元であり、遠江・三河を略して更に尾張に入つたが、織田信長の反撃に遭ひ、もろくも桶狭間の戦に敗死した。正親町天皇の永祿三年のことである。

中國地方

中國の舊族大内氏は、義興に至つて周防・長門等六箇國を領し、明と交易して富裕を致し、山口の城下は西都と呼ばれて殷賑を極め、兵亂を避けて寄寓する公家も多く、文運また大いに開けた。しかるに、その子義隆は富強を恃んで文弱に流れ、遂に陶晴賢に弑せられ、晴賢また毛利元就に滅されて、大内氏の舊領勢望は毛利氏の手中に歸した。眼を山陰に轉すれば、累代出雲の守護代たる尼子氏があり、經久晴久に至つて山陰の雄となり、富強よく大内氏と中國の霸を爭ふ程であつたが、やがて毛利氏に滅され、家臣山中鹿介の長期に亘る粉骨碎身主家再興の努力も遂に空しかつた。かくて毛利氏は、中國から九州・四國の一部にかけて

十餘國を領し、戰國有數の勢威を誇つた。

九州の大勢は、龍造寺氏(肥前)・大友氏(豊後)・島津氏(薩摩)の鼎立から島津氏の優勢へと推移し、細川氏の地盤たる四國では、長宗我部元親・土佐が全土席卷の勢威を示した。奥羽の地には、陸奥に伊達氏・南部氏・出羽に秋田氏・最上氏等が分立し、中でも伊達氏が最も優勢であつた。しかし、これら僻遠の諸地方は、中央との關係薄く、諸氏の盛衰興亡は、地方一局の波瀾に止つたのである。

(四) 諸雄の經綸 各地に蟠踞して自家の興隆に専念せる諸雄も、無益の争鬭に終始したのではなく、時代の推移、土地の事情によつて程度の差こそあれ建設の抱負をもつてゐた。即ち諸雄は、近隣との攻防に秘術を盡くすかたはら、家法を制定し、領民の生業を保護して、軍紀の振肅、産業の開發、部下の愛護、領民の安堵に努め、以て領國の富強を圖るとともに、武を練り文を修めて、士民

領内の施政

九州・四國・奥羽

全國平定の抱負

國民的自覺と勤皇精神

の師表たることを心掛けた。北條氏の民政や信玄家法・長宗我部元親百箇條等の家法に、經綸の跡を窺ふべく、謙信征旅の詩賦を始め、英雄の風格をしのばしめる風雅の行實は多い。

また諸雄の中には、上洛して聖旨を奉じ、全國の平定を圖らうとするものも少くなかった。しかも、かかる抱負の實現には、先づ地の利を要し、これに適へる中部・中國の諸雄も、輕舉妄動による地盤の喪失を恐れて、後顧の憂絶ち難きものがあつた。かくて、諸雄は多く或は時期を失し或は中道に倒れて、上洛の機はひとり織田信長の占める所となつた。

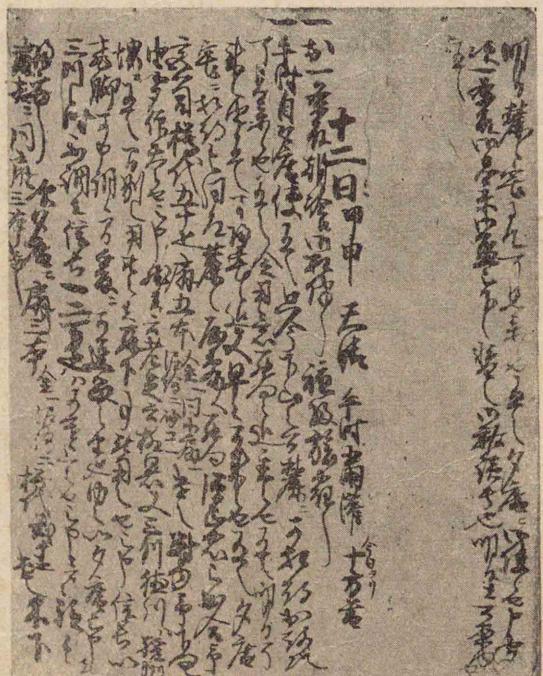
⑤ 皇室と國民 戰國の諸雄は、相互の葛藤に於てこそ弱肉強食の状を呈しはしたが、その全國平定の抱負は、天下を私する野心に發したものではなく、まさしく國民的覺醒に基づいたものであつた。しかもその自覺は、時代の推移とともに、皇室と國民と

を隔てる雲霧が拂はれ、諸雄が直ちに天日を仰ぐやうになつた事態に芽生えた。更に諸雄は、地方流寓の公家から大義を聽き、勤皇の精神に目覺めるに至つたのである。

皇室の尊嚴

衰運の一途をたどる幕府は、朝廷の御經費を辨じ奉る力なく、また皇室の御料や公家の所領は、心なき武將の不覺によつて次第に蝕まれた。かかる時弊が募つて、恐れ

多くも皇室は、御日常にさへ不自由を極めさせられ、また朝臣の



言 繼 卿 記

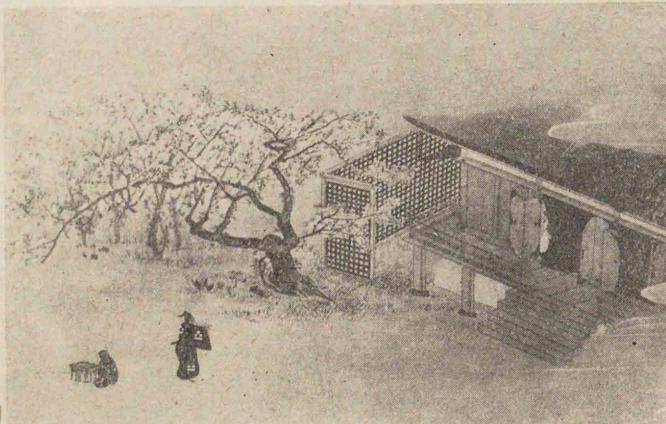
皇室の御仁慈

流散相ついで、大小の朝儀にも滞らせ給ふ御有様に拜せられた。しかも御代々々の天皇は、御所の荒廢、日々の御不自由もおいとひなく、混濁の世を清澄ならしめる根源とならせ給うた。

忝くも列聖は、戦亂にあへぐ民草に大御心を注がせ給ひ、國民は聖恩に感泣して勤皇の精神に目覺め、戦國亂離の世にも國體の精華が發揚されたのである。後花園天皇は、夙に民の疾苦を憐ませられて義政の奢逸を戒め給ひ、後土御門天皇は、幕府の僭越を戒めて官位禪師號の濫授を控制あらせられ、後柏原天皇は、募りゆく世の亂れを歎かせられて叡慮を萬民の憂苦に垂れ給ひ、後奈良天皇は、倒れ伏す民草多き饑饉・疫疾の災厄に宸襟を惱まし給うて親しく般若心經を書寫あらせられ、これを諸國の社寺に納めて災厄の除去を祈らしめ給うた。その般若心經の奥書に、「萬民多_{シム}於死亡、朕爲_{シテ}民父母、德不能_{ハコトダラム}覆甚自痛焉」と記し

給うた大御心を拜する時、國民たるもの、たゞ感涙にむせぶのみである。

國民の勤皇



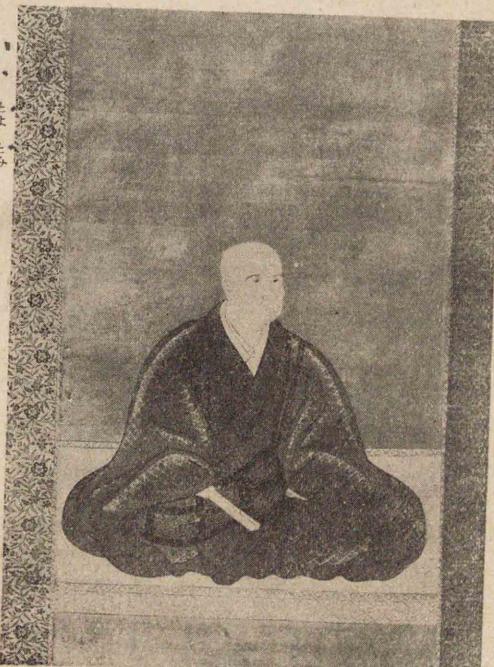
川端道喜の供獻

かくて、聖恩の高きを仰ぎ國體に目覺めた國民に、勤皇の至誠を表す者が相ついで現れた。近江の六角高頼、周防の大内義隆、相模の北條氏綱、越前の朝倉孝景、越後の長尾景虎、安藝の毛利元就、尾張の織田信長、攝津の石山本願寺等、或は大禮・大葬の御費、禁裡修理の御料、或は神宮造營の御費用を獻納し、また京都の川端道喜は、時折の供御を進め奉り、伊勢慶光院の清順尼は、諸國に勸化して外宮

尊皇敬神と
海内の平定

を營み奉つた。この間、三條西實隆・山科言繼等が、貧苦・老羸の身を顧みず、諸雄の間を奔走して勤皇の鼓吹に努めたやうに、逆境不遇の公家で、奉公の誠を致した者も少くなかつた。

かくて昂揚せる尊皇敬神の精神は、國民生活革新の樞軸となつて、國家活動を旺盛ならしめ、勤皇の至誠特に厚き織田・豊臣兩氏により、聖旨を奉じて海内の事業が進められるのである。



三條西實隆像

後花園天皇御製の詩

殘民爭採首陽薇 處々閉爐鎖竹扉

詩興吟酸春二月

滿城紅綠爲誰肥

後土御門天皇御製

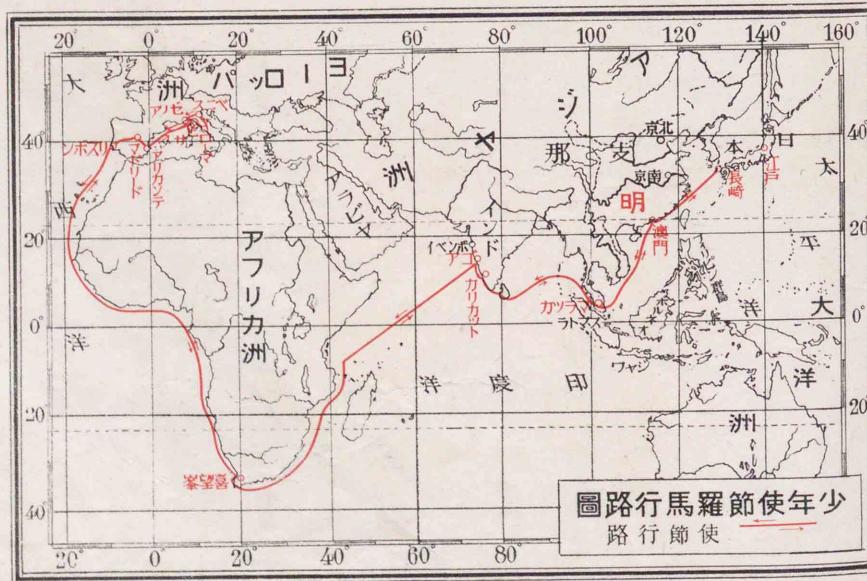
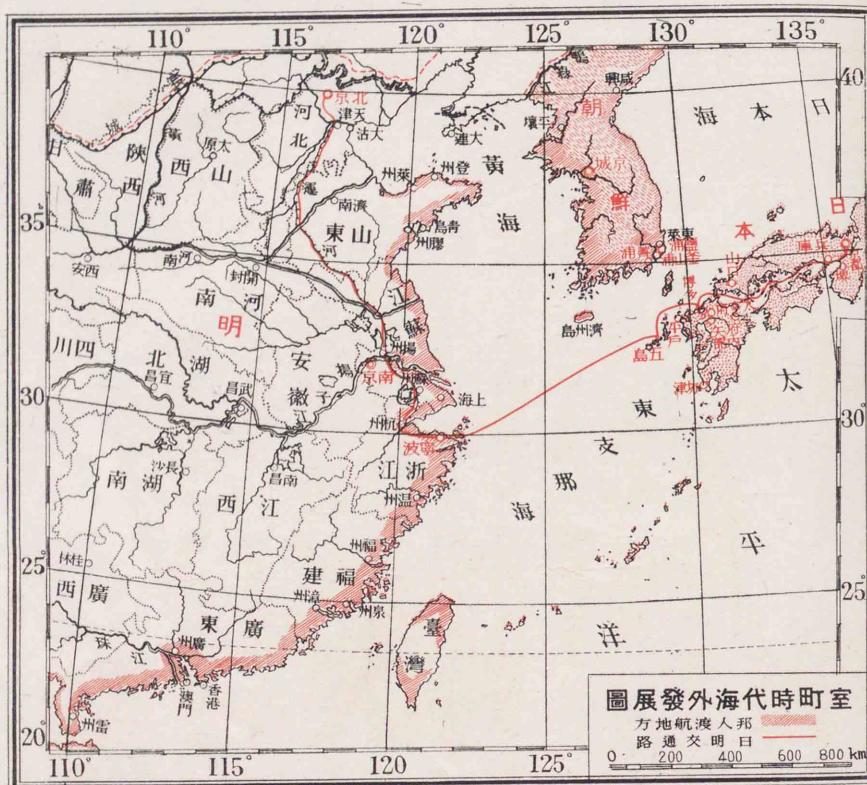
愚かなる身は忘れても大方の

世の憂きをさへまた歎くかな

後柏原天皇御製

治めしるわが世いかにと浪風の

八十島かけてゆく心かな



師範國史 中卷

一四四

對外關係と
國家活動

海外進出の 開始

二 海外發展與經濟活動

一 國民の海外發展 我が國民は、滄浪打寄する磯城島の日本しま
國に生まれて海外發展の精神に富み、古來幾度か起つた對外關係やまと
によつて、國家活動を旺盛ならしめる所があつた。戰國の治
亂の中に釀成された國民生活革新の氣運もまた、國民の海外發
展、西洋人の渡來等の對外事象と密接な關聯をもつてゐる。

亂の中に釀成された國民生活革新の氣運もまた、國民の海外發展、西洋人の渡來等の對外事象と密接な關聯をもつてゐる。戰國時代に於ける國民の海外發展は、鎌倉末葉に始つて長き沿革をもつ八幡船徒はふわんせんとの大陸進出を以て、その代表的なものとする。古來海事に慣れ且つ元寇の衝動を最も強く受けた西海の士民は、これに反撥して、輕舟を操り八幡大菩薩はちまんだいぼさつの旗を閃かせ、自由漫刺まんしたる私貿易を大陸の沿岸に展開した。しかも、商道通ぜざれば寇となり通ずれば商に復る不羈奔放な行動は、衰亡に瀕

した元・高麗に對する脅威となり、高麗の如きは、そのために命脈を縮めたとさへいはれる。吉野時代に元が亡びて明が起り、室町初頭朝鮮國が高麗に代つた後も、八幡船の猛威は衰へず、草創の兩國は對策に悩んで、明の太祖の如きは、征西大將軍懷良親王の許にその取締を求めた程であつた。

室町幕府が開かれて對明貿易が始るに及び義満は明の要求を容れて私貿易を取締つたため、八幡船の勢威は一時衰へたが、幕府の統制力が弛緩するにつれて漸次威力を回復し、やがて應仁の亂後、その活躍は支那の全沿岸地帶を壓し、更に遠く南洋方面に及んだ。當時、明の國情は安定を缺いて流寇しきりに起り、八幡船徒の中にはこれに加る者も出で、彼我の流寇錯綜して、侵害は遙か内陸に達した。明では倭寇と稱してこれが鎮壓に努めたが、容易に功を奏せず、應仁の亂後約九十年を経て寇害が終

熄した頃、明の勢威は既に傾いてゐた。かくて、初め元寇の反撥として出發し、やがて時代の革新的氣運に投じて漸次活潑となつた國民の海外發展は、海内の平定による新秩序の樹立とともに、新なる様相を展開するに至つた。

③ 通交貿易の顛末 かかる私貿易とは別に、幕府守護の對明貿易があつた。初め足利尊氏は、天龍寺創建の費を補はうとして元に貿易船を遣はし、これが例となつて毎年貿易船が派遣せらることとなり、天龍寺船と稱せられた。やがて、義満が明との通交貿易を開始するや、久しう杜絶してゐた官貿易が再開されるに至つた。しかも、義満が交易の利に奔つて國の體面を損じたことは、大義に暗き室町幕府の性格を反映するものであるが、當時既に心ある人士の糾弾する所となり、次代義持またこれを非として對明通交を停止した。しかるに、その後義教に至つて

修交は復活され、更に義政に及んで、財政の窮迫は通交を頻繁ならしめ、通交の體裁もまた舊に復した。

幕府が衰へるにつれ、通商の實權はまた地方勢力たる守護の手に移つた。特に周防の大内氏は、日明航路の要衝を扼し、夙に幕府から通商事務の一部を依託されてゐたが、幕威の失墜とともに、細川氏との角逐を経て、遂に對明貿易を獨占した。かくて、大内氏は大いに富強を増したが、やがてその衰亡により、對明貿易もまた衰へるに至つた。

幕府の對明貿易は、その遣明船が官船たる證として明から交付された勘合符を使用したので、勘合貿易とも稱せられる。幕府は、五山の僧侶をして通交の衝に當らしめるとともに、交易はこれを商人に經營せしめ、我が鑛產・刀劍・調度の類と、彼の銅錢・生絲・絹織物・藥品・書畫・骨董の類とを交換して、巨利を博した。派遣

の船も時に十艘の多きに及び、堺、兵庫、博多等の諸港が殷盛を極めた。

また高麗との修好は、元寇によつて一時とだえたが、やがて回復され、義満の頃になると、我が商船の往來も漸く繁くなつた。元中九年、李成桂が高麗の疲弊に乘じて朝鮮國を建てるや、その後屢々使節を來朝せしめて修好を求めるが、我が需に應じて佛經・典籍等を送り來り、日鮮の關係は日毎に親密を深めた。宗氏が通交貿易の衝に當り、嘉吉年間には、貿易船・開港場・勘合符に關して條約を結び、諸國の守護また宗氏を介して通商を試みた。

かくて我が國は、室町時代を通じて、明及び朝鮮と友好關係をつづけたが、通交に於ける幕府の態度は、とかく實利に奔り卑屈に墮して、激刺たる國民の海外發展に對しては、適宜な措置を講じ得なかつた。

朝鮮との通商

通交措置の缺陷

西洋人の渡來と國家活動 東西交通の消長

③ 西洋人の渡來　西洋人の渡來は、戰國時代の後半に始る。ここに我が國民は、始めて西洋人に接し、そのもたらせる文物・宗教に觸れて、好奇の心を高め世界に對する視野を擴めたが、一面これによつて國民意識が喚起され、海内統一の氣運が促進された。さきに、元が亞・歐に跨る大帝國を建設したことによつて、東洋と西洋との交通は頓に活氣を呈した。この頃、元に來つて世祖に仕へたイタリヤ人マルコ・ポーロは、歸國の後、東方の見聞錄を著し、ジパングの名を以て、始めて我が國を歐洲に紹介し、その金銀・珠玉に富めるこことを誇張して、西洋人の欲望をそゝつた。しかし、室町時代に回教國たるトルコが興隆して小アジヤと東歐の一部とを領し、東西交通の要衝たるコンスタンチノープルを占めるに及んで、東西交通も遮斷されるに至つた。しかも、東洋の物貨獲得の欲望を愈々募らせた西洋人は、新航路の發見、航海

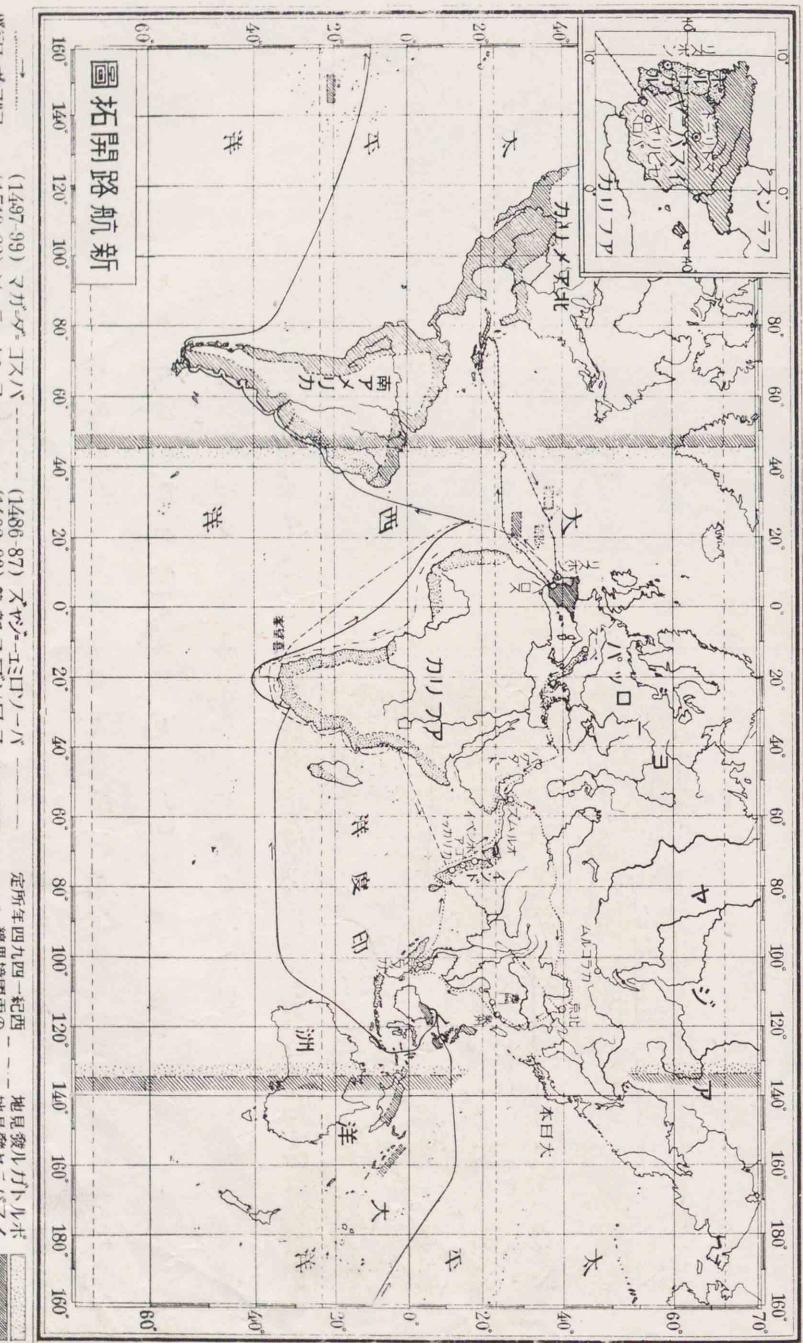
技術の改良に努めて東洋進出を試みた。遂に十五世紀の末葉に至り、イタリヤ人コロンブスが、航路開拓の途偶々アメリカ大陸を発見し、稍遅れてポルトガル人バスコダガマが、アフリカの南端を究めて印度に到着するに及び、これに勢づいた西洋人の東洋來航は、次第に盛となつた。

葡西兩國の
東洋貿易

印度に着いたポルトガル人は、やがてゴアを占め、更に支那の媽港(澳門)に移つて貿易に従事し、東洋の物資を西歐諸國に賣捌いて巨利を博した。コロンブスを助けて東洋進出を圖つたイスパニヤは、その後アメリカの經營に當つたが、やがて

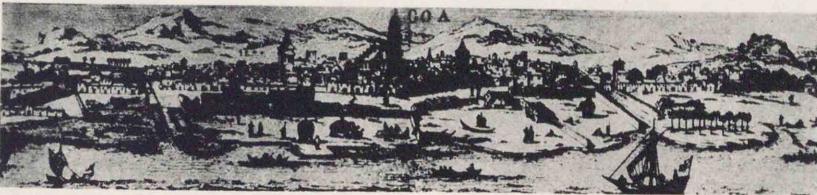
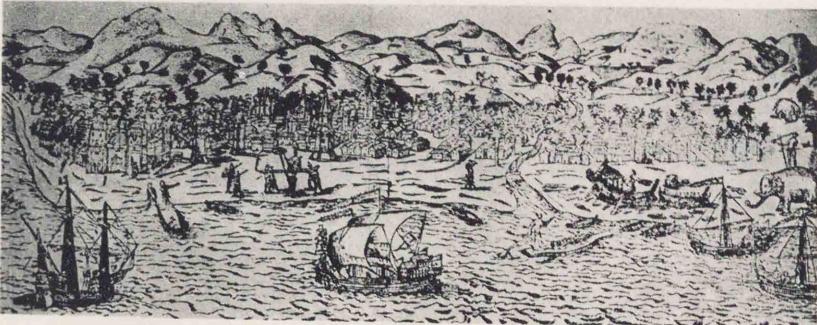


南蠻俗風

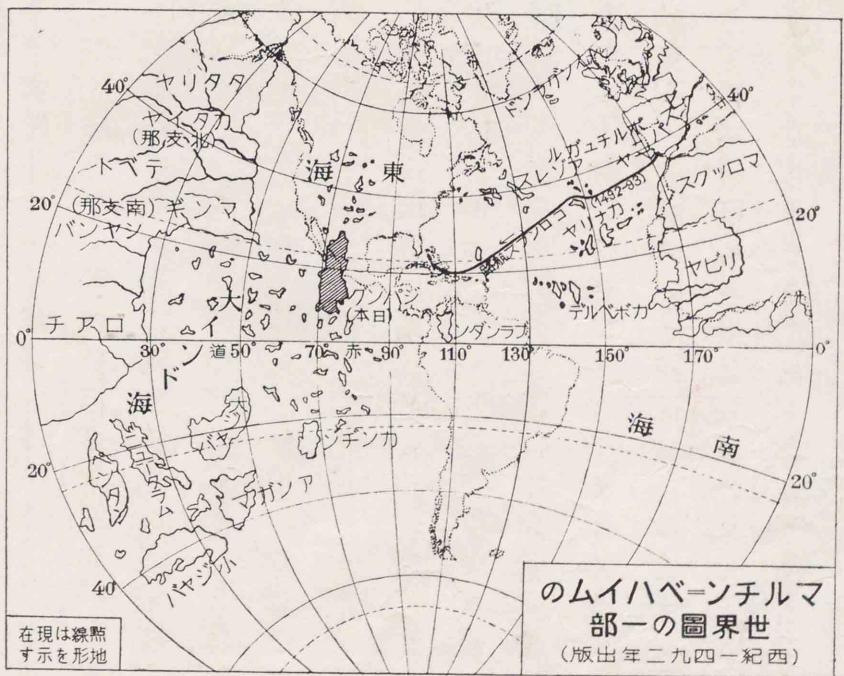


新航路拓開圖
(1497-99) マガベス
(1501-02) ベルモ
(1519-22) ヴラセマ
(1486-87) アゼンシオ
(1492-93) 航初スパンコロ

西力東漸



アゴ〔下〕 トツカリカ〔上〕

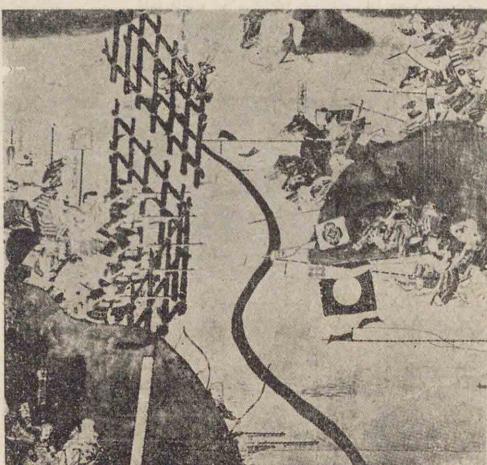


マゼランが南アメリカを廻航して太平洋に出で、フィリピン群島に到着して後は、絶えず南洋諸島に来て貿易に従事した。かくこれら兩國は、軍艦・商船を列ねて我が戦國時代の東洋を蝕み、豊富を誇る東亞の資源は、空しくその手に委ねられた。東洋諸國で、ひとり目覺めたのは我が國であつたが、八幡船の勇猛果敢な南方進出も、これと競ふには背後の力を缺いてゐた。

この間、偶々ポルトガルの商船が、颶風に遭うて大隅の種子島に漂着し、島主種子島時堯に鐵砲を傳へた。これ、西洋人が我が國土に足跡を印した最初であり、紀元二千二百三年、後奈良天皇の天文十二年のことである。これを端緒に、ポルトガルの商船は、鹿児島府内(大分等)に來航して貿易を始め、やがてイスパニヤの商船が來るに及んで、ともに平戸に據り、更に長崎に移つて、我が商人と盛に交易を營んだ。當時我が國民は、その商人・商船を南

蠻人・南蠻船と稱し、舶載物貨の珍奇をめでた。西洋人の東洋進出の經緯を辨へず、これを南蠻人と呼んだ素朴な分別には、なほ對外的視野の狹小がしのばれもするが、異国人に接して激刺たる氣宇を伸張したことは、また看過することが出來ない。

火器の利用



(戰合篠長) 相様新陣の戦

國民は、南蠻渡來の物貨を容れて、異國趣味の耽溺に終始したのではなかつた。初見の鐵砲に驚異の眼を瞠つた國民も、直ちに製法を學びとつてその製作に努め、火器の利用は、戰國の風雲に乘じて、忽ち近畿・關東まで弘まつたのである。しかも、これを活用した諸武將は、兵備・戰術を改革して、戰陣の面目を

一新した。即ち、鐵砲隊の配備は、舊來の一騎打を集團戰闘に變ぜしめ、火器の威力は、城砦を規模宏壯・要害堅固な城郭に改めた。かゝる軍備の改良は、進取の精神と眞摯な工夫とによつてもたらされたのである。

(四) 天主教の傳來 爭亂の巷に新しき秩序を建設しようとする革新の裡には、自ら時代人心の苦惱がひそんでゐた。有爲轉變の世の習はしに、人心はとかく安定を缺き、戰へば猛き殺伐の徒も、靜思すればからむ良心の葛藤に悩んだ。かゝる人心の動搖に對し、當時の佛教は概ね時流に投じて、魂の救濟には無力であつた。鐵砲の到來に稍後れて傳來した天主教が忽ち全國各地に傳播したのは、かゝる事情にもよるのである。

後柏原天皇の永正の頃ほひ、ドイツ人マルチン・ルーテルは、キリスト教の俗化を正すべく、宗教改革の烽火を揚げ、改革運動は、

やがて新教の樹立となつて歐洲全土に伸展した。これに對して、イスパニヤ人イグナチウス・ロヨラは、舊教更生の耶蘇會を結成し、東亞の新天地に傳道を試みるに至つた。かくて、同志フランシス・ザビエルは印度に來り、マラッカに移つて布教に努めたが、偶々こゝに來住せる我が一青年を識つた。これが機縁となつて、我が國への布教を志し、天文十八年鹿兒島に來着した。ザビエルは、滯在兩三年の間に、平戸・山口・京都・堺・府内等を巡歴して傳道に努め、



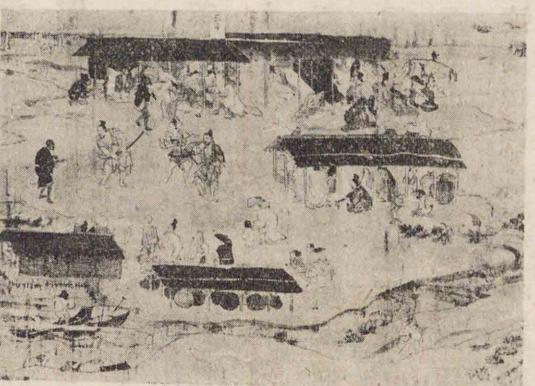
西國諸雄の歸依によつて、その領内に數多の信者を得た。その後宣教師は陸續來朝し、佛教徒の度重なる排斥にも屈せず、巧みに人心を收めて傳道に努めたので、キリスト教は、西國から漸次近畿諸國へと弘まつた。當時、この教は天主教或は切支丹宗と稱せられた。

外來宗教と 國民生活

都市・經濟發 展の事情

我が國民が天主教に心牽かれてこれを迎へたことは、まさに革新期に於ける國民生活の動向を反映するものであつた。しかも、この際國民は、傳道の陰にひそむ政治的意圖を看過したため、對外關係の禍根が、將來に殘されることとなつたのである。

⑤ **都市・經濟の發展** 戰國時代に於ける國民生活の新生面は、また都市・商工業の發展に於て見られる。古來我が都市・產業の發達は、時代による弛張緩急があり、これを通觀すれば、概ね遲々たるを免れなかつた。しかるに、室町時代特に戰國時代に入ると、

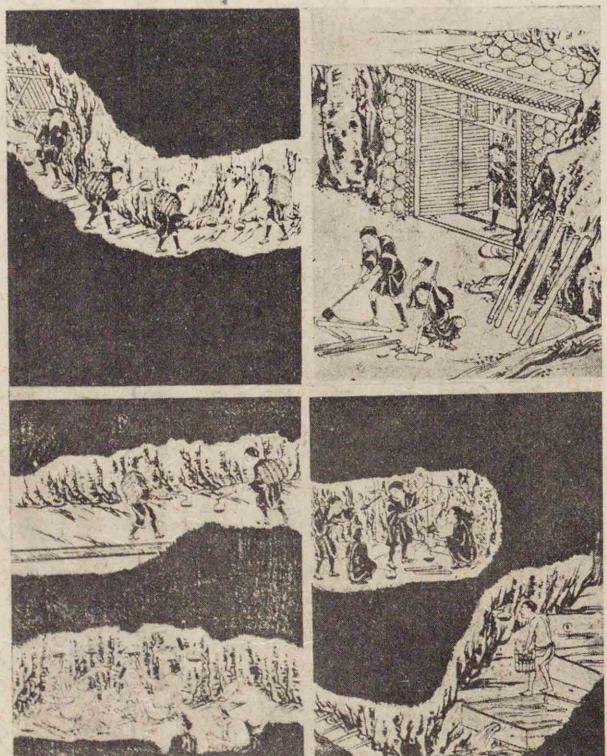


(代時) 鎌倉市風景

内治外交の新事態によつて、國家活動の經濟的方面は頓に活氣を帶び、自ら都市・商工業の發展が、大いに促進されるに至つた。即ち、從來の經濟生活は、莊園を中心とする地方區々の域を出ず、都市また政治都市たるに止り、商工業の發達も自ら不活潑であつた。しかるに、莊園制が崩壊して、守護の領國制が成立するに及び、諸雄は競うて領國の富強を圖つたので、經濟的機能は大いに擴充され、都市・商工業の發展も著しくなつたのである。加ふるに、官民の提携による貿易の活況は、都市の勃興、商工業の發展を促し、殊に對明貿易による貨幣の輸入は、商業の發達に資する

所大なるものがあつた。

古來、工業は皇室の御獎勵を辱うし、やがて官府・社寺等の保護を受けて、漸次隆盛に赴いたが、戰國の頃になると、諸雄が各優秀な工匠を擢用・庇護して工産の擴充に努めたので、工業は著しい發達を遂げた。



佐渡鎌採圖

中でも、鑛産業は、諸雄の富強策の中核をなし、採掘・精鍊の技は大

座商

いに進み、上杉氏の佐渡銀山、武田氏の甲斐金山、大内・尼子兩氏の争奪の的となつた石見銀山の開掘を見た。

商業もまた古來徐々に發達し、律令にも市塵の制が定められて漸次活潑となつたが、平安時代に官府・社寺・權門と市の結託が生じたことが源流となり、鎌倉時代に入つて座の發生を見た。座は、座衆と稱せられる商人仲間が、朝廷・官府・社寺等の庇護の下に營業權を獨占せる組織體であり、紙座・鹽座・油座・材木座などと同業の組合をなし、木工座・鑄物師座の如き工匠の座も存した。しかるに座商も、室町初期を過ぎると、加入人員の制限、利權の世襲によつて漸く封鎖的なものとなり、激刺たる商業の發展を妨げるに至つた。

商業の發展に伴なひ、市場・市町が開け、店舗また整備し、京都室町の米場、淀の魚市の如き特殊商品の大市場も現れた。かくて

爲替金融

市と小賣を繋ぐ仲買衆、商品の運送に當る問丸・馬借、金融機關たる土倉等が出現し、貨幣送達の不便を除く爲替の流通さへ見るに至つた。

室町時代に於て、商工業の發展を促したもののは對外貿易であった。即ち、貿易による多大の利潤は商人の投資

營利の觀念を助長し、貨幣の輸入は取引を圓滑ならしめ、更に、貿易資金の融通によつて土倉の勢力が増し、商業界に活氣が充滿した。かくて、商業の發展に與り來つた座の體制も、この激刺たる經濟活動の影響を受けて、破綻することとなつた。

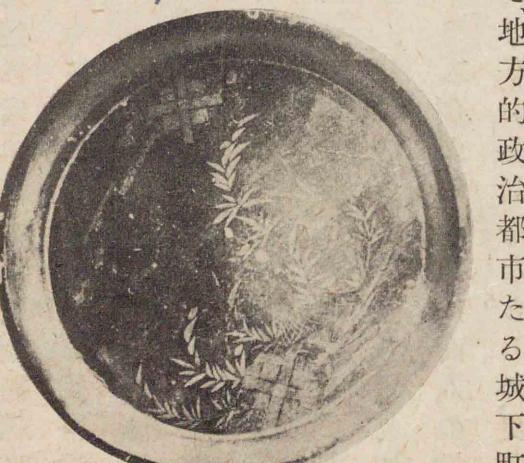
商工業を發展せしめた事態は、また都市の發達をもたらし、兩

者相關聯して國民生活の新様相を展開した。古來都市は奈良、京都・鎌倉の如く、時代の政廳を中心として發達したものであり、その數も兩三を出なかつたが、室町時代特に戰國の頃から、政治・經濟その他的情勢に基づき、多くの新都市が勃興した。

新興都市

先づ諸雄の居城を中心として、地方的政治都市たる城下町が形成され、山口・大内氏・小田原(北條氏)・江戸(太田氏・府中(今川氏)・濱松・岡崎(徳川氏)・安土(織田氏)等大

小の新興都市が出現した。特に山口は大内氏の富強と文化とを反映し、小田原は北條氏三代の隆運を現して、ともに繁盛を極め、東西にその霸を争つた。



(盆内大) 藝工の山口

次に貿易の根據地、物貨の集散地として、内外交通の要衝に港町が形成され、博多・兵庫・堺・大津・尾道・小濱等大小新古の商業都市が發達し、堺の如きは、商人の勢威を示す新興都市として、あたかも自由都市の觀を呈した。更に社寺を中心として、いはゆる門前町の出現があり、神宮を中心に山田、石山本願寺の門前に大阪の如き都市が生まれ、永く衰頽してゐた奈良も、東大寺・興福寺を中核として復興するに至つた。

かくて發達せるこれらの都市は、擾亂の世に安定をもたらす地盤となり、また文化の新様相を展開する舞臺となつて、治亂の推移目まぐるしき戰國時代の建設的な一面を窺はしめるのである。

都市發達の歴史的意義

第十四章 安土桃山時代の精神

一 海内の統一

海内統一の
氣運



田 織
かゝる時、叡慮を奉じて
長 海内平定の歩みを進め、
像 地の利と卓抜な才智と
を以て、その抱負を半ば
實現したのは織田信長

であつた。

信長は、桶狭間の戦に今川義元の西進を阻み、ついで徳川家康と結んで後顧の憂を絶ち、専ら西上を圖つて先づ美濃の斎藤氏を滅し、居城を收めて清洲から岐阜に移つた。時に正親町天皇は、遙かに信長の威名を聞き召し、立入宗繼を下して御料所の回復を命じ給うた。信長は勅命を拜して感激措く能はず、速に任をはたして宸襟を安んじ奉らうと時機を窺つた。偶々將軍義輝が松永氏に弑され、弟義昭が信長に來り投じて救援を求めたので、信長はこれを機とし、義昭を擁して京都に上つた。

信長は、先づ義昭に對する將軍職の宣下を奏請し、ついで皇居を修理し奉るとともに、近畿の諸雄、延暦寺・本願寺等の寺院勢力を制壓して威望を高めた。この間義昭は、不安焦燥に驅られて信長の行動に猜疑を抱き、遂にこれを除かうとするに及び、却つ

室町幕府の
終焉

諸雄上洛の
頓挫

て信長のために京都を逐はれ、室町幕府はこゝに亡びた。時に紀元二千二百三十三年、正親町天皇の天正元年であつた。

この間、中央に志ある東西の諸雄は、近畿の諸國が信長の威風に靡かうとする形勢に焦慮して、しきりに上洛を畫策したが、幕府終焉の前後數年の間に、多く病歿して宿志を伸べるに至らなかつた。**毛利元就**は、石山本願寺と氣脈を通じて信長の率制に努めたが、上洛の機熟せずして逝き。**武田信玄**は、近隣の制壓に功を奏して軍を東海道に進め、**家康**を三方原に破つて、**三河**に侵入したが、宿痾の再發によつて歸國の途に歿した。かくて、後顧の憂なく軍を北陸に進めた**上杉謙信**は、越中能登を略し、越路の雪の解ける日を待つて西上を企てたが、前途を前に急逝した。

③ **信長の経略** 上洛以来、岐阜との間を往來して近畿の経略に努めた信長は、事業の進捗を見計らつて、**安土**に築城を始め、天正

安土の築城

七年、竣工とともにこゝに移つた。この地は京都に近く、琵琶湖を控へて自然の要害に恵まれ、しかも東海・東山・北陸の要衝に當つてゐた。城は丘陵を利用して漫々たる湖水に臨み、七重の天守閣中空に聳えて、遠浦の歸帆、漁村の夕照を一望に收め、殿内の裝飾また善美を盡くして、絢爛衆目を驚かすに足り、守るに固く住むに好く、城郭史上劃期的なものであつた。城下には、**士郷**・**商家**それゝ軒を列ねて、澣澣清新の氣は街衢にみちゝいた。かくて、安土の城市は日に月に殷賑を加へたが、信長はこゝに安居の暇もなく、海内



安土城天守閣

武田氏の滅亡
本居宣長

平定の業を進めた。

信玄亡き後の武田氏は、嗣子勝頼が積威を恃んで屢々家康と戦つたが、天正三年、長篠の戦に信長・家康の聯合軍に大敗し、その後勢威は年を逐うて衰へた。かくて天正十年、信長は家康・北條氏政とともに甲斐を包囲し、天目山の戦に武田氏を滅亡せしめた。

長篠の戦に於ける鳥居勝商の義烈、天目山の戦に於ける勝頼夫妻の壯烈な最期は、興亡常なく人事また測り難き戦國の武人の鑑たるべき行爲として、譽を後世に傳へてゐる。

元就歿後の毛利氏は、やがて孫輝元が家督を嗣ぐに及んで、吉川元春・小早川隆景等一族の諸將これを輔け、兵威は更に盛となつた。かくて毛利氏は石山本願寺、武田・上杉兩氏と氣脈を通じて、信長の率制を圖つた。當時東方の經略に當れる信長は、部將羽柴秀吉に中國の經略を命じ、安土に凱旋するや、備中高松城の

中國の經略

本能寺の變

攻略に悩める秀吉の求援に應じて、西征を決した。よつて信長は、明智光秀等を先發せしめ、入洛して本能寺に宿つた。

しかるに、信長の峻嚴にかねて怨を抱ける光秀は、俄に反旗を翻して本能寺を襲ひ、黎明の混亂に乗じて信長を弑し、その子信忠を二條城に攻め殺した。天性豪放智略衆を抜き、よく人材を用ひて新時代の建設に邁進し來つた一世の英雄信長は、こゝに圖らずも兎手に斃れて、海内統一の偉業は半途にして挫折した。時に天正十年の半ば、世にこれを本能寺の變といふ。

③秀吉の創業　信長凶變に斃れて後、遺業を繼承して遂に海内統一の偉業を成就し、更に宇内の形勢を洞察して餘力よく國威を海外に宣揚したのは豊臣秀吉であつた。秀吉は、微賤の家に身を起して夙に大志を抱き、信長に仕へて明敏・機智・誠實、次第に重用されてその部將に列し、屢々戰功を立てて信長の信賴を深め、

秀吉の擡頭

秀吉の獨立



かくて中國經略の大任を委ねられたのである。

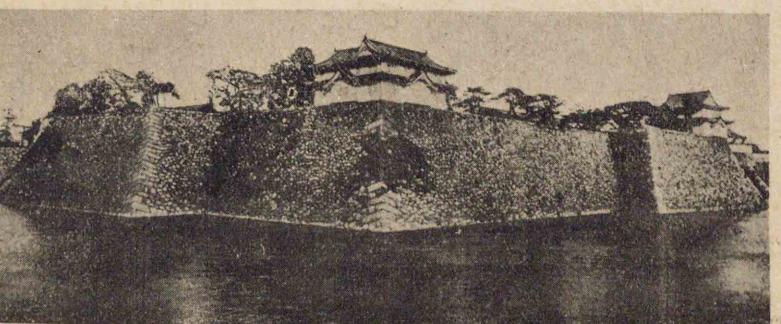
秀吉に本能寺の豊臣秀吉變報が到着したのは、水攻が功を奏して高松城の堅壘も

陥落に瀕し、あたかも和議折衝の折柄であつた。秀吉は、固く凶變を秘し、機敏に和議を結んで自己の主張を貫徹するとともに、直ちに軍を返し、神速果敢、山崎の合戦に一舉よく光秀を誅した。更に秀吉は、織田氏の宿將と清洲に會して信長の後嗣を定め、ついで主家の法會を營むなど、誠實以て主恩に報いたので、その勢望は頓に諸將を凌ぐに至つた。よつて柴田勝家、瀧川一益等は、

織田信孝を擁して秀吉に抗したが、却つて近江の勝瀬に敗れ、勝家は退いて越前北庄に敗死し、一益は降り信孝は自刃した。かくて秀吉は越前を收め、前田利家を加賀に封じて北陸の鎮となし、信長の遺業繼承の地歩を固めた。

信孝の兄信雄はこの形勢を憂へ、家康と結んで秀吉を除かうと企て、秀吉が來り攻めるや、家康は四國・紀伊・越中の諸勢力と通じて、秀吉の後を窺はしめた。かくて秀吉は、その行動を妨げられ、しかも先鋒が長久手に敗れるに及び、曠日彌久の不利を覺つて、和を講ずることとなつた。軍を返した秀吉は、紀伊の一揆を鎮め、ついで軍を四國に派して長宗我部元親を伐たしめ、更に越中の佐々成政を降した。こゝに秀吉・家康懸案の和議も成り、程なく秀吉は、妹を家康に嫁して盟約を固うし、ついで上杉景勝と會盟して北國を定め、秀吉の海内統一の業は略成つた。統一事業の進展

大阪城聚樂
第の築造



業の進展に伴なひ、朝廷では秀吉の業績を嘉賞あらせられ、さきに正親町天皇は秀吉に關白を宣下あらせられたが、更に後陽成天皇は太政大臣に任じ給ひ、豊臣の姓を賜うた。

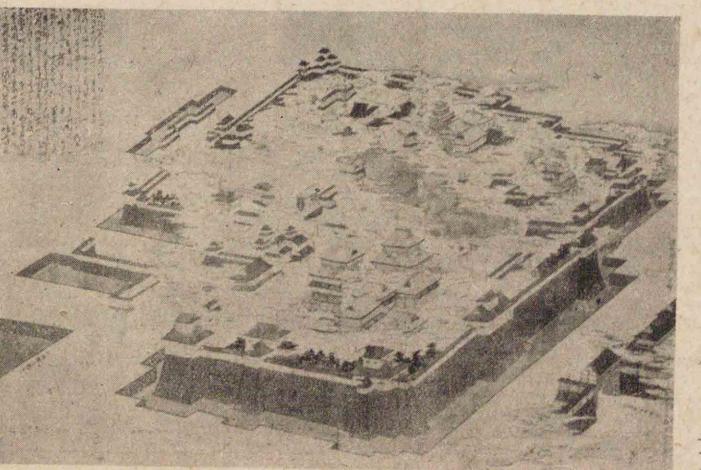
さきに秀吉は、海内統一の根據として、阪地を大阪石山本願寺の跡に選び、諸國に令して大石巨材を運ばしめ、大規模な城郭の築造に著手したが、工事は統一事業とともに進み、天正十三年、要害の堅固、殿宇の雄麗を併せ誇る金城湯池の偉容が略々完成した。諸將また居をその周邊に構へ、商人も多く來り住んで廣大な城下

町を形成し、秀吉の勢望と交通の至便とが相俟つて、街衢はやがて殷賑を極めるに至つた。また秀吉は、地を京都の内野うちのにトして新邸を營み、工事は著々進捗して、やがてその竣工を見るに至り、殿樓は秀吉の氣宇を反映して壯麗を極め、聚樂よゆう第と稱せられた。かかる築城造邸の業は、また秀吉の壯圖、統一事業の進展をしのばしめるよきよすがである。

四 海内統一の完成 かくて、海内概ね秀吉の威武に服したが、なほ命に従はぬ者に、九州の島津氏、關東の北條氏があつた。當時、島津氏は、富強を持んで近隣を侵し、秀吉の送つた朝覲の招諭をさへ拒んだので、秀吉は、奏請してこれを伐つこととなつた。胸中既に勝算のある秀吉は、天正十五年、征旅の粧よそひも美々しく、途に探勝の餘裕を示して九州に入り、軍容堂々忽ちにして島津氏を降し、舊領を安堵して恩威並び行ふ雅量を示した。

九州の平定

九州の平定成つて、秀吉は京都の北野に大茶湯を催し、士庶の別なく参加を許して歡を盡くさしめ、更に翌年、聚樂第に後陽成天皇の行幸を仰いで、皇室に御料を奉獻し、公家に知行を頒ち、また諸大名をして皇室に忠誠を誓はしめた。この時秀吉は、文武百官を率みて鹵簿に扈從し、盛儀を拜さうとして遠近から集る民草は巷に満ち溢れ、圖らざる昌平の象を今や目のあたりに、老いたるは昏迷の既往を顧み、若きは明朗の將來を望んで、齊しく聖壽の萬歳、御代の秀吉が氏政・氏直に發した朝覲の勧告にも應じなかつた。よつて秀吉は、命を奉じて征討の軍を進め、城郭の堅牢、將卒の團結、物資の潤澤を恃んで小田原城を死守する北條勢に對し、長圍の策を立てて城内の攬亂を圖り、百餘日を費して遂にこれを陥れた。秀吉すなはち氏政・氏直の處分を行ひ、北條氏の舊領に家康を封じた。この間、奥羽の伊達氏、その他の諸侯も、秀吉の威風を望んで款を通じた。かくて、秀吉の海内統一の偉業は完遂され、應仁



聚樂第圖

安泰を壽ぎ奉つた。駐輦五日に及ぶ日夜の催松の縁を君の萬代と壽ぐ和歌の集ひ、舞樂管絃の演奏、善美を盡くした饗宴など、まことに空前の盛事であつた。更に秀吉は、皇居を修理し奉り公家の邸第を興して、勤皇の至誠を披瀝するとともに、統一完成の歩武を東に進めた。

當時關東では、北條氏が早雲以來の治績を誇つて八州を固め、秀吉が氏政・氏直に發した朝覲の勧告にも應じなかつた。よつて秀吉は、命を奉じて征討の軍を進め、城郭の堅牢、將卒の團結、物資の潤澤を恃んで小田原城を死守する北條勢に對し、長圍の策を立てて城内の攬亂を圖り、百餘日を費して遂にこれを陥れた。秀吉すなはち氏政・氏直の處分を行ひ、北條氏の舊領に家康を封じた。この間、奥羽の伊達氏、その他の諸侯も、秀吉の威風を望んで款を通じた。かくて、秀吉の海内統一の偉業は完遂され、應仁

以降約百年に亘る戦国の騒擾は始めて鎮まつた。時あたかも紀元二千二百五十年、後陽成天皇の天正十八年であつた。

二 政治の整備と文化の新生面

信長・秀吉の勤皇の事績

禁裡修理
御料所復舊
公家采地
神宮遷宮

① **信長・秀吉の勤皇** 信長は、父信秀の志を繼いで夙に勤皇の志厚く、上洛の後、先づ禁裡を修理し奉り、ついで供御の料を獻じたが、後更に御料所を復し朝儀を再興し奉り、また公家の采地を復してその窮乏を救ひ、京都の秩序を整へるとともに、久しく絶えてゐた神宮御遷宮の復舊を圖るなど、尊皇敬神の誠を致した。秀吉また、内宮・外宮の造進を遂げて式年遷宮の制を復活し奉り、聚樂第に後陽成天皇の行幸を仰いで盡忠の至誠を表し、更に皇居を修補し奉り、公家の邸第を興して、皇都の盛容を整へ、以て尊敬神の實を擧げた。

信長・秀吉の施政の特質

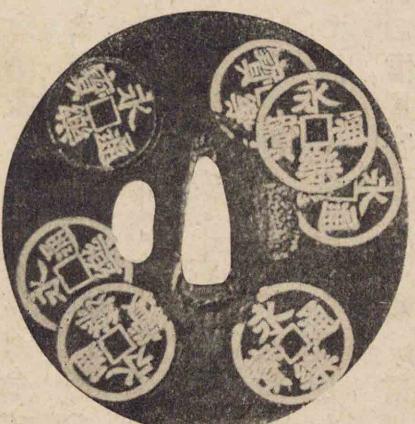
信長・秀吉の勤皇精神は、また撥亂反正の態度にも現れてゐる。即ち、兩者の海内統一と施政には、永年に亘る武家政治の後を承けて、なほ天下布武の色彩が濃厚ではあつたが、その意圖は、皇室を奉戴して四方に號令するにあり、足利氏に代つて幕府の再興を企てたものではなかつた。ひつきやう、その政治は公武折衷の性格を帶びたものであつた。信長・秀吉が、それぐる根據を京都に近き安土・大阪に構へ、また武人の最も光榮とした將軍職の宣下を期待せず、信長は右大臣、秀吉は關白・太政大臣に任せられて、無上の榮達に感激したことにも、それが窺はれる。

② **信長・秀吉の治績** 信長・秀吉は、海内統一の過程に於て、時代の氣運を洞察して政治の方針を定め、積極進取の精神を發揮して、著々施政の實績を擧げた。即ち、その施政方針は、地方政治の傳統を生かしてこれに全國的な組織を興へるとともに、經濟・文化

政治の方針

信長の治績

の新生面を助長して、新時代に即應すべき諸施設の整備を圖ることに存した。



傳 信 長 使 用 鐵 鍔

秀吉は、統一事業の進展に伴ない、全國に及ぶ田制統一の企画を進めた。即ち、天正十年山城の檢地(けんち)を魁に、爾後文祿四年に至る間、漸次五畿七道に檢田使(けんてんし)を派し、田畠を檢せしめて土地測定

など、専ら舊態の刷新に努めた。

の規格を定め、米穀の產額を計量せしめて田畠の等級を

分ち、これに應じて



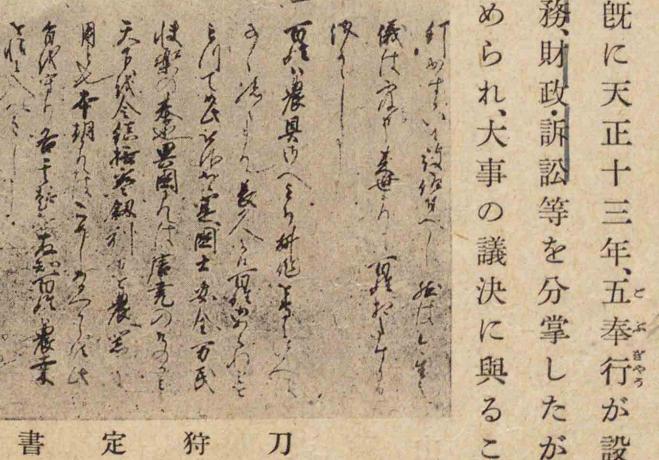
奉行の連署

税率を定めた。まさに大化以來の割期的な田制改革といふべく、世にこれを天正の石直、文祿の檢地などと稱する。秀吉はまた經濟活動を重視し、諸國の鑛山を開掘して巨額の金銀銅を收め、大小の判金、銀銅の貨幣を鑄造して通貨の統制を圖り、以て經濟界の進展に資した。こ

の間、施政の職制もまた次第に整ひ、既に天正十三年、五奉行が設けられて、京都の市政及び社寺の事務、財政・訴訟等を分掌したが、全國統一後、更に五大老・三中老が定められ、大事の議決に與ることとなつた。

國民生活の 安定

かくて秀吉は、統一政治の機構を確立するとともに、諸侯の所領を安堵して自治を容認し、大名の知行制度を樹立した。また秀吉は、海内の平定が略成ると、刀狩の令を發し、農民・寺院の武器を收めた。こゝに戦國亂離の世に秩序がもたらされ、國民生活の安定を見るに至つた。



桃山時代と 文化の特質

③ 桃山時代の文化 因習政治の打破、海外發展の雄圖に示された激刺たる時代の氣魄は、また文化創造の原動力ともなり、自由清新・豪壯・絢爛を特色とする新文化を展開せしめた。かかる文化の新様相は、信長の上洛から秀吉の薨去に至る約五十年の間に成熟したので、秀吉晩年の居住伏見の地を後世桃山と稱したことにより、これを桃山時代の文化と名づける。

信長・秀吉と 藝術

この間信長・秀吉は、文化生成の指導者として、特に藝術の進展に寄與し、文化またその氣宇・好尚を反映して、豪華絢爛たる桃山藝術は、當代文化の中核をなした。信長が、一藝一能に長じた者を優遇するとともに、工藝品を濫りに「日本一」と稱した從來の弊風を禁じ、嚴密な審査を経てその稱號を許したことは、粗惡な地方的工藝の水準を、全國的なものに高めようとする意圖の現れであつた。また秀吉が、幾多豪壯な建築を起し、畫匠・工匠を用ひ

てこれに雄麗な繪畫・彫刻を點じたことも、藝術の進運に與つて
大いに力があつた。かくて、永年藝術の殿堂を誇り來つた寺院
は、その地位を大名の城郭・邸宅に譲り、佛教と藝術との關係は、從
來に比して稀薄なものとなつた。

桃山美術の殿堂をなした城郭建築には、信長の安土城、秀吉の
大阪・伏見の兩城及び聚樂第等があり、今はわづかに遺構を留め
るのみであるが、その壯觀は前古無比と稱せられた。また防砦
たる城郭は、内に武將起居の殿宇を含めて、書院造の住宅様式が、
こゝに完成されるに至つた。城郭建築の規模の壯大は、大阪城
の遺構を以て窺ふべく、殿宇の豪壯華麗は、聚樂第の遺構たる西
本願寺飛雲閣・大徳寺唐門、伏見城の遺構たる西本願寺書院・同唐
門等に、これをしのぶことが出来る。

繪畫・彫刻もまた、城郭殿宇に附隨して發達した。繪畫は概ね

新文化の様 相 建築

繪畫・彫刻

建築

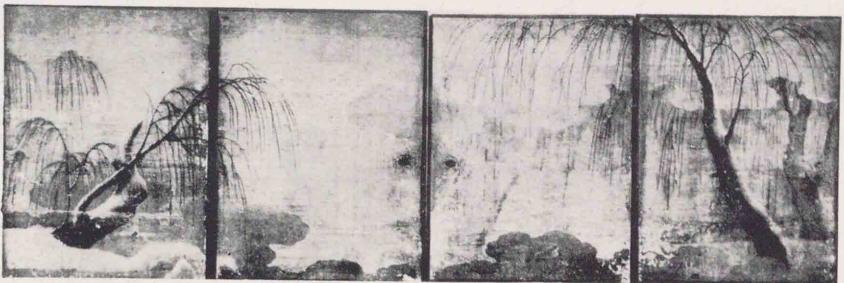


桂離宮 松琴亭

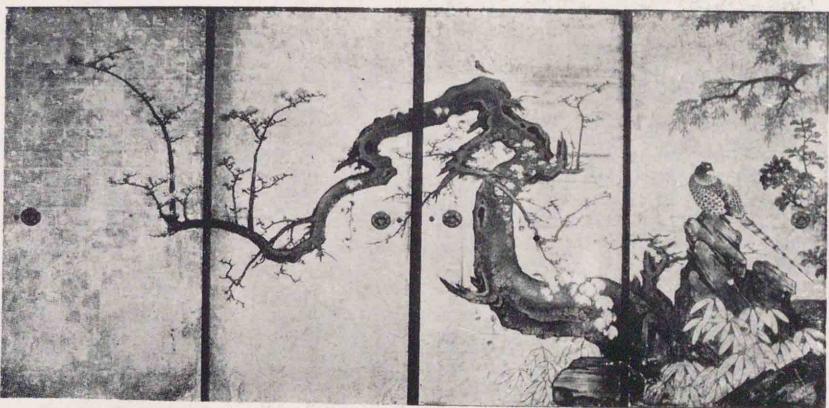


姫路城 天守閣

繪 畫



繪 褥 筆 德 永 野 狩



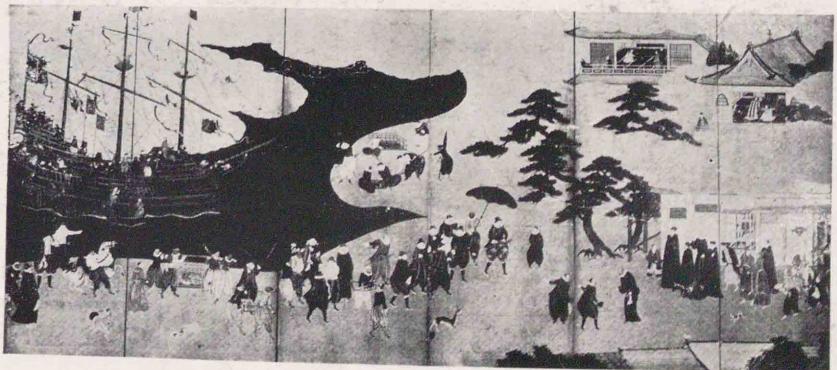
繪 褥 筆 樂 山 野 狩 傳

繪 畫

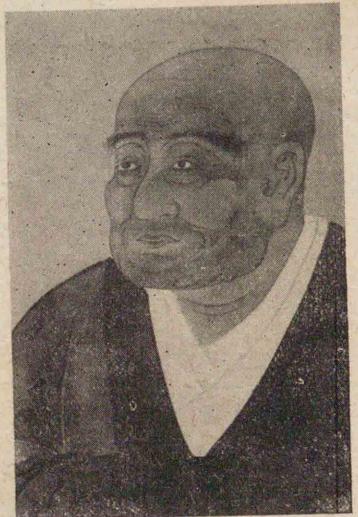


風 屏 畫 松 友 北 海

圖 猴 猿 筆 伯 等 川 谷 長



風 屏 蟻 南 筆 膳 內 野 狩

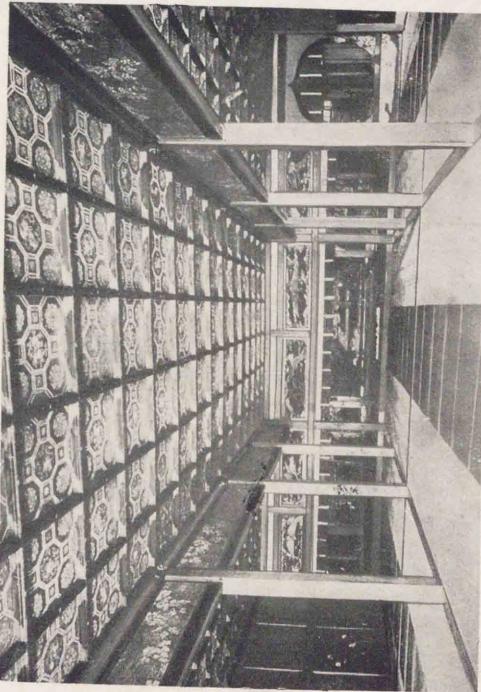


狩野山樂像

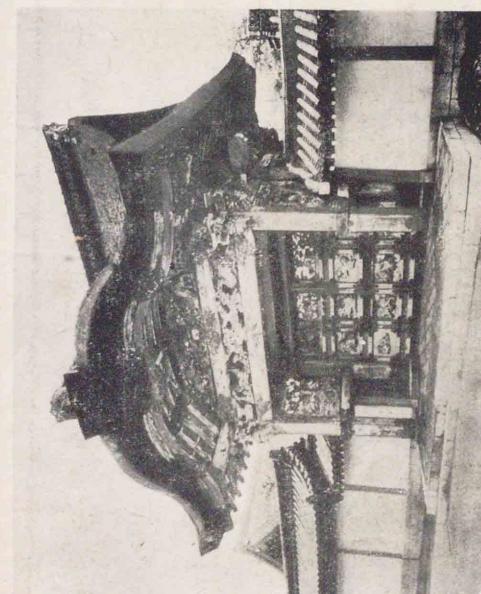
殿宇の障屏に用ひられ、構圖の雄大、意匠の放膽、博彩の豊麗相俟つて豪華絢爛の美を誇り、彫刻また欄間その他装飾に供せられ、意匠の卓抜、刀法の雄勁を謳はれた。狩野元信の孫永徳は信長・秀吉に擧げられ、その養子山樂は秀吉に用ひられ、ともに城郭・殿宇の障壁に彩管を揮つて幾多の大作をゑがき、雄麗豪華の畫趣よく樓閣の宏壯に適つた。その他、畫匠には、海北友松・長谷川等伯があり、また桃山末葉には、士民の生活を描寫せる風俗畫が現れて浮世繪の先驅をなしたが、一方歐人の渡來に刺戟されて、異國に対する時人の好奇心が高まり、南蠻屏風・世界屏風が作製されたことは、自由闊達な時代の風尚を反映するものである。

刻・周・建・築

西本願寺書院



同 唐門



同 飛雲閣



(殿拜社神野北) 股墓

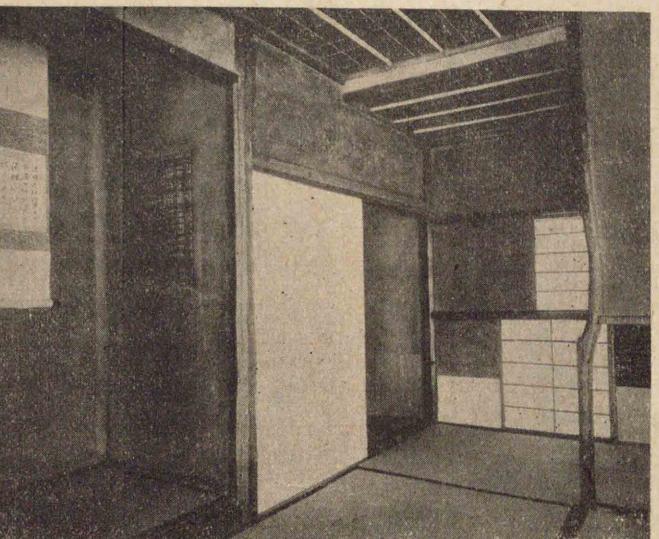


欄間 (南禪寺方丈)



映するものとして、注目に値する。

茶の湯と能樂



(庵珠真寺德大) 室 茶

藝術に現れた豪華絢爛の色調は、地方から出てなほ素朴單純を失はぬ武士の嗜好の反映であつた。

しかも、能動進取を旨とする新興武士は、新しき教養と慰安を求めて、茶の湯や能樂を愛好したのである。静寂枯淡を生命として東山時代に發源した茶道は、その後漸く士民の間に普及し、秀吉の頃、紹鷗の門に千利休せんりきゅうが出てその方式を大成し、秀吉



繪舟作 慢光

に寵用されるに及んで、大いに流行するに至つた。茶の湯の普及は、自らその形式化を伴ない、茶道の精神は稍々没却されるかたちとなつたが、その流行につれて、茶室の建築、茶器の製作に著しく進歩を見た。能樂また公武の間に愛好され、裝束・調度の類は、時代の影響を受けて華麗となり、一方士民の嗜好に投じて、阿國歌舞伎の發生を見ることがとなつた。

時代文化の中核をなすものは藝術であつたが、學術方面にまた見るべきものなしとしない。後陽成天皇の御好學を始め奉り、公卿諸大名等一般の好學心も芽生え、佛教の衰運とともに、儒

學も漸く獨立の兆を現した。また、天主教の傳播に伴なふ學林の開設によつて、國民は海外知識、西洋文物の理解を深め、海外發展の雄心を高めた。更に連歌、御伽草子の類が、國民生活の安定とともに普及流行し、次代に於ける町人文學興隆の素地を作つたことも、注目に値する。

かくて桃山時代の文化は、秩序を回復した新生の日本が、固有の明朗雄勁の精神を發揮して、あらゆる分野に新生面を開拓し、以て日本文化の傳統を更新したものと見られる。

三 國民の海外發展

國內統一と
海外發展

①新時代の海外發展 前代以來頓に盛となつた國民の海外發展は、幕府の凋落、群雄の相剋等の國內事情によつて、國民一部の壯舉たるに止り、しかもその活躍は、統制を缺いて區々間歇の憾

桃山文化の
歴史的意義

があつた。しかるに、今や信長・秀吉によつて海内の統一が完成され、こゝに新時代を迎へるに及んで、國民の海外發展も、統制・秩序を得て空前の活況を呈するに至つた。

天主教の傳播と海外渡航

信長は、海内統一の進路を阻む佛教徒の横暴に鐵槌を加へるとともに、天主教を保護して、これが布教の施設を京都・安土に營ました。かくて天主教は、忽ち京畿に弘まり、やがて關東・奥羽の地にも及んで、天正十年の頃、全國の信徒は凡そ十五萬を數へたといふ。九州では、大友宗麟・大村純忠・有馬晴信等が熱心な信者となり、天正十年、伊東満所(祐益)以下の少年使節を遠くローマに派遣した程であつた。かゝる擧のは是非はさて措き、氣銳の少年使節が、萬里の波濤を越えて異郷に渡り、堂々と使命をはたした意氣は壯とすべく、歸朝の際もたらした地圖・地球儀・時計等の文物は、國民の海外認識を深める糧となり、更にその海外發展心

を鼓舞する所があつた。かくて海外雄飛の邦人は、この頃に至つて益々増加し、暹羅・安南・呂宋等には、八幡船が開拓した地盤を承けて多くの日本町が營まれ、一種の植民自治領が形成される有様であつた。

また信長は、内外の情勢を洞察して貿易の振興を圖り、明朝鮮との通商を企てた。即ち、その晩年、朝鮮に使節を派遣して、貿易の振興を交渉せしめるとともに、室町の末葉以來中絶せる日明貿易再開のため、朝鮮に仲介の労を取らしめようとした。朝鮮はこれに應ぜず、信長また



遣歐少年使節像

秀吉の抱負

中道に斃れてその企圖は頓挫したが、信長の對外策は、やがて秀吉の繼承發展せしめる所となつた。

②秀吉の雄圖

内外の經綸に於ける秀吉の抱負には、信長に比

して更に大なるものがあり、天
一丈唐船、數百艘、一年半で、朝鮮
十ヶ國をも、海南島と琉球をも、
知り、うづみトノム、も、増強も、
あこに、す。
一大唐船を、在り、修、改、改、は、うる事、變、
吉の、海外、發展、を、策、せ、しめた。即
ち、その、抱、負、は、朝、鮮、支、那、は、も、と
より、臺灣、呂宋、印度、の、入貢、を、促
して、國威、を、遠、く、異、域、に、輝、か、す

とともに、貿易の利、を、占、め、て、更
に、國力、の、充、實、を、圖、り、以、て、日本
を、中、心、と、す、る、大、東、亞、を、建、設、す、る、こ、と、に、存、し、た。し、か、も、そ、の、雄

征明計畫と
朝鮮出兵

文祿の役

心壯圖は、事態の推移による改變を免れ得なかつたけれども、大陸進出の一歩を踏んで國民の海外發展心を旺盛ならしめ、朱印貿易を確立して南洋發展の基礎を固めた實績は、當時の内外情勢に鑑みて、最大の收穫であつた。

秀吉は、早くも九州征討の歸途、對馬の宗氏に命じて先づ朝鮮招諭の交渉を開始せしめたが、天正十八年、朝鮮の通信使が來朝するに、これに託して朝鮮國王に征明の意圖を示し、更に使を遣はして、征明の嚮導を求めた。しかるに、國王は明の勢威を憚つてこれを拒んだので、秀吉は出兵を決意し、征明計畫は、先づ朝鮮征討となつて、その端を開くに至つた。

③朝鮮の役 秀吉すなはち關白を辭し、沿海の諸國に命じて船舶を建造せしめ、水夫を徵集し、肥前の名護屋に城を築いて本營となすなど、萬端の用意を整へ、文祿元年、十數萬の大軍を陸海兩

高麗 中 捷 抄

軍に編成し、舳艤相衡んで名護屋を發せしめた。釜山に上陸した我が軍は、破竹の勢を以て北進し、早くも京城を陥れ、小西行長は國王を逐うて平壤を略し、更に明の援軍は、國王を擒にするなど、我が武威は、釜山上を破り、加藤清正また遠く咸鏡道に進んで二王子を擒にするなど、我が武威は、釜山上後四箇月ならずして、朝鮮全土を風靡するに至つた。京城陥落の報を得て意氣大いに揚つた秀吉は、やがて來るべき支那經營の抱負を述べ、みづから朝鮮に渡つて諸將の督勵、半島の經營に當らうとしたが、徳川家康・前田利家等に諫められ、後陽成天皇また軫念あらせられ、秀吉の渡鮮を止め給

ふに及んで、これを中止した。この間我が軍は、軍紀を嚴守して良民を憐み、掠めず取らず、よく武の精神を發揚した。しかるに、戰線の擴大とともに、我が軍の活躍も、諸方に蜂起した民軍に後方連絡を妨げられ、また我が水軍の不備によつて、守備兵の増員、糧食の補給が摃らず、京城以北の占領地域の維持は、容易ならぬものがあつた。

敗報に驚愕した明は、行長に就いて講和の交渉を始めるとともに、俄に大軍を以て來襲したが、小早川隆景、立花宗茂等がこれを碧蹄館の戰に擊破するに及んで、意氣沮喪し、専ら外交に恃んで局面の打開を圖つた。秀吉すはなち和議の條件を示し、行長をして折衝に當らしめた。しかるに、彼に



明の國書

慶長の役

欺瞞の術策多く、慶長元年、明使が大阪城に於て秀吉に國書を呈するに及び、秀吉は、書辭の無禮に明の不遜をとがめ、その眞意を見抜いて和議を抛ち、再征を決した。

和議の進行とともに召還された諸將は、再び軍容を整へて朝鮮に渡り、南鮮諸城の守備を固めて南下せる敵軍を破つたが、飢饉疫疾に妨げられて奥地への進出を斷念し、専ら南鮮の經略に當つた。清正が明の大軍に包圍され、飢餓・酷寒に曝されながらも蔚山城を死守し、堅忍持久、友軍の來援によつて遂に敵の圍を破つたのは、この間のことである。しかるに慶長三年、秀吉が伏見城に薨するや、遺命によつて外征は中止され、島津義弘の武勳を物語る泗川の快戦を名残に、全軍の歸還を見るに至つた。

外征の效果



朝敵陣味方供養碑

朝鮮の役と
明の衰運

ことを示した。しかも、嚴正にして寛容な軍の行動は、朝鮮の我が國に對する理解を深めしめ、かくて我が武威は海外に輝くとともに、國民の海外發展心は更に高められた。また出征の諸將が活字をもたらして印刷術の發達に資し、優秀な陶工を伴ない歸つて製陶・製磁の業を進めたことも、收穫の一つであつた。

朝鮮の役が明に與へた影響には、甚大なものがあつた。かねて明は、北に元の餘衆の侵寇に苦しみ、南に我が八幡船徒の活躍

に悩まされたが、兩難を免れて立直る暇もなく、この役に際會した。

しかも明は、この役に於て莫

大な軍費を費消し、また遼東の兵備を動員したため、その後財政の大破綻、女眞族の制馴に苦しみ、衰運を速めたのである。

(四) 外教の禁止

秀吉は、初め天主

禁教の宣告

教を保護し、宣教師を厚遇したが、やがて、その不謹慎な態度と信徒の不穩な行動とに、疑懼の念を抱くに至つた。かくて、九州征討の際、外教蔓延の實情を詳にするや、

これを國風に悖る邪法と斷じ、歸途博多に於て、突如天主教の禁

書定の禁止教外

禁止後の天
主教

止、宣教師の國外追放を宣告した。

外教の禁止を斷行した秀吉も、通商はこれを繼續せしめたので、この後も宣教師の竄入が絶えなかつた。殊に秀吉が呂宋に入貢を強要したため、通商條約締結の命を受けて宣教師が來朝し、ひそかに布教に從事する有様であつた。偶慶長元年、土佐に漂着したイスパニヤ船の船員が、自國の勢威を誇稱し、宣教の目的が國土の侵略にあることを揚言するに及んで、秀吉は、外教禁壓の一步を進めて宣教師・信徒を検索し、二十六人を磔刑に處した。しかも、宣教師の竄入はなほ跡を絶たず、信徒また各地に潛在して、天主教は隠然たる勢力を保ちつけた。

朱印制度の確立

⑤貿易の獎勵 秀吉は、外教禁壓・貿易獎勵の兩策を圓満に遂行するため、既に文祿元年、いはゆる朱印制度を確立した。朱印制度とは、海外渡航の我が商船に公認の證たる朱印状を與へて、貿

易を國家の保護の下に置くとともに、交易に伴なふ天主教の潛入を防遏しようとした制度であり、戦國の諸雄が創めた印判船の制を採つて、これを新事態の下に統合したものである。

當時、我が國は、政治の整備、産業の發達によつて海外投資の餘力を生じ、國民また秀吉の雄圖、歐人の渡來に刺戟されて、父祖傳來の海外發展心を更に高めた。かくて、海外知識、航海技術の著しき進歩とともに、海外貿易は空前の活況を呈するに至つた。中でも、博多・長崎・堺・京都の商人は、朝鮮・支那から呂宋・印度にまで進出して盛に通商を營み、年とともに數を増す朱印船渡航の英姿は、波浪に搖らぐ八幡船の孤影に比して、國力増進の表象とも見られた。秀吉の東亞經綸の抱負は、またかかる朱印船の活躍と呼應するものであつた。

秀吉と時代
④時代の轉換 上を奉じて尊皇敬神の誠致し主に仕へて誠

實よくその遺業を完成した秀吉は、蓋世の大志を時運に投じて國威の發揚を企て、惜しくも中道に歿したが、その功業は燦として國史に輝いてゐる。しかも、母に事へて孝道を全うしたその行實は、時代の性格を反映する豪放・進取の事歴とともに日本的大英雄の典型であつた。かつては浮草の如き流浪漂泊の身が、遂に位人臣を極めて醍醐の櫻花と顯榮を競ふに至つた波瀾重疊の生涯こそ、時代の性格を反映して、まさに夢中の夢に比すべきものであつた。晩年に於ける生活の豪奢は時運の導く所、閑遊の數寄また英雄の餘裕を示すものであつた。

けりとよひゆきとまへけり
あそひやくわいわせみゆ
ね

秀吉の辭世

秀吉薨後の形勢

慶長三年彌生の半ば、醍醐の宴

關原の戰

に天下の花を見をさめて程なく病んだ秀吉は、時局の收拾を慮つて憂苦懊惱しきりに閣老を召して懇々と後事を託し、遂にその生涯を終つた。遺命を受けて前田利家は、大阪城にあつて世子秀賴の輔育に當り、徳川家康は、伏見城に於て庶政を掌つたが、程なく利家が薨するに及んで、ひとり家康の聲望のみ盛となつた。この頃既に家康は、内大臣の顯職にあり、關東を領して勢威群を抜き、その指令は諸侯を壓して、專制の傾をさへ帶びた。

こゝに石田三成は、豊臣氏の將來を慮つて家康を除かうと企て、秀吉恩顧の諸侯を誘ふに及んで、かねて諸侯の間に兆せる文治・武斷兩派の確執は表面化して、天下二分の形勢を誘致し、遂に關原の戰を惹起した。豊臣・徳川兩氏の興廢は、この決戦の歸趨によつて明らかにせられ、諸侯悉く家康の下風に立つに至り、徳川氏の勢威は、こゝに決定的なものとなつた。

眼を海外に轉ずれば、約百年の長きに亘つて東洋に活躍を擅にした葡・西兩國は、この頃漸く衰へ、代つて新興のオランダ・イギリス兩國が、東洋に進出しようとしてゐた。オランダの獨立は本能寺の變の前年のことであり、イスパニヤの無敵艦隊（てきかんたい）がイギリスの海軍に敗れたのは、あたかも聚樂第行幸の年に當つてゐた。しかも、世に天下分目の戰と稱する關原の戰が起つた紀元二千二百六十年は、イギリスが東印度會社（とういんじゆかいしゃ）を創立した年に當り、オランダの東印度會社設立は、その二年後のことであつた。

この頃我が國では、かかる歐人勢力の消長を外に、秀吉の死を契機として、國內秩序の整調が行はれつゝあつた。内外比照すれば、時代はまさに轉換過渡の様相を現してゐたのである。

時代の轉換

師範國史 中卷 終

内外時代對照表・年表

内外時代対照表

| 元紀 | 代時 | 幕立創府 | 鎌倉時代 | 吉野時代 | 室町時代 | 戰國時代 | 安土桃時代 |
|------|-----------|------------|-------|-------|------|------|-------|
| 1852 | | | 鎌倉 | | | | |
| 1934 | 幕倉鎌立創府 | 元役永文役安弘 | 時代 | 建中 | | | |
| 1941 | 寇役永文役安弘 | 武興 | 吉野時代 | 建武時代 | | | |
| 1993 | 山龜後京皇天幸還都 | の仁應る終亂 | 室町時代 | 室町時代 | | | |
| 2052 | 2052 | 幕町室亡滅府の吉秀統 | 戰國時代 | 戰國時代 | | | |
| 2137 | (女) 韶 | の仁應る終亂 | 安土桃時代 | 安土桃時代 | | | |
| 2233 | (女) 鞍 | 幕戸江立創府 | | | | | |
| 2250 | (真) | | | | | | |
| 2263 | 會度印東英立設社 | | | | | | |

年表

表

事

項

時代

| 八三 | 土御門天皇 | 八二 | 後鳥羽天皇 | 八一 | 安徳天皇 | 御代 | 年紀元 | 年表 |
|-----------------|--------------------|--------------|-----------|-----------|-----------|--------------|--------------|--------------|
| 一八六五 | 一八五六 | 一八六三 | 一八五八 | 一八五三 | 一八五一 | 一八四〇 | 一八四四 | 一八四〇 |
| 元建 | 正建 | 同 | 同 | 同 | 建 | 同 | 壽治 | 年年 |
| 久仁 | 治久 | 久 | | | | | 承永 | 號 |
| 二三 | 元九 | 四三 | 元五 | 二四 | 元二 | 元年 | 四年 | 四年 |
| 年年 | 年年 | 年年 | 年年 | 年年 | 年年 | 年年 | 年年 | 年年 |
| 藤原定家等新古今和歌集を撰進す | 賴朝薨じ子賴家嗣ぐ(建仁二年任將軍) | 後鳥羽上皇政を聽かせ給ふ | 賴朝上洛 | 守護地頭の設置 | 源賴朝侍所を置く | 源賴朝公文所問注所を置く | 源賴朝公文所問注所を置く | 源賴朝公文所問注所を置く |
| 忠父子殺さる | 忠父子殺さる | 忠父子殺さる | 忠父子殺さる | 忠父子殺さる | 忠父子殺さる | 忠父子殺さる | 忠父子殺さる | 忠父子殺さる |
| 北條義時執權となる | 北條義時執權となる | 北條義時執權となる | 北條義時執權となる | 北條義時執權となる | 北條義時執權となる | 北條義時執權となる | 北條義時執權となる | 北條義時執權となる |

代時倉鎌

代時安平

| 九六 後醍醐天皇 | | 九五 花園天皇 | | 九四 後二條天皇 | | 九三 後伏見天皇 | | 九二 伏見天皇 | | 九一 後宇多天皇 | |
|----------|---------|---------|------|----------|---------|---------------|--------------|----------|-----------|----------|--------------------|
| 一九九三 | 一九九二 | 一九九一 | 一九八四 | 一九八二 | 一九八〇 | 一九七六 | 一九六一 | 一九六〇 | 一九五七 | 一九四二 | 一九三四 |
| 同 | 同 | 元 | 正 | 同 | 元 | 正 | 永 | 同 | 同 | 弘 | 建文 |
| 弘 | 中 | 亨 | 和 | 安 | 應 | 安 | 仁 | 同 | 同 | 治 | 永十一 |
| 三 | 二 | 元 | 元 | 二 | 元 | 五 | 二 | 五 | 五 | 四 | 元年 |
| 年 | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 |
| 六波羅の陥落 | 天皇伯耆に着御 | 正中の變 | 元弘の變 | 隱岐遷幸 | 楠木正成の舉兵 | 度會家行類聚神祇本源を著す | 後宇多法皇院政を罷め給ふ | 幕府德政令を定む | 觀尊に菩薩號を賜ふ | 時宗圓覺寺を建つ | 文永の役 |
| | | | | | | | | | | | この頃中部兼方の釋日本紀成る |
| | | | | | | | | | | | 時宗元使を龍口に斬る |
| | | | | | | | | | | | 一遍時宗を開く |
| | | | | | | | | | | | 幕府博多灣に石壘を築く |
| | | | | | | | | | | | 異國征伐の企圖 |
| | | | | | | | | | | | 再び元使を博多に斬る |
| | | | | | | | | | | | 弘安の役 |
| | | | | | | | | | | | 時宗圓覺寺を建つ |
| | | | | | | | | | | | 北條高時執權となる |
| | | | | | | | | | | | 北條時賴執權となる |
| | | | | | | | | | | | 宗尊親王將軍に任せらる |
| | | | | | | | | | | | 十訓抄成る |
| | | | | | | | | | | | 道隆來朝す |
| | | | | | | | | | | | 蒙古の使始めて来る |
| | | | | | | | | | | | 北條時賴執權となる |
| | | | | | | | | | | | 日蓮立正安國論を時賴に致す |
| | | | | | | | | | | | 日蓮法華宗を開く |
| | | | | | | | | | | | 建長寺成る |
| | | | | | | | | | | | 古今著聞集める |
| | | | | | | | | | | | 後鳥羽法皇隱岐に崩御さる |
| | | | | | | | | | | | 道元永平寺を開く |
| | | | | | | | | | | | 泰時貞永式目を定む |
| | | | | | | | | | | | 道元宋より歸朝し曹洞宗を傳ふ |
| | | | | | | | | | | | 新補地頭の設置 |
| | | | | | | | | | | | 道元入宋加藤景正これに従ひ製陶を學ぶ |
| | | | | | | | | | | | 北條泰時執權となる |
| | | | | | | | | | | | 親鸞一向宗を開く |
| | | | | | | | | | | | 道元宋より歸朝し曹洞宗を傳ふ |
| | | | | | | | | | | | 和田義盛殺さる |
| | | | | | | | | | | | 義時侍所別當となる |
| | | | | | | | | | | | 實朝害さる |
| | | | | | | | | | | | 藤原賴經鎌倉の主となる |
| | | | | | | | | | | | この頃愚管抄成る |

| 八四 順徳天皇 | | 八五 仲恭天皇 | | 八六 後堀河天皇 | | 八七 四條天皇 | | 八八 後嵯峨天皇 | | 九〇 龜山天皇 | |
|---------|------|---------|------|----------|------|---------|------|----------|------|---------|------|
| 一八七九 | 一八八〇 | 一八八一 | 一八八二 | 一八八三 | 一八八四 | 一八八五 | 一八八六 | 一八八七 | 一八九二 | 一八九三 | 一九〇四 |
| 承 | 承 | 承 | 承 | 嘉 | 元 | 貞 | 貞 | 延 | 寛 | 同 | 文 |
| 久 | 久 | 久 | 久 | 祿 | 久 | 安 | 安 | 應 | 長 | 同 | 永 |
| 三 | 三 | 三 | 三 | 仁 | 三 | 三 | 三 | 元 | 元 | 同 | 應 |
| 年 | 年 | 年 | 年 | 二 | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 | 五 |
| | | | | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 |
| | | | | 道 | 北 | 條 | 時 | 道 | 尊 | 親 | 宗 |
| | | | | 元 | 條 | 時 | 賴 | 隆 | 王 | 王 | 尊 |
| | | | | 永 | 時 | 賴 | 執 | 來 | 將 | 將 | 親 |
| | | | | 平 | 賴 | 執 | 權 | 朝 | 軍 | 軍 | 王 |
| | | | | 寺 | 執 | 權 | と | す | に | に | と |
| | | | | 開 | と | な | る | 道 | 任 | ぜ | ら |
| | | | | く | る | る | る | 隆 | ぜ | ら | る |
| | | | | | | | | | 十 | 十 | 訓 |
| | | | | | | | | | 訓 | 抄 | 成 |
| | | | | | | | | | | | る |
| | | | | | | | | | | | |

| 一〇三 後土御門天皇 | 一一三 後花園天皇 | 一二一 稱光天皇 | 一〇八 後小松天皇 |
|-------------|-----------|---------------------|------------------|
| 一一三九 | 一二二七 | 一二二〇 | 一二一九 |
| 同文應明仁元年 | 寛正祿正德吉元年 | 同應永二十一年 | 同同同同永八年 |
| 九年 | 十年 | 三十六年 | 四十五年 |
| 蓮如山科本願寺を創建す | 御仁の亂勃發す | 足利成氏の亂 | 義満將軍を辭し太政大臣に任せらる |
| | 雪舟明に遊學す | 足利古河に走る(古河公方の起) | 義満北山に金閣を營む |
| | | 足利學校の再興 | 幕府三管領・四職を定む |
| | | 義持關東管領 | 應永の亂 |
| | | 義持關東管領となる | 義満商人肥富僧祖阿を明に遣はす |
| | | 足利義教再び明と好を修む | 世阿彌花傳書を著す |
| | | 足利義政足利政知を伊豆堀越に置き關東を | 義持關東管領足利持氏を討つ |

| 九九 後龜山天皇 | 九八 長慶天皇 | 九七 後村上天皇 | 九六 後醍醐天皇 |
|----------|---------|--------------|---------------------|
| 二〇五二 | 二〇四五 | 二〇一九 | 一九九八 |
| 同同元九年 | 弘和元年 | 同同同正興延平國元十四年 | 同同延同建元武元三年 |
| | | | |
| | | | 京都還幸 新政の開始 |
| | | | 護良親王鎌倉に遷らる |
| | | | 中先代の亂 足利尊氏の謀叛 |
| | | | 足利尊氏の西走 多多良濱の戦・湊川の戦 |
| | | | 長年等戦死 建武式目成る 吉野遷幸 |
| | | | 金崎落城 石津の戦 藤島の戦 |

| 一七 後陽成天皇 | 一六 正親町天皇 |
|--|---|
| 二二五〇 二二四八 二二四七 二二四六 | 二二四五 二二四五 二二四三 二二四二 |
| 同 同 同 天正 十八 十六 十五 十四 年 年 年 年 | 同 同 同 同 同 同 同 同 天正 十九 八 六 四 三 元 三 二 元 年 年 年 年 年 年 年 年 |
| 小田原征伐 秀吉太政大臣に任せられ 豊臣の姓を賜はる 九州平定 秀吉關白に任せらる 神宮正遷宮舊に復す 聚樂第行幸 刀狩の令發布 海内平定 大牧長久手の戦 秀吉關白に任せらる 羽柴秀吉山城の檢地を行ふ 天目山の戦 本能寺の變 山崎の戦 | 信長皇居を修理し奉る 姉川の戦 元就歿す 信長延暦寺を焼く 三方原の戦 武田信玄歿す 室町幕府の終焉 長篠の戦 信長安土城を築く 上杉謙信歿す 信長本願寺光佐と和し 大阪石山城を收む 大友大村有馬三氏使節をローマに遣はす 秀吉大阪城を修築す 五奉行の設置 |
| (代 時 國 戰) 代 時 山 桃 土 安 | |

| 一四 後柏原天皇 | 一五 後奈良天皇 | 一六 正親町天皇 | 一七 後土御門天皇 |
|--|---|--|---|
| 二一七三 二一七六 | 二二〇三 二二〇六 | 二二二〇 二二二三 | 二一四〇 二一四三 |
| 弘治 二十一年 元年 | 天文 十五年 十八年 二十二年 二十三年 二十四年 二十五年 二二〇九 二二一〇 二二一一年 二二一九年 二二二六年 二二二七年 二二二八年 | 永祿 三年 四年 五年 六年 七年 八年 九年 十年 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二四〇 二四一 二四二 二四三 二四四 二四五 二四六 二四七 二四八 二四九 二五〇 | 永 十三年 十四年 十五年 十六年 十七年 十八年 十九年 二十一年 二十二年 二十三年 二十四年 二十五年 二二〇九 二二一〇 二二一一年 二二一九年 二二二六年 二二二七年 二二二八年 |
| 祥瑞五郎太夫明より歸り青磁の法を傳ふ 北條氏康關東を定む ボルトガル船種子島に來り鐵砲を傳ふ ザビエル鹿兒島に來り天主教を傳ふ 大内義興遣明船のこととを管す 北條早雲小田原城に據る 宗祇新撰菟玖波集を撰す | 上杉憲政越後に走り長尾景虎に頼る 嚴島の戦 | 桶狭間の戦 川中島の戦 | 一條兼良足利義尚のために樵談治要を著す 義政東山に銀閣を營む |
| 足利義輝松永久秀に害せらる 毛利元就尼子義久を降し中國を平定す 織田信長御料所回復の勅を拜す | 清順尼の勸進により外宮の式年遷宮復興す | 信長の上洛 | |
| (代 時 國 戰) 代 時 山 桃 土 安 | | | |

| | | | |
|------|-------|------------------------------|------------|
| 二二五一 | 天正十九年 | 豊臣秀吉印度總督及びフィリピン諸島に書を送つて入貢を促す | 五大老の設置 |
| 二二五二 | 文祿元年 | 秀吉朝鮮に出兵す | 渡海船に朱印狀を興ふ |
| 二二五三 | 同 | 秀吉書を高山國に送り入貢を促す | |
| 二二五四 | 同 | 小笠原島發見さる | |
| 二二五六 | 慶長二年 | 伏見城の築造 | |
| 二二五七 | 同 | 檢地訖り稅法を定む | |
| 二二五八 | 同 | 徳川家康内大臣に任せらる | |
| 二二五九 | 同 | 秀吉明使の表文の無禮を憤り再征を議す | |
| 二二六〇 | 同 | イスパニヤ商船土佐桂濱に漂着す | |
| 五年 | 四年 | 宣教師等二十六人を長崎に刑す | |
| 五年 | 三年 | 朝鮮再征の師を發す | |
| 五年 | 二年 | 呂宋・大泥國入貢す | |
| 五年 | 二年 | 醍醐の花見 | |
| 五年 | 二年 | 秀吉薨す | |
| 五年 | 二年 | 外征諸將の召還 | |
| 五年 | 二年 | 朝廷日本書紀を版行せしめ給ふ | |
| 五年 | 二年 | 島津氏高野山に朝鮮役彼我陣歿者の供養碑 | |
| 五年 | 二年 | オランダ船豊後に漂着 | |
| 五年 | 二年 | 家康乗員英人ウイリアムアダムスを引見す | |
| 五年 | 二年 | 青木弘松下衛 | |
| 五年 | 二年 | 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 | |
| 五年 | 二年 | 東京市神田區小川町三丁目八番地 | |
| 五年 | 二年 | 新 著作権者 文部省 | |
| 五年 | 二年 | 定價金七拾錢 | |
| 五年 | 二年 | 師範國史 中卷 | |
| 五年 | 二年 | 代表者 專務取締役 森下松衛 | |
| 五年 | 二年 | 印刷者 青木弘松 | |
| 五年 | 二年 | 印刷所 大日本印刷株式會社 | |
| 五年 | 二年 | 振替口座 東京九六四〇二番 | |
| 五年 | 二年 | 東京市神田區小川町三丁目八番地 | |
| 五年 | 二年 | 昭和十六年六月廿五日發行 | |
| 五年 | 二年 | 昭和十六年六月二十日印刷 | |



不許
製

著作権者 文部省

定價金七拾錢

師範國史 中卷

發行者 教學圖書株式會社

代表者 專務取締役

森下松衛

印刷者 青木弘松

衛

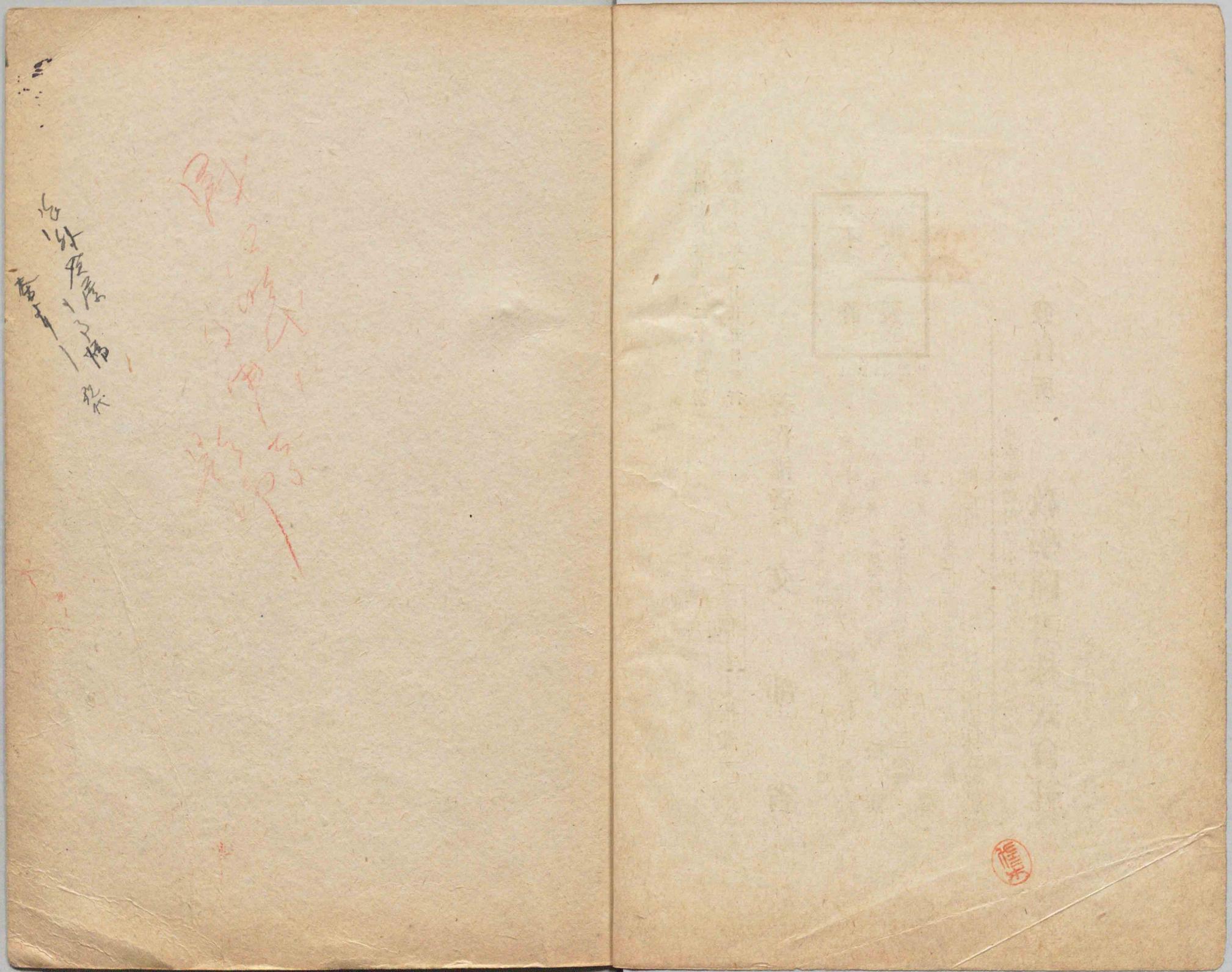
東京市神田區小川町三丁目八番地
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所

教學圖書株式會社

東京市神田區小川町三丁目八番地

振替口座 東京九六四〇二番





広島大学図書

2500026585

